

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第八十七卷「芸術、文化、言語、文学（二の七）」

人工言語、国家内共同体言語の制作と社会実験（第一期～第三期岩崎式言語体系、岩崎式日本語）

編纂、監修 岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第八十七巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、人工言語、国家内共同体言語の制作と社会実験（第一期～第三期岩崎式言語体系、岩崎式日本語）に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 ○歳～十九歳

第二編 二十歳～二十九歳

第一期～第二期共感覚言語スラフオーリア・プロジェクト

第一期～第二期岩崎式日本語詳説 第一期岩崎式日本語・第一期～第二期岩崎式日本語比較

第一期～第二期岩崎式日本語比較

第一期～第二期岩崎式日本語詳説 岩崎式日本語序論

第一期～第二期岩崎式日本語詳説 岩崎式日本語の思想体系

第三期岩崎式日本語宣言

第三期岩崎式日本語に関する質問実験

第三期岩崎式日本語文法入門

第三期岩崎式日本語文法解説（1）

第三期岩崎式日本語文法解説（2）

第三期岩崎式日本語文法解説（3）

第三期岩崎式日本語文法解説（4）

第三期岩崎式日本語文法解説（5）

第三期岩崎式日本語文法解説（6）

第三期岩崎式日本語文法解説（7）

第三期岩崎式日本語文法解説（8）

第三期岩崎式日本語文法解説（9）

第三期岩崎式日本語文法解説（10）

第三期岩崎式日本語文法解説（11）

第三期岩崎式日本語文法解説（12）

第三期岩崎式日本語文法解説（13）

第三期岩崎式日本語文法解説（14）

第三期岩崎式日本語文法解説（15）

第三期岩崎式日本語文法解説（16）

第三期岩崎式日本語文法解説（17）

第三期岩崎式日本語文法解説（18）

第三期岩崎式日本語文法解説（19）

第三期岩崎式日本語文法解説（20）

第三期岩崎式日本語文法解説（21）

第三期岩崎式日本語文法解説（22）

第三期岩崎式日本語文法解説（23）

第三期岩崎式日本語文法解説（24）

第三期岩崎式日本語文法解説（25）

第三期岩崎式日本語使用者分布

第三期岩崎式日本語真格

第三期岩崎式日本語我燈一覽表

- 第三期岩崎式日本語・質問実験回答
- 第三期岩崎式日本語・動詞の連続性
- 第一期岩崎式日本語・第一期～第二期岩崎式日本語言語変遷過程
- 第三期岩崎式日本語・言語変遷過程
- 第三期岩崎式日本語・話題格
- 第三期岩崎式日本語・北海道方言
- 第三期岩崎式日本語文法解説における参考文献一覧
- スラフオーリア研究会サイト更新
- 第三編 三十歳～三十九歳
- 第四編 四十歳～四十九歳
- 第五編 五十歳～五十九歳
- 第六編 六十歳～六十九歳
- 第七編 七十歳以降
- 第八編 著作者の一部および著作者が岩崎純一であるもの
- 第九編 著作者が岩崎純一であるもの

第二編 二十歳〜二十九歳

第一期〜第二期共感覚言語スラフォーリア・プロジェクト

二〇〇九年四月十二日 起筆

二〇〇九年四月二十四日 擱筆、公開

共感覚者読字障害者は、感覚症状が著しい場合に、しばしば現代英語現代日本語

が理解（読解・読字）できないのに、古代日本語少数民族の古形言語なら読め、理解できるといふ驚くべき言語能力を呈することで知られる。 管理人も、現代英語現代日本語が理解できないにもかかわらず、日本の古典は難なく

読めるという逆転現象が、共感覚の著しいとき、特に対女性ミラータッチ共感覚の著しい

ときに起こる。すなわち、日本人が現代英語を学習するようになったこと、現代日本語

を現代英語の文法で記述するようになったことと、共感覚を失ったこととの間には、無視できない密接な関係がある。

http://www.sciencedirect.com/science?_ob=ArticleURL&_udi=B6T

[24-3WP2J4F-3&_cove](http://www.sciencedirect.com/science?_ob=ArticleURL&_udi=B6T)

rDate=04%2F01%2F1999&_alid=419259375&_rdoc=1&_fmt=&_orig=search&_qd=1&_cdi=4908&_sort=d&view=c&_acct=C000050221&_version=1&_urlVersion=0&_userid=10&md5=aabda989d23001dfb869d3002c1b4559 (英語の読字障害でありながら、日本語は読める症例)

スラフォーリアは、二〇〇九年現在、次のような過程を経て、個人により制作されているクレオール日本語である。ただし、制作段階で、実際に性犯罪・暴力犯罪被害などで現代英語・現代日本語を発（読解）できなくなった女性の被験者などに用いてみて、言語としての機能を果たした場合の文法構造を多分に採用している。

クレオール言語とは本来、意思疎通ができない異なる言語の貿易商人らなどの間に自然発生した言語（ピジン言語）が、その話者たちの子供によって母語として話されるようになった言語を指すが、スラフォーリアのクレオール性とは、すなわち、現代英語・現代欧州語の文法に追従し続ける現代日本語に対する日本人共感覚者の違和感を解消し、近世以前の日本人の知覚世界に近いこれら日本人共感覚者の知覚世界を記述し得る言語を、語彙だけは現代日本語をもとにして構築する点にある。

スラフォーリアは、管理人が幼少期に遊戯の中で創作した言語（語彙・文法）を基層とする。（この言語は、のちに学習する近代化以前

の日本語、特に奈良・平安日本語の文法構造、現在の世界の少数民族言語のそれに酷似する。すなわち、名詞動詞といった単語の音韻構造のみが異なる。この上に、当サイトに訪れた共感覚者の世界認識に見出した特徴をも網羅し得る文法構造を再構築する。

さらに、その文法と酷似した文法構造が二〇〇九年も現存する以下の少数民族の言語・古形言語を言語学的に分析して、スラフオーリアが一つの自然言語として成立するに足る通時性と共時性を備えるまでに、熟考を加える。

二〇〇九年現在、スラフオーリアの文法のもととなっている自然言語の一覧

●は死語、(人)は人工言語

○日本語(奈良以前〜江戸時代) ○朝鮮語 ○中国語 ○ニヴフ語 ○アイヌ語 ○ハンティ語 ヴアフ 河方言 ○ルシヤン語 ○オーストロネシア語族(タガログ語などのフィリピン型格配列) ○オビ・ウゴル諸語(ハンティ語、マンシ語など) ○モルドビン語、チェレミス語、ジリヤン語など ○ドラヴィダ語族(タミル語など) ○チベツト語 ○ポリネシア諸語 ○バスク語 ●フルリ・ウラルトウ語族 B.C.2300~B.C.1000: ●フルリ語 B.C.9c~B.C.6c: ●ウラルトウ語 ○バントウ諸語(スワヒリ語など) ○マヤ語族 ○オーストラリア原住民諸語(ジルバル語、ワルング語など) ○パプア諸語(アメル語など) ○エスキモー・アレウト語族(イヌイット語、ユピッ

ク語など) ●シユメール語 ○カルトヴェリ諸語(グルジア語など)、○アブハズ・アデイゲ諸語 ○ナフ・ダケスタン諸語(タバサラン語など)

○ハイダ語 ○ナ・デネ語族(ナヴァホ語、トリンギット語、●イヤック語:2008.1月消滅) ○マスコギ語族(マスコギ語など) ○スー語族(チェロキー語、ダコタ語など) ○トウピ語族(トウピ語、グアラニー語など) ○イロクオイ諸語(モホーク語など) ○テュルク諸語 ○ツングース諸語 ○モンゴル諸語 ●印欧祖語(B.C.4000:グルガン説) ●古英語(5~11c.中) ○ラテン語 ○ギリシヤ語 ○サンスクリット ○マラーティー語 ○バルト・フィン諸語(フィンランド語、エストニア語など) ○ハンガリー語 ●アツカド語 B.C.2000~B.C.1000 ●ヒッタイト語 ○ベンガル語、ペルシヤ語、アルメニア語 4c.: ○アラビア語 ●エジプト語

○日本手話 ○点字

スラフオーリアの知覚世界を記述できない言語の一覧

○現代英語 ○現代スラヴ語派(ロシア語など) ○その他の現代ゲルマン語派(ドイツ語、アイスランド語、デンマーク語、スウェーデン語、オランダ語) ○現代ロマンス諸語(フランス語、スペイン語、イタリア語など) ○バルト語派(ラトビア語、リトアニア語

など)

○ウルドゥー語、ヒンディー語 ○インターリングア (人) ○ヴォ
ラピュク (人) ○エスペラント (人) ○イド語 (人) ○ノヴィア
ル (人) ○エプン語 (人) ○コンピュータ言語 (人) ○ログラン
(人) ○ロジバン (人) ○その他、多くの印欧語母語話者・共感
覚者による人工言語 (Mani など) (人)

第一期〜第二期岩崎式日本語詳説 第一期岩崎式日本語第一期〜第
二期岩崎式日本語比較

二〇〇八年二月二十日 起筆

二〇一〇年十一月二十一日 加筆

当ページは一応、ブログの形式になってるので、日々考えてい
ることを書いていきたいと思えます。言語学に詳しい方だけに向け
てと言うよりは、僕と同じく言語に深い思慮のある共感者・自閉
症者に向けて書くということ兼ねたいと思えます。

最近、言語学に詳しい方から僕と同じ共感者・アスペルガー症
候群の方まで、色々な方からメールを頂いています。例えば、以下
はロジバンという人工言語の掲示板で、スラフオーリアの話題が出
ています。ロジバンは、自然言語の文法として自然発生することは
あり得ない文法を持ちますが、主格言語話者にも能格言語話者にも

対等で、西洋的世界認識・西洋的「自我」に特化したエスペラント
とは異質の人工言語です。

<http://www.4rocketbbs.com/141/lojban.html>

(引用はじめ)

トラウマによる精神障害を被っているAさんが“主格”の部分
伏せて言う *klaku soida* は文法的なロジバン表現です。 *klaku* の
×] はそもそも主格でも能格でもないですから、たとえ *mi klaku*
soida としても、 *mi* はAさんにとっては(純一さんがスラフオー
リアの解説で指摘なされたように)「私で」などとされ、「私が」と
はされません。「で」か「が」か、といった要素をロジバンのPSは
指定しません。そういった助詞の選択がロジバンでは強要されな
いのです。

(引用終わり)

僕はロジバン話者ではないので、ロジバン自体にはあまり詳しく
ないですが、上記の方の言う通りです。

【ロジバン】

● *lo nanmu bato klama*

(であるもの、男、完了、着) ← (男が着いた。)

● lo nanmu lo nanla pu viska

（であるもの、男、であるもの、少年、過去、見）←（男が少年を見た。）

これに該当するスラフオーリア文を、意格を使って書いてみます。

【スラフオーリア】（「トラヲ」は「男」の意のスラフオーリア固有語。）

● Torawo tukki a tan. （絶対格）

（男・着きあたん。）

● Torawo nga | shonen- | mi-a-ta. （意格・絶対格）

（男・んが 少年・見あた。）

可能などころは漢字にしてみます。

ロ ● 「lo 男 ba'o 着」

ス ● 「男着 i a tan」〔着き〕は、「i」+「き」ではなく「tuk」+「i」

ロ ● 「lo 男 lo 少年 pu 見」

ス ● 「男 nga 少年 見 a ta」

「男」が意格「nga」で標識されているので、これらの文に出てくる「い」「あ」「たん」「た」は、「意我」という「舞台」で展開される世界認識であることとなります。例えば、「たん」は、助動詞には珍しいスラフオーリア固有語ですが、現代の「た」と古語の「たり」の間のニュアンスです。二文目の「あ」も、「意我の“あ”」です。分かりやすくするため、後者は漢字以外の部分に「nga」を付けて、二文とも並べ替えてみます。例えば、「nga-ta」は、「意我が自覚する過去のニュアンス」です。

「lo」 「男」 「ba'o」 「着」

「φ」 「男」 「tan」 「着」 「i」 「a」

「lo」 「男」 「lo」 「少年」 「pu」 「見」

「nga」 「男」 「φ」 「少年」 「nga-ta」 「見」 「nga-a」

このように、整然とした対応が生まれます。

両動作ないし状態が（あるいは全ての動作・思惟活動）が、人類史上、あるいは幼児期の言語習得過程上、いつ身に付いたかをロジバンは指定しませんが、逆に言えば、ロジバンが今後、それがいづ身に付いたかという視点を加味していくとしても、文法が変わることがないということが、ロジバンの強みでしょう。

一方、スラフォーリア（ここでは意我）では、「着」という単純動作をする自己意識は絶対格、「見」という意志的動作をする自己意識は意我、というように、ニュアンスが変化します。つまり、「前者のIo=φ」、「後者のIo=nga」となります。多くの言語で、「着く」「転ぶ」「落ちる」といった単純動作をする主体よりも、「見る」「触る」「押す」といった意志的動作（つまり、自我と他我が比較的早い時期から意識される動作）をする主体のほうに、時代的に先に絶対格以外の「格」が付く傾向があります。

「ba'o=tan」（完了・完成）、「pu=nga-ta」（過去）については、きれいに対応できると思います。

残る「i」や「a」も見てみます。スラフォーリアの文法用語でも、「i」は「動詞の活用」、「a」は「言（げん）」と分けて呼んでいます。が、今のように整理してみると、両者が根底を同じくする要素であることが分かります。このことは今日、stamona様からBBSにいただいた質問への回答と同じことだと言えます。

スラフォーリアでは、日本語の「読み」や「読ま」の違い（動詞の活用）は、極端に言えば「木（き）」や「木（こ）の葉」の違い、「目（め）」と「眼（ま・なこ）」の違い（名詞の母音交替）と同じであると見なします。見なすと言っても、これに近い説を唱えた言語学者は、過去にけっこういますし、もしかしてこれが日本語の本性ではなからうかと私も考えています。

前回挙げた共感覚かつアスペルガー症候群の女性の例文に、

「電車あ乗るあとき、切符あの買い方んのよく分らないいふ症状出るんありひりす。（擬人希我文）」

というのがありましたが、

「でんしゃあ」↓「でんしゃー」
「のるあとき」↓「のるあーとき」
「きつぷあ」↓「きつぱー」

となるのも、「電車というモノに乗るといふコトをするとき、切符というモノの買い方・んの（希格）・・・」という「主客未分離の自己意識から客観的事態を抽出する」ための母音交替であると言えます。これによって、この女性は僕に対して、「社会生活の中で、どういふ動作に苦悩を覚えるか」を表明できています。

希我言の「あ」と能格言の「あ」は、ニュアンスが違います。このことは、主体の「私」や「男」に付く格によって宣言されています。電車の例文も、冒頭等に「私んの」とあれば、その後は「電車・んの・あ・乗る・んの・あ・・・」としなくても「あ」だけを付していけばよいです。

私の研究の被験者でない方においても、共感覚や自閉症の程度が重度になればなるほど、現代日本語よりもスラフォーリアが本能的

に理解できると言う驚くべき人がいることから、スラフオーリアがかなりヒトの成長過程を忠実に写し取れているということは、言うてよいのだらうと思います。

スラフオーリアでは、今のところ、十八の格詞と三つの言の組み合わせによって、自己意識の共時的・通時的位置を五十四通りに言い分けることができますが、言を増やしすぎると、我々の母語は現代日本語ですから、重度の共感覚者・自閉症者が接語を覚えきれなくなりそうです。もし増やすとすれば、「動詞の活用・言は、母音交替である」という先の信念に従うこととなりますから、「か」や「さ」といった子音始まりの接語ではなく、「う」や乙類の「い」「え」「お」、つまり奈良時代までには存在したとされる三つの乙類母音を設けて、スラフオーリアの母音を八つとするつもりです。

しかし、ようやく日本語が初めて、『万葉集』や『古事記』や『日本書紀』として）記述された頃には、すでに母音は乙類が消滅して五つに収斂しつつあったわけで、『古事記』あたりは、もはや怪しい）、今の重度の共感覚者・自閉症者も、そこまで世界認識がさかのぼる人は、実際は言語活動自体が成り立たない人がほとんどで、そうでない人でも、今の三つの言「ん」「い」「あ」がちょうど心地良いようです。

……

第一期～第二期岩崎式日本語詳説

岩崎式日本語序論

2005年2月20日 起筆

2010年11月23日 改筆

岩崎純一

サピア・ウォーフの言語的相対論の「強い仮説」においては、思考は言語と一致する。言語を離れた思考の存在は否定される。一方、「弱い仮説」においては、非言語的な思考については譲歩して認めるが、それでも人間の思考が言語（母語）によって制限・束縛を受けることは否定しない。「強い仮説」に全面的に与する学者もいないが、言語を離れた、人類に普遍的な思考を認める学者は、なかなかいない。

もし「強い仮説」に近寄るとするなら、例えば、「現在も生き残る少数民族の世界認識は、現代欧米文明圏の言語の母語話者には存在しない」との主張に与することになるし、「上古代日本人の恋愛感情は、英語の影響を受けた現代日本語を母語とする現代日本人には存在しない」との主張にも与することになる。さらに、「上古代日本人男性的な対女性認識世界は、上古代日本語のほうが現代日本語よりも自らの世界認識に合致していると自覚している特定の現代日本人男性にしか体験できない」との主張にも、与することになる。そして、私の見てきた多くの精神疾患女性や私自身の世界認識は、どちらかと言えば極論に思えるこの「強い仮説」に、奇しくも新しい観点からさらなる根拠を与え、そして現代の非英語母語話者・非欧米諸国語母語話者の世界認識こそが人類普遍の世界認識である可能性さえ示し、さらに「強い仮説」と「弱い仮説」との対立の立て方そのものが極めて欧米的なものであって、解離性障害などを抱える社会的少数者の世界認識も、前者同様、人類に普遍的で重要な世界認識を呈しているとの結論を下すことになるであろう。

現代日本語と現代欧米語とは、実際には大きく異なる文法を持つてはいるが、現代一般の日本人は、言語に何らかの障害がない限りは、母語である現代日本語をいったん英語的世界認識に翻訳して認識していると言っても過言ではないだろう。すなわち、現代一般の日本人が従っている「言語」とは、「日本語」ではなく、「英語的世界認識で記述され、学校文法化された日本語」である。我々が日本語にも存在すると過信している「主体と客体の峻別、主語と述語と目的語の一定の関係、自動詞と他動詞の分類、能動態と受動態の区別、過去・現在・未来を直線的にとらえて疑わない時制なる概念、時制から完全に独立した相なる概念」、こういった文法範疇は、全て日本語には存在しないはずの、外国語の文法

論理と世界認識に基づくものである。

今、私はこのように、外国語、特に現代英語や現代欧州語の文法論理と世界認識によって記述される日本語、今の多くの日本人の世界認識に基づく日本語を、「現代日本語」と呼称するのである。そうとすれば、「否応無しに現代日本語を母語としつつも、そこから放り出される少数の日本人」が発生しているはずである。この点で、サピア・ウォーフの仮説の是非と、「我々の母語は現代日本語であるから、我々の思考は現代日本語の範囲内にある」ことの是非とは、全く異なった命題である。すなわち、日常生活においては、重度の言語障害もなく現代日本語を操っているように見えても、ある特定の条件を付けた実験を目の前にした場合には、現代日本語の文法に反するかのように見える回答を示すこともあるのである。事実、共感覚と呼ばれる感覚、離人症、そして、女性に対する排卵・月経感知能力を持つ私のような日本人男性や、重度のシャーマン的な解離性障害、統合失調症を呈する日本人女性の世界認識は、サピア・ウォーフの仮説を支持しないように見えるし、事実、「弱い仮説」にしか与しないのである。しかしそれは、現代日本や現代欧米の一般健常者の普遍的な言語コミュニケーション能力に、共感覚者であっても、あるいは巫女的・シャーマン的感性があっても、訓練で達することができるということを意味するものではない。むしろ、「現代日本人・現代欧米人の世界認識のほうが、人類の言語史上、極めて異質な事態を呈するのであって、巫女的日本人女性の世界認識こそ人類にとって普遍的なそれである」との私の洞察が本当に的外れかどうか、岩崎式日本語の試みを通じて検証したく思うのである。

そして、いわゆる現代日本の一般健常者は、現代日本語の文法、さらに古典日本語の文法をも、英語・欧米語の論理に従って記述していると述べたが、これは「そのような現代日本人の脳であっても、今なお潜在的には日本語的な日本語を失ってはいない」という楽観的な態度をさえ許すものではないのだろう。むしろ、多くの現代日本の一般健常者の世界認識それ自体が、ほとんど現代欧米人のそれに移行していることを否定するならば、果たして我々は自国内の社会的少数者を「解離性障害者」や「統合失調症者」と名指したであろうか。

現代日本人の世界認識の特徴は、世界的に見ても、サピア・ウォーフの「強い仮説」を支持する好例の一つであると見ざるを得ないかもしれない。我々日本人男性が、現代英語・現代欧州語化された日本語を用いて生活し、女性なる性を認識し、自然風景を目にしていることがいかなることであるか、今一度見直さなければならない。

桜や梅が、中国原産だとは言っても、日本の地に植えればなぜか美しさの質が違うように、日本語が中国語や朝鮮語や欧州語から多大な恩恵を得ていることを意識しつつ、それでも日本語は日本語でなければならない。しかし、現代日本語が、「美しい心」を持つ日本人を自己疎外して、「鬱」を「鬱病」と病理化し、「日本人女性らしさ」を「解離性障害」と障害化する言語と成った以上、我々はせめて岩崎式日本語に浸っている時間だけは、現代日本語を「何だか味気ない」外国語と思い、岩崎式日本語を「古き良き、そして新しき

やまとことば」と見なすことは許されるのではないかと思う。

考案者：岩崎純一

サイト：<http://www.iwasaki-j.sakura.ne.jp/>

第一期～第二期岩崎式日本語詳説

岩崎式日本語の思想体系

2005年7月20日 起筆

2008年11月13日 改筆

岩崎 純一

私が二十歳前後に考えた新言語草案の一つに過ぎなかった岩崎式日本語を、成人した今、日本語や英語と同じく一つの整った「言語」として改めて記述しようと思ったきっかけの一つは、私がネットで自らの共感覚や絶対音感、精神病理学上の自己の解離感、衣服を着た女性を目視するのみで性周期を察知できる能力などの特殊能力を告白したことであった。その中で出会ってきた、社会的な外圧や性的被害などによって解離性障害・強迫性障害・鬱・カプグラ症候群・コタール症候群・統合失調症などに陥った日本人女性の中に、人前で言葉が話せなくなり、現代日本語や現代英語への理解を失ったにもかかわらず、長らく失っていた幼少期の「分化していない自己意識」が蘇り、同時にこの岩崎式日本語草案の世界観と文法はほぼ完全に理解できた女性がいた。そして、これらの女性はその後、その未分化的自己を自覚したまま、再び現代日本語での「言葉」を何とか取り戻した。

あるいは、精神疾患とまでは言えないまでも、私が交流した他の日本人女性の中にも、先進諸国の公用語や現代日本語の文法はうまく理解できないのに、岩崎式日本語の文法や日本の古語、アメリカ・インディアン語の文法は分かっている女性がいる。さらに、脳卒中などで「失文法・錯文法」と呼ばれる状態に陥り、助詞の使い方が「おかしくなった」高齢者の男女も、高度に抽象論理的な今の先進諸国語から順番に理解できなくなっていく、不思議にも日本の古典や先住の少数民族語、岩崎式日本語の文法世界への理解は、完全に保っている。

しかし、解離性障害者女性・性的被害者女性たちにとって現代日本語や現代英語よりも私の岩崎式日本語のほうが受け入れやすかったという事実は、岩崎式日本語のほうが「言語として」勝っているという意味ではないだろう。そうではなくて、岩崎式日本語は「言

語 (language)」なる概念を解体する言語であると言える。それは、一見すると「西洋哲学」と「東洋哲学」という対比は正しいかのように見えるが、哲学者ハイデガーの言うように、「哲学なる学問体系自体が西洋白人のものであって、東洋に哲学はない。東洋哲学は哲学の解体である」という見方が真髓を突いているのと同じであろう。あるいは、哲学者木田元氏の言うように、「ニーチェ以降の哲学は反哲学である」という見方が真髓を突いているのと同じであろう。また、世の中に「宗教なる概念は西洋のものである。宗教とはキリスト教のことである。仏教は宗教ではない」という、私も賛同する立場があるのと同じであろう。

すなわち、おそらく岩崎式日本語は言語ではない。先の女性たちの「心」を、何らかの形で岩崎式日本語が完全に記述し得ているということだけを、岩崎式日本語は意味する。これは「言語」の問題ではなく、「心」の問題である。岩崎式日本語は、重度の解離を引き起こした日本人女性の「心」を記述するための重要な要素を何か含んでいるに違いない。言語コミュニケーションが難しくなったその女性たちと、いったいどのようにして私が会話したのか、なぜ私の言語観がそれに有効であるのかを説明するために、岩崎式日本語なる言語を持ち出そうとしているにすぎない。

また、岩崎式日本語は決してフェミニスティックな言語ではない。欧米の言語と文法とが白人男性を中心に記述されてきたものだという見方、日本語とはそもそも女性的な言語だという見方は、もはやありふれたものだろうし、確かに私もこれを否定はしない。欧米言語の男性中心主義に対しては、ラーダンなどをはじめとする、女性の手による人工言語が挑戦してきた。一方で、日本人は近代以降、自分たちの日本語を無理やり欧米言語の文法用語で説明してきた。私の目的とは、そのような現代日本語が記述し得ない「日本人女性の或る心理状態」が存在することを実証し、それを根拠として、それらの日本人女性が現代日本語から逃亡して駆け込める避難所たる岩崎式日本語を作っておくことである。

私は、人間の心が「傷つく」、あるいは人間が「精神障害を負う」ことは、すなわち自らの世界認識・言語認識を過去に遡及させることとほぼ同義であると考えようになった。また、これらの「社会的に特殊な」人たちとの出会いは、私がなぜ幼少期ほど日本の古典が理解できたか、なぜ成長するにつれて、いくつかの共感覚や解離症状を失うとともに現代英語が理解しやすくなったかを、見事に説明してくれた。

宮沢賢治はかつて、自らの故郷岩手をエスペラント風にもじった「イーハトーブ」と名付けながら、一方では、日本語への極度の愛着や法華経視点での国粋思想（国柱会での活動など）を保ち続けた。全世界的な言語観と国粋的な言語観とは、実は表裏一体で、「古き良き日本的なもの、共感覚的なもの、自閉症的なもの、巫女的なもの」が「世界的なもの」であった時代が人類にはあったとの確信が宮沢賢治にはあったと私は思う。すなわち、今や文化依存症候群の一種とされ、日本人の脳にしか知覚・認識されていないとされる「対人恐怖症」と呼ばれる精神状態も、むしろ時代をさかのぼれば「普遍的」でありうるのではないか。

私にとって、岩崎式日本語の目的とは、「解離症状や性的被害を背負った日本人女性のイーハトーブ」に当たるもの、現代日本語が切り落としたものを、「合法的に」「仮想世界」の中で再現することに他ならない。私のように、「言語は具格言語から能格言語、さらに主格言語と移行していく」といったことを、実際の社会的少数者との交流から見出すという手法をとった人は、私の知る限りでは言語学者にも人工言語作者にもいないように思うため、私の持つ言語思想体系が正しいかどうかは、今後も長期に渡って不明だろう。ただし、私自身、共感覚に生きると同時に、思春期の頃まで具格・能格言語世界に生きていたし、それらが理解できるのに主格言語は理解できないという状況が、人間にはあり得るのだということをも身を持って知っている。

言語学者の論を実証するのは、言語学者ではなく、主格言語よりも前の世界認識に生きている人自身であるべきである。

岩崎式日本語の特徴は、幼児や重度の解離性障害者女性らの世界認識が、本当に言語の歴史をさかのぼったところに位置しているのだということを示している点、それから「具格言語や能格言語段階にとどまっている人を“言語障害者”と見なさない」という親社会的少数者の姿勢をとっている点、また「自我」の流動について考察している点である。岩崎式日本語はおそらく、人工言語であると同時に、思想・哲学的な試みでもある。

私の場合、幸いにも今までに数十人規模での先の社会的少数者女性との交流があるため、こういった人たちの豊かな感性が功を奏し、私が人工言語を作るときに自動的に適切なフィルターがかかる。いわば、岩崎式日本語は「人工言語道楽人間のための人工言語」にならずに済み、「或る一部の日本人女性にとってどうしても必要となる人工言語」に収まっていくとよいと思う。つまり、「閉鎖的に開放された言語」というのが正しいのかもしれない。ある意味で、私や社会的少数者女性にとっては、岩崎式日本語は「人工言語」ではなく、「自然言語」でもある。

あえて岩崎式日本語が受ける可能性のある批判的意見をおおまかに挙げると、二点になると思う。

「このような言語を構築して、本当に解離性障害者女性たちが自立意識を持てるだろうか。社会に再び出ていく助けになるだろうか」

「従来の言語学用語から大幅に外れているところが多々あるが、どう折り合いをつけるのか」

まず前者からだ。確かにそれができれば一番よいのかもしれないが、私の岩崎式日本語はそこまでは問えないだろう。むしろ、私としては、そういった人たちが社会とうまくやっていけるようにするにはどうすればよいかを言語から考えたいとの思いは全くなく、今のままで、このような少数者女性らの頭や体のはたらきが言語の歴史においてはどこに位置するのかを一緒に知りたいという思いがあるのみだ。また、こういった方々が社会に

出るようにわざわざ世話するという現行の日本社会のあり方も、正しいことだとは全く考えていない。

この言語の試みは、非常に珍しい、おそらくは「ここがゴールだ」などという時点がない試みだとは思いますが、本当に悩み苦しんでいらっしゃる方々の内面を、現代日本語で説明できる（言語障害のない）私が説明してみたいという欲求があるのみである。

それから後者だが、例えば、今の言語学で「能格」という概念で表される範疇は、私の言語では「空格」「識格」「意格」「活格」などと多数に分かれている。そして、この根拠は、言語学的分析ではなく、実際の性的被害者女性や日本の幼児の世界認識の分析の結果として、考え出した概念である。そもそも現行の言語学による「能格」という考え方も、私から見れば一抹の「よどみ」にすぎず、誤っているとさえ見える。

実際に、その「よどみ」を埋めるために「活格」という概念が編み出されたが、それでもまだ言語学者によっては、「能格」よりも原始的な概念が「活格」だと言う人もいれば、いや、「能格」よりも後に出てきたのが「活格」だ、と言う人もいる。私は、「能格」や「活格」という概念にも、実はあまり首肯できていない。言語の実態が変わっているのではなく、解釈とネーミングが変わっているだけである。私は、ほとんどの日本人には「が」が「主格」だと認識されているが、重度の解離性障害者女性には今でも「能格」と認識されていると見る。それに、主格言語の成立過程には、「西洋的自我」の成立、及びキリスト教の世界観との関わりがある。

「性的被害を受けた女性の世界認識は、能格的である」などという私の説が妥当かどうかは、言語学的にはではなくて、そういった女性との実際の交流によって判断されるべきであると考えます。

そういう意味で、従来の言語学に当てはまるかどうかと言うよりも、そのような女性たちの言うことを言語障害なき重度共感覚者である私がそのまま書き綴ったらどうなるかということ、そういった人たちと一緒に知っていければと思う。言語学そのものを目的とするのではなく、本当にそういった人たちに使ってみて「安心感を覚える」言語探究でなければならぬ。

■ 岩崎式日本語のクレオール日本語性

クレオール言語とは本来、意思疎通ができない異なる言語の貿易商人らなどの間に自然発生した言語（ピジン言語）が、その話者たちの子供によって母語として話されるようになった言語を指すが、岩崎式日本語のクレオール性とは、すなわち、現代英語・現代欧州語の文法に追随し続ける現代日本語に対する日本人精神疾患の違和感を解消し、近世以前の日本人の知覚世界に近いこれらの人々の知覚世界を記述し得る言語を、語彙だけは現代日本語をもとにして構築する点にある。

岩崎式日本語は、私が幼少期に遊戯の中で創作した言語（語彙・文法）の一部を基層と

する。（この言語は、のちに学習する近代化以前の日本語、特に奈良・平安日本語の文法構造や、現在の世界の少数民族言語のそれに酷似する。すなわち、名詞や動詞といった単語の音韻構造のみが異なる。）

この上に、私の元に訪れた解離性障害者女性や性的被害者女性の世界認識に見出した特徴をも網羅し得る文法構造を再構築する。

もっとも、現代の一般日本人が岩崎式日本語を習得する際に難しい点は、そもそも日本の古典語の膨大な教養を要求する点である。しかも正式な表記は、漢字の字体も正字体によっている。すなわち、文法と世界観だけは、完全に性的被害者女性たちの知覚世界を網羅していながら、語彙と表記については、すでに日本人であること、中でも日本の古典語の教養のあることを要求する。さらには、文法用語などにも、仏典の知識を要求する「言葉遣い」が多い。これは一見すると、「柔らかい」岩崎式日本語の目的に反するが、しかし岩崎式日本語は、一般の医者や心理カウンセラーが解離性障害者女性や性的被害者女性に話しかけても効果のなかったところに、なぜ私の言語観が「効いたか」、どうして実際にそういうことが起こり得るかをあえて説明するための言語であって、最初からエスペラントのような一文明圏での普及型言語を志向するものではない。むしろ、日本語についての高い教養を持った日本人が、先述のような被害者女性たちの知覚世界を「内側から」語れるかという試みなのである。

さて、ここで私が岩崎式日本語の試みで思索・検証しようとしている思想・言語観を列挙してみたい。

- 重度の解離性障害者女性らの世界認識は「反主格言語的」であるとの拙説を言語学的に検証すること。
- サピア・ウォーフの仮説は、少なくとも「弱い仮説」一つを取っても、近現代西洋人及び近現代日本人においては一見すると「真」であるが、それが「真」であることは、西洋一神教的人間観において生じた「健全者」が最近数百年間の先進社会では大多数を占めていることのみによって保証されるものであり、「沈黙の言語」ないし幼児期（母語習得以前）の世界認識の記憶を持つ我々重度の共感覚者や解離性障害者女性ら（例えば、「赤」「red」なる単語を獲得する前からこの色を見て、「まぶしいな」と思考していた時期の記憶がある我々）にとっては、「思考は言語に先立つ」こと、「実存は本質に先立つ」ことは自明であり、また人類・動物に普遍の知覚世界は「五感」ではなく神経科学上の「共感覚」や精神病理学上の「解離感」であることを自然言語の分析によって実証すること。
- さらに、現在でも能格的構造を残す言語社会においては、解離性障害者や共感覚者や自閉症者の割合が高く、また障害者とも見なされない可能性を検証すること。
- また、「前母語的世界認識は、すでに母語的である」ということをも同時に実証すること。その母語性を保証するものは、和辻哲郎の言うところの「風土」に他ならず、日本におい

ては日本の風土であることを、解離性障害や共感覚や自閉症の観点から実証すること。すなわち、「赤」なる日本古語単語は、その色が指していた領域が日本語の獲得以前から日本の原始人の幼児に知覚されていなければ生じないのであり、この拙説が真であることを検証すること。

●人類にとっての「普遍文法」があるとするならば、それはむしろ解離性障害者や共感覚者や自閉症者の知覚世界に基づいて「能格言語的」さらに「前能格言語的」に記述されなければならず、チョムスキーの生成文法は近代西洋社会で生じた「健常者」の主格主語言語の概念に該当する人間の世界認識しか記述し得ないこと。すなわち、西洋の言う「普遍文法」は、「西洋特化型の孤立文法」でしかないこと。また、人類は進化の過程で、人類総解離性障害者・共感覚者・総自閉症者の時代を通過した可能性を、言語学的手法によって考察すること。また、イエスペルセンをはじめとして主張されてきた「英語の将来における漢語的孤立語化」説の誤謬を実証すること。

●解離性障害者女性らの「自我」の極めて不安定なあり方が、人類以外の動物にとっては普遍的であることを考察すること。

●私が持つ、遠方から女性の排卵や月経を感知する共感覚能力も、他の共感覚と同様に男性に普遍的なものであったのならば、その共感覚を喪失する前の日本人男性の用いていた言語においてこの対女性共感覚が記述されていなければならず、それがまさに平安時代の「にほひ」「かをり」「ね」までは続いていたであろうことを検証すること。例えば、「にほひ」は、女性の視覚的魅力と嗅覚的魅力とを同時に表しうる。このような共感覚論を岩崎式日本語に適用し、あえて現在の一般日本人男性の矮小化した対女性性的能力との差別化を行うことで、男性に普遍であったこの能力を一般日本人男性に岩崎式日本語によって伝達可能かを検証すること。

●岩崎式日本語独自の日本の古典解釈、和歌解釈を確立すること。

●以上の視点を踏まえ、私（岩崎純一）自身の有する共感覚と離人症（解離性障害の一分類）を含む各種の特殊感覚能力や解離性障害、神経症、その他の性的・暴力的被害による精神疾患に陥った日本人女性、アスペルガー症候群・自閉症の日本人のうち、現代日本語の発語に支障を被った人について、文法理解のうちどれを失ったかを逆算し、失った部分にのみ新たな単語と文法とを設けて、現代日本語で誤りとされる文法を許容する状態を作り出す。

このとき、音節がほぼ必ず子音または声門閉鎖音で開始し、ほぼ必ず母音で終始する日本語及びポリネシア諸語など環太平洋地域の音韻を基層とし、さらに、非日本人型の音韻認識と言語脳を持つ印欧語族から朝鮮語など北方アルタイ語までの音韻組織からは必ず外れるように留意する。

ここで、現時点において岩崎式日本語創案過程で判明していることをも列挙しておく。

●解離を重度に引き起こしている日本の性的被害者女性には、岩崎式日本語が最も自然に感じられ、現代日本語が次に自然であり、英語が最も理解できていない。主格言語を放棄して、能格言語化した現代日本語を話す。

●アメリカ精神医学会は、DSM-IV において解離性障害や統合失調症を操作主義的に分類している。世界保健機関（WHO）は、解離性障害の一つである離人症を統合失調症に近いものと見なして ICD-10 の別枠に分類している。また、DSM-IV は、多重人格障害を解離性障害の一種と見なして解離性同一性障害と呼称している。さらに、どちらの疾病分類も「神経症」の概念を放棄している。罹患当事者や私からすれば、甚だ欠点の多い分類となっている。

●重度の解離性障害に陥った女性や性的被害を負った女性などにおいて、述語論理の各記号・規則への理解が失われるのは同時ではない。（述語論理への理解が共時的に成立するのは、一般健常者の脳においてのみであって、ある規則が理解できていながらある別の規則が理解できていない脳の様態が見られる。）

これを現存する日本語で言えば、例えば、「AとB」なる文法が理解できて「AかB」なる文法が理解できていない性的被害者女性がいる。岩崎式日本語においては、「自分がどの通時的な位置にいるか」は、自己領域を表す燈詞によって宣言することができ、この問題を解決する。

●特に離人症性障害では、いかに重度であっても現実検討能力が維持されることが知られる。例えば、自己と身体とが一致せず、自己だけが他者の身体や他物体に移動したように感じられる場合でも、実際の自分の身体の範囲は了解している。あるいは、「AかB」なる文法が理解できなくとも、それが理解できないという自分を理解している。現代日本語が話せず岩崎式日本語は理解できることを了解している自己が、どうしてこれらの日本人に生じているかを検証したい。

●性的被害によって解離性障害に陥った日本人女性の言語認識は、もとより器質的・遺伝的な問題とされる自閉症者の言語認識に同一である可能性がある。これが正しいかどうかの検証を岩崎式日本語でも試みる。

●重度の解離性障害に陥った女性や性的被害を負った女性は特に、平安時代の一般日本人女性や現代日本の地方の方言と同じ文法を示す。頻繁に見られる特徴の例は以下の通り。

- ★「を」の脱落。（私は髪とく。）
- ★中動態の使用範囲の著しい拡張。
- ★「と」の脱落。（あなたがこの本ほしい言う。）
- ★主体に「の」を付ける。（春の来て、）
- ★動詞の活用の崩壊。（私、これ食べれ。）

●現代の解離性障害者女性の世界認識が上古代日本人女性のそれに近いことについての、女性の色彩認識の側面からの検証は、拙著『音に色が見える世界 「共感覚」とは何か』（岩崎純一 PHP 新書）に詳しく述べた。

●岩崎式日本語が理解できるのは、9割以上が女性であり、これは女性の数が共感覚者の8割、あらゆる解離性障害の7～9割以上を占める既存のデータに一致する。また、岩崎式日本語理解者の男性は、ほとんどが重度の言語障害・自閉症に含まれ、そのことを自力で発信できないと推定される。

以上を踏まえ、なるべく多くの解離性障害者女性の証言に反しないように文法を構築し、最終的に現代日本語生活に支障がなくなってきた女性には岩崎式日本語を放棄させるか、知的な遊戯として残る程度にし、一方で現代日本語に苦痛を感じる女性については、当人の希望と精神的安定を優先し、時に岩崎式日本語をほとんど第二母語として使うことをさえ許すものである。

第三期岩崎式日本語宣言

第三期岩崎式日本語は、岩崎純一一人によって基礎を考案され、共感覚者女性、性犯罪被害者女性、解離性障害者女性、アスペルガー症候群者女性、カプグラ症候群女性、コタール症候群女性らによって発展・使用され、場合によっては「第二の日本語」として共有されているクレオール日本語と、その言語観の全体の呼称である。

考案者宣言

このプロジェクトは、現代日本の一般健常者が日常的に使用する現代日本語、同人々が使用する現代英語、及び現代英語の早期教育に対して、一部の精神疾患や言語障害者が有している違和感を解消する言語として第三期岩崎式日本語を共有し、その世界観を語らうことを目指す。

岩崎純一

岩崎純一

サイト：<http://www.iwasaki-j.sakura.ne.jp/>

第三期岩崎式日本語に関する質問実験

2003年4月6日 起筆

2008年5月11日 改筆

岩崎 純一

以下に、第三期岩崎式日本語の制作過程で解離性障害者女性・性的被害者女性などに答えていただいた質問実験の一例を示す。（答えてみたい方がいらっしゃいましたら、メールにて回答を受け付けております。）

【質問実験】

●以下の各文が、これまでに獲得した母語に照らして違和感を覚えない範囲内で（自然な日本語に感じられるように）、（ ）に助詞「が・の・は・で・を・に・へ」の中から一文字ずつ入れて下さい。（複数回答可。「ない」という回答も可。）

私 (a) 移住する。

私 (a) 結婚する。

私 (a) 動揺する。

私 (a) 振り返る。

私 (a) 泣く。

私 (a) 転ぶ。

私 (a) 座っている。

家 (a) 建つ。

時間 (a) 残る。

私 (a) 扉 (b) 作る。

私 (a) 扉 (b) 閉める。

私 (a) 海 (b) 好む。

私 (a) 海 (b) 見る。

私 (a) 元気 (b) 出す。

私 (a) くしゃみ (b) する。

私 (a) 声 (b) 出している。

木 (a) 花 (b) 咲かせる。

風 (a) 花の香 (b) 運ぶ。

私 (a) 糸 (b) 張る。

私 (a) 犬 (b) 伴う。

私 (a) 悲しさ (b) 増す。

私 (a) 髪 (b) 巻く。

私 (a) 目 (b) 閉じる。

私 (a) 着物 (b) はだける。

私 (a) 紐 (b) 結んである。

梅 (a) 実 (b) 結ぶ。

寒さ (a) 厳しさ (b) 増す。

ウグイス (a) 鳴いています。

鳥の鳴き声では、ウグイス (a) 好きです。

鳥の鳴き声では、ウグイス (a) 好みます。

鳥の鳴き声では、ウグイス (a) 好まれます。

鳥の鳴き声では、ウグイス (a) 美しいです。

鳥の鳴き声では、ウグイス (a) 美しいと思います。

風 (a) 扉 (b) ひらく。

皆 (a) 扉 (b) ひらく。

二人 (a) 扉 (b) ひらく。

彼 (a) 扉 (b) ひらく。

私 (a) 扉 (b) ひらく。

別れ際、雨 (a) っそう寂しさ (b) 増した。

別れ際、皆 (a) っそう寂しさ (b) 増した。

別れ際、二人 (a) っそう寂しさ (b) 増した。

別れ際、彼 (a) っそう寂しさ (b) 増した。

別れ際、私 (a) っそう寂しさ (b) 増した。

●以下の文章を読んで、自然な解釈だと思われるほうを（ ）内から選んで下さい。

「昨日、彼女は髪を切ったそうですよ」「へえ、そうなんだ。どんな髪型だろう」は、
「(彼女・第三者) が (彼女・第三者) の髪を切った」ことを意味する文脈である。

「彼女はその物語に聞き入り、そっと目を閉じた」は、
「(彼女・第三者) が (彼女・第三者) の目を閉じた」ことを意味する文脈である。

第三期岩崎式日本語文法入門

2010年11月13日 起筆

2010年11月24日 改筆

岩崎 純一

ここでは、初めて第三期岩崎式日本語に触れる方に、その入門部分を言語学上の用語を用いず分かりやすく説明したい。入門と言えども、第三期岩崎式日本語の本質は十分に記述されている。まず、次の日本語文を挙げる。

(1-0) 「私は、この花を、見つめているの」

(2-0) 「私ね、この花ね、見つめているの」

(3-0) 「私は、本を、読んでいるの」

(4-0) 「私、本、読んでいるの」

さしあたり特に重度の心的損傷や言語障害のない日本人がこれらを見たならば、(2-0) と(4-0) とを次のように理解するはずである。

(2-0) → (2-1) 「私はね、この花をね、見つめているの」

(4-0) → (4-1) 「私は、本を、読んでいるの」

「私」と「花」の両方に同じ助詞「ね」が付されながら、あるいは「私」と「本」には何の助詞も付されていないながら、「見つめている」「読んでいる」主体が「私(の目)」であることを瞬時に理解する我々一般日本人の高度な脳機能というものを理解していただけるだろう。

そして、この瞬時の理解を可能にしているものは、

(X) 「『私』や『花』なる単語の意味を知っていること」

ではなく、

(Y) 「『私』なる単語の指すものがこの意志を持った動作主体としての自己であり、『花』や『本』なる単語の指すものが意志を持たない植物や物体である、という観念を自動的に発露してしまう脳機能を、成長過程のある時点より有して生きていること」

である。このことが、第三期岩崎式日本語の本質理解のために重要である。なぜならば、第三期岩崎式日本語は、『花』や『本』が意志を持たないとの観念的前提に反駁する文法を有する言語だからである。

一般日本人にしてみれば、(2-0) は(1-0) を「女性的に」言ったものに過ぎず、(4-0)

は(3-0)を「子どもっぽく」言ったものに過ぎず、助詞「は」と「を」の「未使用」はあくまでも「省略」であって、動作の主体が「私」、客体が「この花」と「本」であることに変わりはない。

しかしながら、例えば一部の重度の解離性障害者は、そのような判断ができない。このような人は、(Y)のような脳機能を持たないのに(X)であり得る。

解離性障害（特に離人症）や統合失調症に罹患した人の多くは、自己意識が崩壊・拡散していながら現実検討能力が失われなことが知られる。つまり、特異点的な「私」（自我）が自覚されずとも、表向きは日本語を理解し、流暢に話すことができる。

ただし、このような人にとっては、(2-0)と(4-0)は、次の意味でもあり得る。

(2-0) → (2-2)「私をね、この花がね、見つめているの」

(4-0) → (4-2)「私を、本は、読んでいるの」

このような人の脳と身体にとっては、認識・認知のレベルではなく、感覚・知覚のレベルからして、「(この命ある動物たる)私」と「(静止した植物たる)この花」とが、主客対立の構図としてとらえられない。

解離性障害（特に離人症や解離性同一性障害）の症状の一つである「主客混淆、自然との一体化、特異点的な自己意識の拡散」は、重症化すると、このように言語とも密接な関係を築くようになる。「私」たる特異点がないのだから、「私」と「この花」とは実在する客体の名称でさえない。

だが、解離性障害者が(2-0)や(4-0)を日常会話で発したなら、一般の聞き手には(2-1)や(4-1)のように理解されるのであるから、逆に「そのように理解させない」文法を持つ言語が日本の解離性障害者のために存在することが望ましいと考え、「そのような言語であること」を私は第三期岩崎式日本語に課すことにした。

(2-0)や(4-0)のように、「同じ助詞が付く（または助詞が付かない）名詞は、主体と客体の区別（自己と他者の区別）の概念が消滅して、文中で全く同じはたらきをする」という文法も、第三期岩崎式日本語は持つ必要があった。

「私、この花、見つめているの」

(ぼんやりした私とぼんやりしたこの花が見つめ合っている感じがするの。大自然から抽出されない私の自我にて。)

「私、本、読んでいるの」

(私が本を読み読まれ、本が私を読み読まれ、そしてどちらでもあるの。自己意識の散っ

た私において。)

これこそ、第三期岩崎式日本語の基本構文であり、「空前格文（くうぜんかくぶん）」または「空前我文（くうぜんがぶん）」と言う。すなわち、第三期岩崎式日本語では、「名詞の羅列（なるべく読点で区切る）」と「述語」の組み合わせが基本であって、「名詞の羅列」の方には「主語」と「目的語」との対立がない。

そして、「私（わたし）」と言えば、現代日本語の自己意識であって、なお聞き手に誤解を与えるため、第三期岩崎式日本語では自己意識の範疇を「あう」と言い換える。さらに、「～の」なる文末の女性的表現は、「あう」（空前女我）に内包されて消滅する。（ただし、付けたままでも構わない。）

「あう、この花、見つめている」

「あう、本、読んでいる」

さらに、動詞の語幹が確定していれば、いかなる活用形であっても、第三期岩崎式日本語ではミスにならない。次はいずれも正しい「空前格文」である。

「あう、この花、見つめていり」（mi-tsu-me が確定）

「あう、本、読めていろ」（yo-m が確定）

日本人が実は活用形をそれほど重視しなかったなごりは、命令形に最もよく表れている。「おい、読め!」、「こら、そこの〇〇君、しっかり読む!」、「あんた、これ読み!」。

これらは、意味は同じで、話者の性格・性別・方言によって形が異なるのみである。皮肉なるかな、現代一般の健常日本人が、普段は「言語障害者がやるミスだ」と考えている「ミス」を自ら堂々と犯している好例である。

（英語ではこのようなことは許されず、動詞の変化は、厳格な自己と他者の峻別及びその人数とに制御されている。）

この「ミス」が、空前格文では全活用形（未然形～命令形）に許される。

そして、上記の「読めていろ（読んでいる＝古文：読みてゐろ）」が「命令形でない」と言えるのは、文頭の「あう」がそれを保証しているからである。そうであるから、「第三期岩崎式日本語話者が文頭で『あう（空前我）』を宣言した場合、聞き手は話者のその後の動詞の活用ミスを見逃さなければならない」というのが、第三期岩崎式日本語の「厳格な」ルールなのである。

ちなみに、「動詞の活用や助詞の使用法を間違えるような心的外傷被害者・言語障害者であっても、『もう』などという新単語（名詞）の知識を間違えない」という事態は、若き解離性障害者女性のみならず、認知症や脳卒中患者でもごく普通に見られるものである。

私は、特に解離性障害者女性において、「A、幼児期の言語習得過程の逆算」、「B、ジャーン失語、錯語など人間が言語を失う過程の逆算」、「C、用言の知識と発音のみが崩壊して体言のそれらは失われない日本文化依存型の部分失語」、「D、『もう』は、『わたし』の頭音である『w』の母音違いであり発音が容易であること」、「E、女性の口腔の形状」などに鑑みて「もう」を導き出したが、事実、多くの重度の解離性障害者女性は、「もう」を誤らずに助詞の使い方だけを誤る不思議な事態を呈する。しかも、名詞は一音たりとも誤らないことが多い。

「私ちょ、この花びえ、見つめていますよ」

第三期岩崎式日本語は、このような苦悩を抱えて現代日本語を話す女性の「ミス」を「正答」としてすくい上げ、助詞の使用を強要しない。

「もう、この花、見つめていふいりす」（「ふいりす」は女性丁寧形）

言語学上の難解な解説は割愛するが、人間関係・社会的な外圧・性的被害による心的外傷で解離性障害となった女性ばかりを調べたケースは、日本においては、ほとんどないか、全くないと思う。

また、第三期岩崎式日本語は、例えば古語の「露落ちて」と「露の落ちて」と「露が落ちて」とを全て異なる外界認識様態ととらえる。主語と述語の関係としてとらえられるのは「露が落ちて」のみであって、残る二つの「露」は、抽出された自己意識が認識している「露」ではないと考える。

さて、燈詞一覧表に照らせば、「読む」が「読むあ」や「読めい」などと複雑に変化することになっている。例えば、「あ」を付すと、次のような意味になると書いてある。

「読み・あ」・・・「連用抽出言未然。用言に連なる事態への甚大な努力の未だ然らざる心情。」

これは、「読み・て」を「読み・あ・て」とすると、「読んで」から「読もうと甚だに努力しても（抽出）、今の私の自己意識にはできない（未然）でいて（連用）」との意味になることを示す。

先に、第三期岩崎式日本語では動詞の活用は自由でミスにならないと書いたが、活用のミスの仕方を追跡した結果を文法化したものが、この「言（げん）」である。

さしあたりこの自己拡散離人状態から脱する必要がなく、この状態に安住できている場合には、「心描言」のままでよいが、人間関係に自己を投入し、または社会的威圧に応じざるを得ず、そこで解離状態のまま社会適応しようと苦悩する場合には、「う、い、お、あ、え」の五母音の使い分けが許される。

この変化は、現行日本語のいわゆる五段活用の上にさらに五段活用するため、二重活用であるが、無根拠かつ恣意的に構築されたものではなく、先の A～E などの追跡と、万葉集・古事記・日本書記時代から現代日本語までの母音変化の追跡とによって、さしあたり確認できる限り、最も解離性障害者らの症状の現状に沿って構築されている。

「おう」を宣言するということは、自己意識が「わたし」から最も遠く広く拡散していて、苦悩感はほとんど「おう」自体によって保証されているが、次の二文にはこのような違いがあることになる。

「おう・あ、本、読み・て・いる」

（自然と一体化した私の自己意識は、生きることの全体・日々の行動の全てについて、社会適応しようとしようと甚大に努力していて、その中で今、本を読んでいるのだけれど、本を読むことは比較的苦痛ではないの。）

＝この解離性障害者の唯一の心の拠り所が読書の場合など

「おう、本、読み・あ・て・いる」

（自然と一体化した私の自己意識は、さしあたり苦痛がなくて、安住しているものの、その中で今、本を読んでいる、本を読むことは比較的苦痛なの。）

＝この解離性障害者が急に人前で朗読を頼まれた場合など

さらに、非生命体の「本」にも「言（げん）」を付すことができる。

「おう・あ、本・あ、読み・あ・て・いる」

（自然と一体化した私の自己意識は、生きることの全体・日々の行動の全てについて、社会適応しようとしようと甚大に努力していて、その中で今、本を読んでいるのだけれど、本を読むこともその甚大な努力の一環として苦痛であり、本も私に対してひどく頑張っ読まれてくれている気がするの。）

そして、発音については、ほとんど次のようになることがある。

「わ、ふおんな、よみゃーている」

しかし、強調するときには、声門閉鎖音を伴って、先のように一音ずつ読む。あるいは、ヤ行音として、「よみやている」と読まれることが多い。

この解離性障害者の症状が軽い日があったとして、自己意識「もう」がよりいっそう「わたし」に近づき、当人が文頭で「意我」と呼ばれる「もうむか」を宣言した場合、「本」に「を」を付けることが多くなるのである。

「もうむか、本を、読みあてている」

（他者や他物体を意図的に制御するくらいにまでなった私の自己意識は、客体・目的・対象物としての本を、甚大な努力により読んでいるの。）

ただし、「主我（自我）」である「わたし」にほど近い「意我」や「活我」になると、甚大な努力の必要はほとんどないのであって、多くの場合、「言（げん）」が抜け落ちる。

「もうむか、本を、読んでいる」

そして、いっそう客体格・対格としての「を」が意識された場合、「もうむか」に代わって、現行日本語の「主我」である「わたし」が宣言される。

「私（わたし）は本を読んでいる（読んでいる）」

こうして、第三期岩崎式日本語の「主我文（主格文）」は、現代日本語に一致するのである。

ここまで、簡単に第三期岩崎式日本語の概要を述べたが、これだけでは到底説明し尽くせるものではない。また、他者に説明し尽くしたとして、それが第三期岩崎式日本語的な世界感覚を他者に体感させたことにはならない。

しかしながら、第三期岩崎式日本語の文法全体のうちのある特殊な事態が、文法的に現代日本語に一致するというを、理解していただけたのではないかと思う。

第三期岩崎式日本語文法解説（1）

音韻体系と文法範疇

2005年11月24日 起筆

2010年10月22日 改筆

岩崎 純一

第三期岩崎式日本語の文法を論じるに当たって、第三期岩崎式日本語五十音図をはじめ基礎事項を掲げておきたい。

■音韻体系

現代日本語とほとんど同じであるが、第三期岩崎式日本語特有の発音もあるため、以下に留意点を掲げておく。

あいうえお a,i,u,e,o
かきくけこ ka,ki,ku,ke,ko
さしすせそ sa,si,su,se,so (sha,shi,shu,she,sho)
たちつてと ta,ti,tu,te,to
なにぬねの na,ni,nu,ne,no
はひふへほ fa,fi,fu,fe,fo (ha,hi,hu,he,ho)
まみむめも ma,mi,mu,me,mo
やいゆえよ ya,yi,yu,ye,yo
らりるれろ ra,ri,ru,re,ro
わゐうゑを wa,wi,wu,we,wo

がぎぐげご ga,gi,gu,ge,go
ざじずぜぞ za,zi,zu,ze,zo
だぢづでど da,di,du,de,do
ばびぶべぼ ba,bi,bu,be,bo
ぱびぷぺぽ pa,pi,pu,pe,po

きやきゆきよ kya,kyu,kyo
ぎやぎゆぎよ gya,gyu,gyo
しゃしゆしよ sha,shu,sho
じゃじゆじよ ja,ju,jo

ちやちゅちよ	cha,chu,cho
にやにゅによ	nya,nyu,nyo
ひやひゅひよ	hya,hyu,hyo
びやびゅびよ	bya,byu,byo
ぴやぴゅぴよ	pya,pyu,pyo
みやみゅみよ	mya,myu,myo
りやりゅりよ	rya,ryu,ryo

ん n

●サ行の発音は、現代日本語のサ行またはシャ行とする。重度の解離性障害者女性らの中にこれらの区別が付かない人がいるためである。（時代を遡ったり、女児退行を起こしたりする。）

サ行とシャ行を使い分けられない方言は、中国地方にも、形骸化したものの残存する。（広島方言の「～しなさい」＝「～しんしゃい」など。）

なお、アイヌ民族は、明治時代に至ってもなおサ行とシャ行の区別が聴覚上も付かなかった。戦後、現代日本語を母語とする人が増えて、その伝統的音韻体系は失われつつある。

●タ行の「チ」「ツ」は、現代日本語の「ティ」「トゥ」（近世以前日本語の「チ」「ツ」）で発音されることが多い。

●ハ行の子音は、現代日本語では「ハ」「ヘ」「ホ」と「ヒ」と「フ」とで全く異なっている。「ヒ」のみ舌の位置が急上昇し、「フ」のみ唇を使う。「フ」は「ク」からほど遠いが、「ヒ」はほとんど「キ」に近く、時代が下るにつれてどんどん両者は近づいている。

しかし、重度の解離性障害者女性らにおいて、ハ行の発音が平安時代以前の発音（今のファ行やパ行発音）に戻る人がいる。（このこと自体が、日本語のハ行音がかつてはファ行音やパ行音であったとの主流の学説を、自己言及的に根拠付けるかもしれない。）

もともと、幼児においては、まず「m」「p」「b」音の単語を発し（ママ・マンマ・ポッポ・ブーブー）、「h」音の発音は困難で、随分あとから身に付く。（日本の幼児は、英語の「パパ」「ママ」をしゃべっているわけではなく、発音しやすい音を発したら英語の「パパ」「ママ」に聞こえているだけである。）

「重度の解離性障害者女性らにおける精神的な損傷の度合やその知覚・世界認識のあり方」と、「現代の彼女らの日常生活における実際の発音に見られる音韻体系の日本語史上の遡及・幼児退行」とが、密接に結び付いており、一方の度合いを見ればもう一方の度合いをある程度推し量ることができるとの拙説は、かなり真である可能性が高いだろう。

第三期岩崎式日本語では、ハ行は現代日本語のファ行（平安日本語のハ行）で発音する

ことを許し、むしろこれを主とする。ただし、奈良時代や有史以前のパ行発音にまで遡ると、現行の外来語（ポットなど）が表せなくなるので、ファ行とは別に、明確な「p」を子音とするパ行を設ける。

●ザ行の「ジ」「ズ」とダ行の「ヂ」「ヅ」は、現代日本語では同じ発音であるが、戦前までは両者を区別する人が多く、現在では山梨県奈良田方言など一部にしか残されていないものの、重度の解離性障害者女性らでは、これらの区別が再び生じることがある。ただし、現代の解離性障害者女性らの場合、「藤（ふち）」や「富士（ふじ）」といった古語の知識が必ずしもあるわけではなく、それが無くとも、普段の口の動き・発音において「zi,zu,di,du」が現れる、との意味である。つまり、「藤」も「富士」も、「ふち」「ふじ」と言うことがある。古語の知識無しに時代を遡る事実が、かえってダ行の「ヂ」「ヅ」が「ヂィ」「ドゥ」であったことの根拠となっているだろう。

http://home.hiroshima-u.ac.jp/ikonishi/narada/narada_tu&du.html

（山梨県奈良田方言を話す男性の音声ファイル）

上記の発音は、重度の解離性障害者女性らの発音に似ている。

■表記

現代日本語と同じく、漢字仮名交じりで書けばよく、また正字・正仮名で書いてもよい。外来語の仮名書きも自由であり、例えば「ラジオ」を「ラディオ」や「ラヂオ」と書いてもよい。ただし、一個人または一センテンスの中では、そろえることが好ましい。

■品詞

上古代日本語から現代日本語に至るまでに登場した名詞、形容詞の語幹、形容動詞の語幹、動詞の語幹、助動詞の語幹、助詞、副詞、連体詞、接続詞、感動詞の全ての語彙は、第三期岩崎式日本語でも用いてよい。

ただし、助詞のうちいわゆる格助詞だけは、極めて特異な使われ方をし、第三期岩崎式日本語固有の格助詞と合わせて「格詞」と呼ばれる。

■格詞

第三期岩崎式日本語は日本語と大きく異なる格体系を持つ。格なる概念も、第三期岩崎式日本語においては便宜的に持ち出された文法範疇にすぎない。名称については、「空格」及び「識格」はそれぞれ、文法的意味のほか、仏教用語の「空」と唯識思想の「識」にも由来する。

空前格（空格以前格）（くうぜんかく・くうかくいぜんかく） 無しφ

空格（くうかく） 無しφ

空識間格（くうしきかんかく） 無しφ

識格（しきかく） 無しφ

識具間格（しきぐかんかく） ン

具格（ぐかく） ンデ

具及間格（ぐきゅうかんかく） 一デ

及格（きゅうかく） デ

及希間格（きゅうきかんかく） デノ

希格（望格）（きかく・ぼうかく） ンノ

希能間格・望能間格（きのうかんかく・ぼうのうかんかく） 一ノ

能格（のうかく） ノ

能意間格（のういかんかく） ノガ

意格（いかく） ンガ

意活間格（いかつかんかく） 一ガ

活格（かつかく） ガ

活主間格（かつしゅかんかく） ガ

主格（しゅかく） ガ

絶対格（ぜったいかく） 無しφ

話題格（わだいかく） ファ（ハ）

■ 燈詞

第三期岩崎式日本語では、現代日本語の品詞に加えて「燈詞」と呼ばれる品詞が設けられ、属する単語には「う」「い」「お」「あ」「え」の五母音がある。これらは、「もう（をぐ）+格詞」の後とその他のあらゆる語の後に付され、「言（げん）」と呼ばれる。

■ 動詞・形容詞・形容動詞・助動詞

現代日本語の未然・連用・終止・連体・已然・命令の六つの五段活用それぞれが、さらに五段活用する。既存の日本語の用言は、古語を基礎として全てこれらの活用を持つ。さらに、第三期岩崎式日本語の動詞においては自動詞と他動詞の区別が消滅する。

「触る」を例に取る。

(表記は、「サファル」「サハル」「サワル」のいずれでもよいが、発音は主に「サファル」「サパル」として平安日本語に準ずる。)

順に、未然、連用、終止、連体、已然、命令形を表す。

●常観言（じょうかんげん）

(現代日本語における動詞の活用の概念と同様である。)

サファラ、サファリ、サファル、サファル、サファレ、サファレ

●通観言（つうかんげん）・・・五種類に分類

(これ以下は、重度の解離性障害者女性らが使用する活用。)

▼抽出言（ちゅうしゅつげん）

(「触ることをする」「触るということをする」「接触なる行動をする」「五感のうちの触覚をおこなう」に該当。現代日本人は、「触る」と「ということ」とを結び付けたり、音読み漢語「接触」を用いたりして、英語の touch を表現するが、重度の解離性障害者女性らはこれが困難である。そこで、そのような抽象概念のほうを特殊化して、この言で表す。例えば、「サファリア・テ（接続助詞）」で「周りの現代日本人健常者の言う“接触”なる概念に当たる動きは、私にとってはものすごく頑張ってもできないことなのに、今それを頑張ってしまうとしていて」を表現する。)

★抽出言未然

サファラア、サファリア、サファルア、サファルア、サファレア、サファレア

★抽出言已然

サファラエ、サファリエ、サファルエ、サファルエ、サファレエ、サファレエ

▼抽化言（ちゅうかげん）

(抽出言と心描言の間の概念を表す。心描言を抽出言化しようとする精神的過程に伴う中程度の心労をこの言で表現しうる。例えば、「サファラオ・ナイ（否定）」で「ある程度頑張ってみれば、私には“触る”という行動はできるのだけれど、今はしないの」を表現する。)

★抽化言未然

サファライ、サファリイ、サファルイ、サファルイ、サファレイ、サファレイ

★抽化言已然

サファラオ、サファリオ、サファルオ、サファルオ、サファレオ、サファレオ

▼心描言（しんぴょうげん）

（重度の解離性障害者らは、この活用を用いて、「自らの解離症状を良しとする」安堵の心の表現を許される。例えば、「サファレウ・バ」で「今の解離状態で物を触るのは、なんだか心地よくて、今実際に触ったなら」を表現する。）

サファラウ、サファリウ、サファルウ、サファルウ、サファレウ、サファレウ

■時制・相・法・態

第三期岩崎式日本語の時制・相・法は、各真我（真格）によってその分化の程度が異なる。また、第三期岩崎式日本語では能動態と受動態の区別が一度解体され、代わって中我態（ちゅうがたい）が設けられる。能動態と受動態の区別は主我構文にのみ存する。

第三期岩崎式日本語文法解説（2）

解離性障害者女性等の世界認識

2005年11月24日 起筆

2009年5月29日 改筆

岩崎 純一

私は、二十歳の頃より、個人で在野において解離性障害、強迫性障害、鬱、カプグラ症候群、コタール症候群、統合失調症、共感覚、自閉症、性的被害者などの特殊な感覚、症状、体験を持つ日本人女性と交流してきた。男性もいらっしゃるが、私の言語制作に興味深い宿題を与えてくれたのは、9割以上が女性である。このような女性が陥った独特の世界認識と様々な観点から向き合った結果、ライフワークの一つとして言語というものを探究し、この第三期岩崎式日本語を創案するに至った。この項から第三期岩崎式日本語の発想と世界観についての解説を始めたい。

第三期岩崎式日本語の発想や世界観を今の日本の一般健常者が理解するためには、まずは先述した各感覚様態や精神疾患についての知識を最低限持たなければならない。これら

については、私のメインサイトや精神病理学の知見を参照されたい。

<http://www.iwasaki-j.sakura.ne.jp/> (私のサイト)

第三期岩崎式日本語文法の構築には、他の人工言語とは全く異なる手法を取っている。基本的に先述の女性たちと私との交流を元に作られており、現在の言語学・哲学・心理学などで全く見られないアプローチだと思う。

以下に、その一つを簡単に示す。

私とコンタクトを取った E さんは、性的被害に遭ってから幼少期の解離感覚が蘇った女性である。一例として、私がこの女性とどう向き合い、第三期岩崎式日本語を用いるに至ったかを書いておきたい。

私は、自分自身が共感覚や解離感などの特殊感覚能力の持ち主であるから、この女性の頭（脳）に何が起きているのかが直観できたが、それを言語学的にも把握したく思い、E さんにいくつかの質問を考えて出題し、助詞を入れてもらった。以下はその一例である。

私（ ）扉（ ）ひらく。

風（ ）扉（ ）ひらく。

「ひらく」は「～がひらく（自動詞）」と「～をひらく（他動詞）」とで形が変わらない。このような動詞を言語学では「能格動詞」と言う。「～があく」と「～をあける」ならば、形が違うので、そうは言わない。つまり、「ひらく」ならば、直前の（ ）には「が」も「を」も入りうる。

そして私は、同じ質問を身の周りの数十人の一般女性に試した。すると、以下のような回答であった。

「私が扉をひらく」「私は扉をひらく」

「風で扉がひらく」「風が扉をひらく」「風は扉をひらく」

ところが、E さんは違った。一般女性の回答に加えて、次の三つが加わった。

「私で扉をひらく」「私で扉がひらく」

「風で扉をひらく」

つまり、E さんは、主語が「私」か「風」かに関係なく、助詞を全て統一してしまう。そして E さんは、性的被害直後、日本語や日本の古語は理解できるのに英語が理解できない

状態となったが、これが偶然ではないことが分かる。英語では、「I open～」と言うときの「I」は、「私が」と「が」までを含んでおり、「私が好きな花」「私の好きな花」といった、日本語では許される助詞の変化は、ただちに文法違反となる。例えば、英語圏の子どもは、「I love you.」を「My love your.」などと間違える時期を通過して育つ。これについては、すでに海外でも数多くの知見があるが、第三期岩崎式日本語ではこのような間違いを間違いと見なさず、幼児期（特に少女期）に普遍の世界認識であると見なして許す立場に立つ。

「性的被害により解離症状を引き起こした女性の世界認識は、それだけですでに非英語的である」、これが私の言語観と精神病理観である。「私で扉を」とは、まるで自分を傍観したような言い方であるし（性的被害で傷付いた自分を傍観する）、「風で扉を」とは、自分が風を操ったり風になりきっているかのようなのである（性的被害で傷付いた自我を大自然に没入・希釈させる）。ただ、こういうことが脳卒中患者でも起こる（失文法）ことを知っていた私は、今のような質問を、これから解説するように何十個も考えた。

「私」と「風」の区別を文法上でも付けられない言語は、比較的先進国と言える国では、グルジア語やバスク語など先住民の言語にしか残っていない。つまり、性的被害に遭った一部の女性の脳は、心的損傷を軽減しようと壮絶な努力を払うあまり、原始的な言語や女兒の言語の認識世界に前戻るといえることが、多くの質問によって見出されることになる。

普段、我々はどのようにして「私が扉を」「風で扉が」と言い分けることができるか。それは、「私」が生命体で、「風」は生命体ではない、という判断を無意識に行っているからである。このような区別は、一個の動物種としては「異常な」ことだと言える。世界の言語の文法を分析していくと、自然物を生物と無生物に分けるようになったこと、近現代西洋的な「自我」が成立したこと、動詞に自動詞と他動詞の区別が付いたことは、同じことの別表現であることが導き出される。時制や態といった概念も同様である。すなわち、性的被害を受け、幼児期の解離感が蘇るほどの精神的な裂傷を経験した女性の言語認識は、現代欧米語の文法記述によっては説明できない。ところが、そういった女性や自閉症男性などへのカウンセリングやリハビリは、現代英語の文法用語で記述される現代日本語である。ここに危うい矛盾がある。

私はEさんに、「助詞の使い方などかまわず、思うことを名詞と動詞だけで話してくれればいい」と助言した。「私、扉、ひらく。私、買い物、好き」などである。「私が買い物キョ好き」でもいいわけである。

これは実は、奇妙な日本語でも何でもない。昔は「花咲く」「風吹く」などと助詞を抜くのが一般的であった。そして私は、これらが「花が咲く」「風が吹く」の省略ではないと知ることになる。かつての日本人には、「花が咲く」、「花の咲く」、「花で咲く」の区別が無かった。そして、「Eさんの世界認識は昔の日本人女性に近い」ということをこれから解説していきたい。

今の脳卒中の主要なリハビリにおいては、「扉を」「扉を」、「ひらく」「ひらく」というように、患者にリピートさせるだけで、文法というものを考えない。それを私は逆手に取っ

た。「助詞機能（格機能）の原始性を文法違反としない」という発想によって、共感覚者かつ解離症状体験者男性である私が、「内側から」解離性障害者女性らの認識世界を記述しようというのが、第三期岩崎式日本語の試みである。

これらの方法を何度も E さんに繰り返した結果、精神科・心理カウンセラーにかかっても軽減されなかった精神的な傷も、次第に収まり、今では普通に元の日本語をも取り戻した。

しかし、一人だけならば偶然の可能性もあるから、今度は同様の性的被害に遭った女性 Y さんに色々を試みた。そうしたところ、Y さんも同様の過程を通して精神的に回復し、さらに他の解離性障害者女性・統合失調症者女性・自閉症者男性らの何人かも、現代英語は理解できないのに第三期岩崎式日本語の文法は理解できる状態を通過するという共通性・普遍性があることが分かった。

このような過程を繰り返して、実際に主に重度の解離性障害者女性らに効果があったものを文法として記述していくのが、第三期岩崎式日本語の試みである。

第三期岩崎式日本語文法解説 (3)

世界認識の連続体性

2005年11月25日 起筆

2009年5月29日 改筆

岩崎 純一

脳卒中なる病名については誰でも知っているに違いないが、脳卒中でいかなる言語障害が起こるかについてはあまり一般には知られていないと思う。そして、それと同様の言語障害が解離性障害者でも起こることをまずは説明しておきたい。以下は、私が実際にそれらの方々と向き合ってきて、耳にすることのできた会話である。

「今日、私が外を歩いているとき、強い風が吹いてきた」

「今日、私の外で歩いているとき、強い風で吹いてきた」(*)

「今日、私がそちゅ、そき、そぐ、そとを歩いているとき、強いかちよ、かぶ、かぜが吹いてきた」(*)

「何の花が好きかと聞かれても、すぐには答えられないですよ」

「何に花の好きかと聞かれても、すぐには答えられないですよ」(*)

「今日は久々に母と A さんと外食して、電車で帰ってきました」

「今日は久々に母、A さん、外食、で、電車、帰ってきました」(*)

これら(*)は、性的被害に遭ったあとで幼少期の解離世界が蘇った女性が発した口語文である。このようなことは、脳卒中患者の間では広く知られている。例えば、運動性失語・伝道失語と呼ばれる症状では単語（特に名詞）自体が言えなくなる。これは、ほとんど脳卒中患者ばかりに起こると言われるが、重度の解離性障害者でも頻繁に起こるのであり、性的被害者女性でもよく起こる。

ここから、まず、「解離性障害者女性らは、すでに日常的に、脳卒中患者の言語認知・世界認識を生きている可能性がある」という発想が出てくることがお分かりいただけると思う。解離性障害や共感覚は、幼児期、あるいは原始人類や巫女・シャーマンなら、ごく当たり前のようには持っていたと言われ始めた。この両方が正しいとすれば、「脳卒中患者は、まずは、より新しく高次な言語機能から失われ、古形言語に前戻る形で言語障害を呈する」、あるいは「性的被害者女性は、被害の衝撃のあまりに、女兒や過去の女性の言語認知にさかのぼる」という可能性があることになる。

このことは、私のような重度の共感覚者たちにとっては証明するまでもなく分かっていることであるとも言えるが、これを実証的に示し、言語化することが、私のような「言語障害なき重度の共感覚者」には可能ではないか、それによって私が接してきた社会的少数者女性たちが助かるような文法の創造はできないだろうか、というのが、第三期岩崎式日本語制作の契機であった。

さて、一旦まとめよう。共感覚者・自閉症者・性的被害者女性・解離性障害者女性・脳卒中患者などには、助詞の使い方がまるで変わってしまう症状が見られる。これを失文法と呼んでいる。

「今日、私が外を歩いているとき、強い風が吹いてきた」

「今日、私の外で歩いているとき、強い風で吹いてきた」

ただし私は、この症状は「失文法」や「言語障害」ではなく「文法の原始退行」にすぎないと思っているということである。

単語（特に名詞）自体が言えなくなる症状についても、先に挙げた人々には頻繁に起こる。これは、いわゆる「吃音・どもり」とは違う。

「今日、私がそちゅ、そき、そぐ、そとを歩いているとき、強いかちよ、かぶ、かぜが吹いてきた。」

そして当然、第三期岩崎式日本語の語彙は日本語の語彙に頼っているので、後者の症状を持つ人には第三期岩崎式日本語はあまり効果がないとも言える。ただし、言語というのはそもそも何であろうか。「言語とは文法である」と私は思う。次の文章を読んで、英単語の割合が高いからと言って英語だと判断する日本人がいるなら、日本人とアメリカ人の両方を相手に話して、どちらに理解されるかやってみるとよい。

「カーレースのフォーミュラ・ワンにエントリーするには、ドライバーはスーパーライセンスを持っていないなければならない」

例えば、「もの」「おひさま」という単語の音声の意味を原始日本まで遡ることは意義があるが、「ぶったい」「たいよう」という単語の音声の意味を遡ることは意義がない。単に明治以降に「物体」「太陽」という語を、有識者が漢語由来の音を組み合わせで作ったものである。単語の発音ができないことは、世界認識の方法の変容（文法の退行）とは関係がない。性的被害を受けて名詞そのものが発音できなくなる女性よりも、助詞の使い方が突如としておかしくなるケースが多いのは、偶然ではないだろう。

現在は、いわゆる自然言語は主格言語と能格言語のいずれかに収束させて説明するのが一般的で、ただし、最近は新たに活格言語という解釈も出てきた（後述）。ただし、それらはいくまでも人類が言語というものを持ってから今までの、ある時代の一点を共時的に区切ってその言語を解釈したときの、文法の記述である。それを通時的に連続体としてとらえて、「格という概念は常にとどまることがない」ということを、女性たちに対する私の質問実験がほぼ確実に実証したであろうと考えている。今見たように、「風、吹く」という語が与えられたとき、一般日本人は古語をただまねて「風吹く」「風ぞ吹く」と言ったり、今の言い方で「風が吹く」と解釈したりする。ところが、重度の解離性障害者女性などには、実際に「風で吹く」という現代日本語に近い感覚として認識されていることを実証しようというのが、第三期岩崎式日本語の試みであった。

これに従えば、例えば藤原定家の次の歌、

白妙の袖の別れに露落ちて身に染む色の秋風ぞ吹く

などは、

白妙の袖の別れに露で落ちて身に染む色の秋風ぞ吹く

という解釈が成立する。つまり、何の格標識もないところは、単なる字数合わせではなく、「の」や「ぞ」よりも非主格的・遠主格的・傍観的である、という解釈を下すわけである。詠み手の「自我」と自然物である「露」との間には、主客関係ではなく、梵我一如的な一

体性が自覚されている。

ところで、「私が扉を」「風で扉が」と言い分けられないグルジア語やバスク語の話者は、「私」が生命体で「風」は生命体ではないことを認識しないのか、というご質問を受けるかもしれない。これは、重度の解離性障害者女性らに、生命体と非生命体との区別を「理解・認識・思惟」しないけれども外界を「感覚・知覚」していて正確に社会生活ができる人がいる、ということによって説明が付く。生命体と非生命体の厳格な区別がなければ人間の思惟や社会生活は生じないなどという傲慢な考え自体が、主格言語化した西洋一神教圏の価値観によって発生したものである。

私がこれまでに三人ほど出会った女性だが、「物体の境界線」が分からないという女性いる。例えば、机の上に本が置いてあるとする。一般の人は、「机」と「本」という名前をそれぞれに与える。それがいわゆる名詞の始まりである。

ところが、これらの女性は、例えば机のうちの横に平らな上部（天板）と本とをまとめて「A」、机の残りの脚部分を「B」と名付ける。好きなように物体を区切るよう指示したら、そういう分け方をする。このような人で、自力で社会生活を送れる人はほとんどいないが、女性ならば、全体として「知的障害者」「自閉症者」などと呼ばれる器質疾患者が少ないために、自分の言葉でそういう知覚世界を言える場合がある。「机」と「本」とを別の物体であると断定するミクロレベルでの根拠は存在しない。組成は違っても、水素原子・炭素原子など（あるいは素粒子）同じものでできている。

このように、「物体の境界線が全く無い状態（前言語時代・幼児期）に戻る」、「自我と他の物体との境界線が分からない」といった日本人女性は、「風、吹く」という言葉が与えられると、実際に「風が吹く」だけでなく、「風で吹く」「風を吹く」と答える。助詞の「間違い」の頻度は、解離の程度に比例する。それを詳細に調べ上げたのが、参考資料に掲載したものである。彼女たちの使う「で」や「を」は、もちろん普通の周りの健常者に合わせた生活で用いている現代日本語から来ている。上代日本語には、「い」という格標識らしきものがあり、「風い吹く」とも言えるはずだが、なぜ彼女たちがそう答えないかと言えば、「い」を周りの日本人が使わないからに決まっている。また、「ぼ」や「ち」などといった音も使わない。すなわち、「風で吹く」というのは、主格のニュアンスで「で」と言ったのではなく、実際に「風」に、周りの現代日本人健常者が使っている具格・処格に当たる音声を付けるべきだと自覚して「で」と言ったのだということが分かる。

言語学的観点からのご指摘は、言語学を専門に勉強したのではない私にとって大変に参考になるものかもしれないが、「私」「自我」「個人」という概念が今の我々の個人の身体にピタリと一致している感覚は西洋でさえここ数百年の産物でしかないこと、本当に自己意識が拡散・崩壊・消失する解離性障害や統合失調症といった症状が実在するのだということ、こういったことは既に前提として第三期岩崎式日本語を語っているものであるから、むしろ私の研究は、「その言語の体験あらずしてその言語の知識ある」言語学者には、極めて分かりにくいものかもしれない。

第三期岩崎式日本語は、解離性障害者女性らの世界認識を実際に写し取ったらどうなるかということ語ろうとしている。例えば、後述する希格言語から能格言語への移行は、おそらくは幼児や原始人が、「自分の希求したこと」が「人為的に可能になる」ような社会状況・文明を迎えたときに起こった変化であろうと推測することができる。これによって、従来の言語学の能格という概念、または能格言語話者の世界認識・自我意識は、第三期岩崎式日本語で言う希格という概念、または動作主である「自分」に希格を付けようとする（「希望」しない動作をする「自分」には格を付けない）重度の解離性障害者女性の世界認識のあとに生じたものであろうことが推測できる。今でも能格構造を潜在的に有する日本語を実質的な公用語とする日本で、どうして巫女やシャーマン女性の解離症状が長らく「病理」と扱われなかったかが説明できる。

もし今後、我々の現代日本語が変化して現代英語的文法に接近し、その現代英語もさらに厳格な主格主語を持った疑似孤立語的屈折語に変化していくなら、今の現代英語の主格もまた、将来の英語から見れば、「能格的な古き良き味わい」と映るときが来るに違いない。私も今後、第三期岩崎式日本語の試みがどうなっていくか、楽しみにしたいと思う次第である。

第三期岩崎式日本語文法解説（4）

現行の言語学の格解釈の解体

2005年11月27日 起筆

2009年5月29日 改筆

岩崎 純一

第三期岩崎式日本語はおそらく、現代欧米的・現代日本的な市場競争社会に要求される抽象的思考を全くうまく記述し得ない。

一方でこの言語は、例えば性的被害者女性の陥った解離性の心理状態をほぼ記述し得る。あるいは、自閉症者の男性の知覚世界をもほぼ記述し得る。そして、知的障害のある重度の共感覚者の知覚世界をもほぼ記述し得る。すなわち、「言葉にならない何ものか」（それはすなわち、古語では「言葉」であったにもかかわらず、現代日本語では「言葉にならなくなった何ものか」かもしれない）を再び「言葉」にしてしまう言語が第三期岩崎式日本語であるとも言える。

一般に「格」とは、名詞や名詞句が文の中でいかなる関係性を持つかについての標識であると説明される。格標識の形だけで見れば、現代日本語が主格・対格言語（略して主格

言語) であることは疑いようもない。

主格言語

名詞(主) + 自動詞。(例: 春が来る。)

名詞(主) + 名詞(対) + 他動詞。(例: 私が花を見る。)

主格言語においては、自動詞の主語と他動詞の主語とが同じ格標識(主格)で、他動詞の目的語が別の格標識(対格)で表される。現代日本語において、「が」は主格、「を」は対格である。

英語においては主語の存在は明白であるから、この主格言語の定義は疑われようがなく、むしろこの説明に合うように人為的に文法が構築されているとさえ言えようが、日本語においては果たして動詞の自他の区別の前提、主語の存在の前提が正しいかどうかについて、三上章をはじめとして多くの議論がなされてきた。三上は、動詞に関しては所動詞と能動詞の分類を立てたが、のちに破棄した。以来、日本語に主語はあるのか、動詞にいかなる分類があるのか、あるいはないのか、諸説乱立で結論は出していない。

主格言語とは異なる文法を持つ言語があることは古くから知られたが、今日ではほとんどが能格言語と呼ばれている。

能格言語

名詞(絶) + 自動詞。(例: 春 β 来る。)

名詞(能) + 名詞(絶) + 他動詞。(例: 私 α 花 β 見る。)

能格言語においては、自動詞の主語と他動詞の目的語が同じ格標識(絶対格)で表され、他動詞の主語が別の格標識(能格)で表されると説明される。絶対格は多くの場合、無標(何も書かない・言わない)である。能格言語で特に知られているのは、グルジア語及びバスク語である。

グルジア語では以下の通りである。

(1) k' ac-ma k' ar-i da-xur-a. 「男が扉を閉じた」

男-能 扉-絶 閉じる: 過

(2) k' ar-i da-i-xur-a. 「扉が閉じた」

扉-絶 閉じる: 過

このとき、主語としてはたらいっているのは、絶対格のほうであるということに注意しなければならない。全ての言語に主語が存在するとの説を支持しない場合は、「自動詞の主体と他動詞の客体が同じ格標識になる」との説明になるし、自動詞と他動詞の分類を支持し

ない場合は、「ある分類に属する動詞の主語は、別の分類に属する動詞の目的語と同じ格標識になる」との説明になる。

能格言語の母語話者がいかなる世界認識を持っているかを今の一般日本人が知るには、次の文を参考にするとよい。

男（ ）扉（ ）閉じる。

風（ ）扉（ ）閉じる。

一般の日本人はこれらの文を見たとき、あとで説明するように、まず瞬時に「有生物」と「無生物」という、主格言語話者に特徴的な世界認識によって主体を外界から峻別し、動詞もそれに合わせて、「男が（は）扉を閉じる」と「風で扉が（は）閉じる」というように、前者の「閉じる」を他動詞、後者のそれを自動詞に無意識のうちに分け、「風」を具格「で」で標識する。あるいは、「風が扉を」とすることはありえても、「男で扉が」とはしない。ところが、能格言語話者や解離性障害の日本人女性や特殊共感覚を有する私には、これらの「男」と「風」、二つの「閉じる」に区別はない。どちらの名詞にも「で」と「が」が付きうるし、どちらの動詞も自動詞と他動詞でありうる。

そして、実際には現存する多くの能格言語が、ある時制、ある相などにおいては必ずしも能格言語の性質を示さず、絶対格が他動詞の主体を標識したり、能格が自動詞の主体に波及したりするのである。

例えば、グルジア語では、自動詞であっても能格をとることがある。

「男が働く」（未来）・・・主格

「男が働いている」（現在）・・・主格

「男が働いた」（過去）・・・能格

「男が働いた」（完了）・・・与格

また、どのような自動詞が能格をとるのかを以下に示す。

【能格の項をとる自動詞】

pikr-ob-s 考える

lap' arak' -ob-s 話す

sauzm-ob-s 朝食をとる

i-cin-i-s 笑う

nerviul-ob-s 心配する

locul-ob-s 祈る

cxovr-ob-s 住む

cek' v-av-s 踊る

cura-ob-s 泳ぐ

t' ir-i-s 泣く

i-Zin-eb-s 眠る

【能格の項をとらない自動詞】

k' vd-eb-a 死ぬ

xd-eb-a …になる

t' q' d-eb-a 割れる

rč-eb-a 残る、留まる

e-lod-eb-a …を待つ

e-xmar-eba …を手伝う、助ける

vard-eb-a 落ちる

dg-eb-a 立つ

i-zrd-eb-a 育つ

jd-eb-a 坐る

tb-eb-a 温まる

mi-d-i-s 行く

i-k' arg-eb-a 失くなる

ar-i-s …である、いる、ある

意志的・能動的な行為を表す動詞は能格をとりやすいことが分かる。このように、能格言語性が或る条件において成り立たない現象を、類型論上は「分裂能格性」と呼んでいる。

さらに近年、特にクリモフらの内容的類型学では、これまで能格言語の一種とされてきたアメリカ・インディアンの言語などが別の類型に属するとされており、日本では活格言語と訳されている。

活格言語では、自動詞が主に二つの分類（非能格動詞と非対格動詞）を受け、非能格動詞の主語が活格を取るとされる。

活格言語

名詞（不活）＋自動詞。（例：春 β 来る。）

名詞（活）＋非能格動詞。（例：鳥 α 飛ぶ。）

名詞（活）＋名詞（不活）＋他動詞。（例：私 α 花 β 見る。）

だが、研究者によって見解が千差万別であり、能格言語と活格言語が主格言語よりも古形であって、現在の少数民族言語に偏って見られ、絶滅または激減し始めていることは研

究者には共通して把握されているようであるが、「あらゆる人類の自然言語は、能格言語→活格言語→主格言語と変化する」と主張する者もいれば、「活格→能格→主格と変化する」と主張する者もいて、定まらない。私の研究は、前者の説を概ね支持しつつも、これまでに挙げてきた「主格言語」「能格言語」「分裂能格言語」「活格言語」といった類型論、あるいは自動詞と他動詞、非能格動詞と非対格動詞といった分類のほとんど全てに疑念を呈し、一旦解体するものである。それらは全て主格言語母語話者による他言語解釈でしかなく、これらの概念それぞれに根源的な不備があることを、このたびの解離性障害の日本人女性らの世界認識に関する私の研究が示していると考えられるものである。

第三期岩崎式日本語文法解説 (5)

解離性障害者女性等への質問実験

2005年11月29日 起筆

2009年5月29日 改筆

岩崎 純一

私は、現代の一般日本人の男女と、先述の解離性障害者女性たちとの世界認識の差異を調べるため、いくつかの質問実験を行った。その中から一つ、代表的なものを以下に挙げてみたい。

次の各文の（ ）内に、助詞「は・が・の・を・に・へ・で」の中から一つずつ自由を選んで、(a)と(b)に記入し、文を完成させて下さい。「何の助詞も入れない」との回答も可能とします。また、使わない助詞があっても構いません。これまでに獲得した母語に照らして違和感を覚えない範囲内で、自由にご回答下さい。(実際の実験では、以下の文を不規則・順不同に出題した。各文の番号は、私があとからこの文法解説のために付加したもの。)

- (1-1) 私 (a) 移住する。
- (1-2) 私 (a) 結婚する。
- (1-3) 私 (a) 動揺する。
- (1-4) 私 (a) 振り返る。
- (1-5) 私 (a) 泣く。
- (1-6) 私 (a) 転ぶ。
- (1-7) 私 (a) 座っている。

- (1-8) 家 (a) 建つ。
- (1-9) 時間 (a) 残る。
- (2-1) 私 (a) 扉 (b) 作る。
- (2-2) 私 (a) 扉 (b) 閉める。
- (2-3) 私 (a) 海 (b) 好む。
- (2-4) 私 (a) 海 (b) 見る。
- (2-5) 私 (a) 元気 (b) 出す。
- (2-6) 私 (a) くしゃみ (b) する。
- (2-7) 私 (a) 声 (b) 出している。
- (2-8) 木 (a) 花 (b) 咲かせる。
- (2-9) 風 (a) 花の香 (b) 運ぶ。
- (3-1) 私 (a) 糸 (b) 張る。
- (3-2) 私 (a) 犬 (b) 伴う。
- (3-3) 私 (a) 悲しさ (b) 増す。
- (3-4) 私 (a) 髪 (b) 巻く。
- (3-5) 私 (a) 目 (b) 閉じる。
- (3-6) 私 (a) 着物 (b) はだける。
- (3-7) 私 (a) 紐 (b) 結んである。
- (3-8) 梅 (a) 実 (b) 結ぶ。
- (3-9) 寒さ (a) 厳しさ (b) 増す。

この実験により、一般の男女と解離性障害者女性それぞれにおいて、ある一定の傾向が見受けられることが分かった。

まず、先の実験で得られた回答のうち、最も一般的であった回答を参考資料に示した。

質問には、「これまでに獲得した母語に照らして違和感を覚えない範囲内で」との条件を付けており、例えば「私の泣く（とき）」（「とき」が付いた場合、「が」ではなく「の」でも自然に感じるが、付かなければ「の」は不自然である）などの特殊な場合は除外されているため、資料の回答は単文における現代日本人の助詞の使い方の典型例であると言える。

一般の男女の傾向は明確である。ほとんど例外なく主格が「が」と「は」、対格が「を」と認識されていることが分かる。（「は」は副助詞であるが、ほとんどの現代日本人には格機能と認識されていることが分かる。）そして、対格を取るのはいわゆる他動詞(2-1)～(2-9)であると認識されている。(1-1)～(1-9)は自動詞である。(3-1)～(3-9)の動詞は、(b)が「が(は)」の場合は自動詞、(b)が「を」の場合は他動詞である。このように、自動詞

としても他動詞としても形が変わらない動詞を、ここで私はあえて原動詞と名付けることとする。現代日本語ではここに挙げた「張る」「はだける」「結ぶ」など、もはや数が少ない。(私の言う原動詞は、言語学において能格動詞と呼ばれるが、この名称が不適切であることをあとで示す。) (3-1)~(3-9)は、その動詞が原動詞であるがために、回答者はそれを自動詞か他動詞のどちらかに振り分け、(a)の部分も「私は」「私の」などと巧みに調整したのである。

こうして、現代の一般日本人においては、もし主格が「が(は)」ではなく「 α 」、対格が「を」ではなく「 β 」という助詞であったとしても、「時間 α 残る」「私 α 海 β 見る」という文法を免れる世界認識を持つことはなくなったという予測が付く。従って、主格を表す助詞ないし接尾語を(主)、対格を表すそれを(対)とすると、現代の一般日本人の言語認識は次のようになる。

名詞(主) + 自動詞。(例：春が来る。)

名詞(主) + 名詞(対) + 他動詞。(例：私が花を見る。)

今日では、このように、自動詞と他動詞の主語が主格で、他動詞の目的語が対格で標識される言語を、主格・対格言語(略して主格言語)と呼んでいることを先に示した。現代日本語は基本的には主格言語であると言われるが、それは今回の私の実験が示した現代の一般日本人の世界認識においてこそ、そうであると言える。現代の一般日本人には、(1-1)~(2-9)の文において、属格標識とされる「の」(「私の手」など)を用いる箇所、(1-1)~(3-9)の全ての文において与格・向格標識とされる「に」や「へ」(「あなたに」「図書館へ」など)及び具格標識とされる「で」(「電車で」など)を用いる箇所は一か所もないと判断されていることが分かる。

第三期岩崎式日本語文法解説(6)

真格(阿頼耶格)の構築(前言語~能格)

2005年12月1日 起筆

2009年5月29日 改筆

岩崎 純一

これに対して、重度の解離性障害者女性らの回答を見ていく。ここでも参考資料をご覧いただきたい。

●(A)前言語、(B)擬音・擬態言語、(C)無格（空格）言語

(A)から順を追って詳細に見ていこう。一般日本人の世界認識と最も対極にあるのは、むろん、私が出した質問文そのものが理解できない障害段階にいる人、重度の言語障害を持ち、生活する上で必ず他者の特殊な助けを必要とする人の世界認識であることは言うまでもない。回答が得られなかったのだから、助詞の使い方によってこれらの人々の世界認識を分類することはできないが、おおまかに見て、次の三段階に分けられることが分かった。すなわち、

(A)言語らしき言語を全く発すること、解することのできない人

(B)擬音語・擬態語に当たる言葉のみを発する人

(C)他者の名前や物体の名称を話すが、まだ名詞や動詞といった品詞の区別は認識されない人

である。むろん、これらはこの文法解説のための便宜上の分類であって、(A)～(C)は連続的であり、この段階に属する人々は、名詞や動詞といった品詞分類が認識されていない点で共通している。

この(A)～(C)の段階を、それぞれ(A)「前言語」、(B)「擬音・擬態言語」、(C)「無格（空格）言語」と名付けることとする。(A)は、今の我々が「言語」と呼ぶような言語を持つ以前の障害段階であるという意味で、「前言語」とした。(B)は、いわゆるオノマトペと呼ばれる音声語や「あ～」や「う～」といった音声のみが見られる言語障害者の世界認識の段階である。(C)は、周辺の同民族が話す言語の音韻組織（日本語なら清音や濁音、朝鮮語なら平音・激音・濃音、欧州語なら有気音・無気音など）に基づく明確な単語を話してはいるが、「文法」なる概念によって単語どうしが結び付いていない言語障害者の世界認識である。

●(D)識格言語

さて、(D)以降になると、私の質問文の意味を理解し、自由に助詞を当てはめていく意志が共通して見受けられるようになるのであるが、助詞の当てはめ方について、この(D)以降に興味深い傾向が現れる。

まず、文全体や動詞がいかなる意味を持とうとも、ここに属する解離性障害者女性らは全ての文の主体と客体に、あらゆる助詞を与えているか全く与えていないことが分かる。換言すれば、「の」や「で」が、それぞれ属格や具格などといった意味を持たず、ただ単語どうしをつなげる役割を果たすものと認識されていることが分かる。

そして、(D)のような回答を示したのは、男性・女性とも、質問の意味は理解できるが外

出がままならない重度の器質特異者・精神疾患者であった。レット症候群・コタール症候群・カプグラ症候群の女性も、この(D)の回答を示した。

そこで、こういった器質特異者・精神疾患者の言語認識世界における日本語の「の」「で」「を」「が」「は」など、「つなぎ」の役割それ自体を、今、仮に「絶対格」と名付けることとする。また、このように単語を絶対格で接着剤のように膠着させていくだけの言語、すなわち(D)の段階の人々の世界認識にそぐう言語を「識格言語」と名付けることにする。なぜならば、器質疾患や精神疾患や共感覚が重度であっても、質問文の意味・私の説明に対する理解や、いわゆる「単語」や「絶対格」とそれ以外の音声（鳥の鳴き声などの自然音）とが異なるものであるとの認識は、本人たちに存するからである。

●(E)具格言語

次に(E)であるが、この段階には、文(X-1)の主体のみに、「の」や「で」などの特別な格標識を付した回答者を分類した。この特別な格を含む文の動詞を見てみると、人体以外の何らかの道具や手段を用いて行う行為を表していることが分かる。現在の一般的な生活から考えて、「扉を作る」「移住する」行為は、道具や交通手段を用いて行う人為的行為であり、対象そのものが変化をこうむるか、別の対象を指すようになる（木材が扉に変化する、場所が別の地点に変わる、など）。しかし、「扉を閉める」「結婚する」場合、対象である他者や物体自体に何らかの大規模な物理的・化学的変化が起こるわけではない。

そして、このような回答を示した精神疾患者を調べると、女性の場合、ある程度の自力での社会生活が可能な女性がいたのに対し、男性の場合、社会生活における支障の程度が(A)～(D)の男性とほとんど変わらなかった。

そして、そういった道具や手段を用いて対象に変化を与える行為の主体を、これらの精神疾患者は、主格であるはずの「が」や「は」だけでなく、「の」や「で」など、実に様々な助詞で標識したわけである。これらの人々の世界認識においては、(X-1)のような行動をとるときの主体である「私」のみを、(X-2)～(X-9)の行動をとる「私」と区別することが目的であって、「私 α 」「私 β 」などという格標識でもよいことになる。「で」でも「が」でも「を」でも、とにかく何か「工具や交通機関や文明の利器を使って対象や自然環境を改変している、この私」という標識さえあれば、助詞は何でもよいと認識されている。

そこで、このような(X-1)の「私」を、そうでない「私」や「動植物」や「物体」から区別する文法を持つ言語段階を、「具格言語」と呼ぶことにする。

●(F)及格言語

次に(F)であるが、この言語段階では、(X-1)だけでなく(X-2)の主体である「私」にも特殊な格標識をしようという意志が見受けられた。ここでは、人工的な道具や手段の使用・不

使用にかかわらず、他者や対象物に直接的に変化・影響を及ぼす行為を行う主体「私」に、格が与えられることになる。

そして、ここに属する精神疾患患者も、女性の場合のみ、疾患の程度が(E)よりは軽く、ある程度の現代的な社会生活が可能であることが分かる。男性は、いまだ全員が知的障害を持っている。

そこで、このような言語を「及格言語」と名付ける。ここでも絶対格には、「で」や「が」など、どんな助詞でも入り得る他、無標識であってもよいことになる。

現在の言語学の世界には、「具格」という用語は存在し、またそれは現代日本語においては「で」とほぼ一致するが、「及格」なる用語はなく、また、今回の「及格」の概念を表す適切な助詞一文字も見当たらない。しかし、主格言語である現代日本語を母語としていても、世界認識はこの及格言語段階を保っている精神疾患患者がおり、そのうち知的障害がない人は女性に圧倒的に多いであろうという現状、そしてそのような女性が「及格」を一般的な属格「の」や具格「で」を借りて表現しようとする意志は、回答の分布によく見てとれる。

●(G)希格言語

ここでは、「作る」「閉める」「好む」ときの「私」は格標識されるが、「見る」「泣く」ときなどの「私」は標識されず、未だ絶対格で示される。すなわち、行為に利益や被害、好悪や希望・非希望の感情が伴うか否かで「私」が分けられるのである。

この段階になると、女性では半数が言語生活に支障がないのに対し、男性ではなお、ほぼ全員が言語障害者や自閉症者と呼ばれている範疇であることに注目すべきである。

この段階を「希格言語」と呼ぶこととする。この言語段階の「私」についても、現代日本語の助詞一つでうまく表せないが、強いて言うなら「から進んで」であろう。それを、現代日本語の「の」「で」「を」に託して表現しようとする腐心が、回答からうかがえる。

●(H)能格言語

(X-1)～(X-4)の主体に特別な格を付けるということは、すなわち、「他者や対象に向かつて可能な行為」に格標識が付くということである。自らが希求・要望せずとも可能である行為を示す。「好む」ことは自ら望んで行うことであるが、「見る」行為は、視覚としての「見る」能力がある限り、希求する心の有無には関係がない。従って、道具や、他への直接的影響や、希求する心を伴わなくとも、対象となる他者や物体が存在する限り可能であるような、いわゆる「五感動詞」が指す行動は全てここに含まれると考えてよい。一方、「笑う」や「泣く」など、目的語を伴わない動詞は、いまだ格標識を受けない。

この言語段階のように(X-1)～(X-4)の「私」に格標識を付けた女性になると、ほぼ社会生

活に大きな支障がないことが分かる。一方、男性では未だに社会生活に支障が見られた。私の共感覚世界はほぼこの段階にあるが、こうして自らの体験を言語化でき、現代日本語での日常会話にも特に困難がない男性は、この段階においては極めて稀有であると思われる。

そして、この言語段階を「能格言語」と名付けることとするが、類型論上、「能格」も「能格言語」も既存の言葉であり、少し異なった意味に使われている。主格言語や活格言語に当てはまらない言語を、全て能格言語とするのが、現在の言語学の主流であるが、共感覚者である私や、今回の私の実験協力者となった日本人女性の方々からすれば、それらの定義は甚だ不鮮明・不適切である。（能格言語は、「自動詞の主語と他動詞の目的語を絶対格、他動詞の主語を能格で標識する言語）」と定義されている。）私の場合、精神疾患者たちの回答というデータを用いて、いわゆる能格言語を「具格言語」から「意格言語」まで、より正確に分けたことになったと見て差し支えないだろう。

第三期岩崎式日本語文法解説（7）

真格（阿頼耶格）の構築（意格～主格）

2005年12月2日 起筆

2009年5月29日 改筆

岩崎 純一

●(I)意格言語

この段階では、(X-1)～(X-4)の動詞群だけでなく、「笑う」「泣く」「叫ぶ」などの、主体のみで行う再帰的な動詞が加わった動詞群、すなわち、まとめて意志動詞と呼ぶことができる動詞の主体に格標識が付くことが分かる。「～を見る」「～を聞く」「～を嗅ぐ」といった五感動詞で示されるような、目的語を伴う人類の能力（いつでも発揮できる知覚能力）のみならず、「笑う」「泣く」といった自動詞的な、自己の身体に向かう再帰的な行為や状態の主体にも格標識が付される。

この段階の回答を示した精神疾患者女性では、話し言葉を聞いている限りでは、世界認識が一般の非精神疾患者女性と異なっていることは全く分からないと言ってよい。私が聞いてもそうであった。さらに、大勢の人前での発言や公的な場での活動・集団活動が可能な女性が、この段階から現れる。男性においてはなお、言語コミュニケーション上の問題があるため、外見上からも分かるほどである。

この意志動詞の主体を格標識する段階を「意格言語」と呼ぶこととする。あえて現代日本語の助詞に当てはめるなら、「から」であろう。

●(J)活格言語

ここでは、(I)に属する動詞群に加えて、非意志的な自動詞も特別に格標識されるようになっていく。非意志動詞・不随意動詞で示される行為が追加されるのである。「作る」「閉める」「好む」「見る」「笑う」などは、意志的に行うことができるが、「転ぶ」ことは、意志とは無関係に起こることであって、その場合の主体は未だ絶対格標識に終始するのである。「座る」であれば、随意的に可能な行為であるから、(J)の段階で特別な格標識を受けるのであるが、「座っている」は状態であり、(K)の段階で初めて特別な格標識を受ける。すなわち、主体が活動体であるか、または活動的な行為を行う場合にのみ、新たな格を表す接尾語ないし助詞で標識されるのである。

この段階になると、精神疾患女性に加えて一般の女性の回答も見られ、両者の世界認識に大きな差は見られなくなる。この段階においてもなお言語に支障がある可能性の高い、私のような強度の共感覚者男性とは、対照的な結果である。

そして、この段階を「活格言語」と呼ぶことにする。「活格」と「活格言語」という用語も、言語学の類型論において存在するが、これについても、その疑わしき、不正確さをあとで検証する。ただし、主体が活格をとる場合、対象がとる格は「不活格」と呼ばれることが多い。従って、これまで絶対格と書いてきた格を、便宜上、私も不活格と呼ぶことにする。

活動体と不活動体は、一見、有生物と無生物（植物と抽象概念を含む）との対立のように思えるが、(J)ではまだ、不活動の有生物、すなわち状態動詞（「座っている」など）の主体は、不活格（絶対格）をとる。

●(K)主格言語 I

さらに「座って・いる」「立って・いる」などの状態動詞（日本語ではこのように複合動詞となることが多い）非行為動詞、までが特別に格標識され、主体に立つか立たないかが、明確に人間及び有生物か無生物かで区別されるようになる。そして、これら(X-1)～(X-7)の主体が取る格こそ、主格と呼ばれるものであって、一方で(J)で不活格と呼ばれた格は、ここで対格と呼ばれるものになる。ここにおいて、一応の「主格言語」が完成するのである。

そして、女性では、精神疾患だけでなく一般の女性の回答が見られるが、男性においては言語障害者率がゼロになる見込みはないのである。

この初期段階の主格言語は、未だ「家」や「時間」といった無生物や抽象概念が主格よりも対格をとりやすく、「家が建つ」とは言わず「家を建てる」が主流であるため、「主格

言語 I』としておく。

この言語段階で何よりも重要なのは、自動詞と他動詞という概念が初めて成立することである。項を一つだけ持つ（すなわち主語のみを伴う）動詞が自動詞、項を複数持つ（例えば、主語と目的語）のが他動詞である。この段階に至って初めて、例えば「残」という意味が「残る」と「残す」とに厳格に分化するのである。ただし、「建つ」（現代では「建つ」と「建てる」）のように、日本語は、近世までは未だ自動詞と他動詞の終止形が同形である動詞が多く、少なくとも動詞に関しては、江戸時代後半までは主格言語に成り切っていなかったと言えるのである。

●(L)主格言語 II

(K)の段階と比べて、有形（または可視的）無生物が主格として扱われるようになった段階が(L)である。ここには、無生物を主語にとる動詞が含まれる。「建つ」は、「家」「建物」「小屋」などの無生物名詞を主語にとる。「壊れる」「光る」「よどむ」などもここに含まれる。しかし、抽象概念が主格をとることは、まだほとんどない。抽象概念語彙の発達は、当然、その言語話者の社会の科学文明の進展程度と関係するから、日本では江戸時代末期までは、この(L)の段階に達しようがないのである。

この段階の言語認識を示す解離性障害者女性はかなり少ない。代わりに、初めて一般男性の中から、この段階に属する者が現れる。

この言語段階を「主格言語 II」と名付けるとする。現代日本語は、主体の性質に関係なく、あらゆる名詞が主語に立って主格をとり得るし、動詞もほぼ自動詞と他動詞との対立構造となっているため、次の(M)や(N)に属すると言ってしまってよいのであるが、明治時代の日本語では、「時間」や「会議」などという抽象概念が主語に立つことが現在よりも少なかった。例えば、今でこそ「私が笑う」も「家が壊れる」も「時間が過ぎる」も、同様に使う日本人であるが、「私」「家」といった人体や具体物に比べて、「時間」「原因」「競争」「会議」などといった抽象概念は、本来は日本語では主語に立ちにくい。明治・大正期の新聞を一部でも手にとって文法調査をしてみれば、誰にでも分かることである。「会議が終わる」などは、元は英語をはじめとする西洋語の翻訳によって夏目漱石らの手で生まれた文体であって、近代初期までは「会議を終える」と言うのが普通であった。近代日本語は現代日本語に比べて、(X-1)~(X-8)に該当する名詞は主格をとり、(X-9)の名詞は未だ対格をとりやすい段階にあったと言えることになる。従って、(L)の段階は、明治・大正・昭和日本語が辿ってきた過渡期の段階と言える。

●(M)主格言語 III

この段階では、もはや(a)の助詞は「が」「は」「の」、(b)の助詞は「を」「は」「が」のみで

あり、また全ての(a)が主格をとりうる（抽象概念も主格をとりうる）ようになっている。

この段階に属する解離性障害者は一人の女性のみであって、残るは一般の男女ばかりである。この段階を「主格言語 III」とする。

●(N)主格言語 IV

そして、最後に(N)の段階において、主格＝「が・は」、対格＝「を」という厳格な主格・対格言語の文法構造が成立するのである。残る一般の男女の全員が、ここに含まれる。

日本語においては「私」「扉」は名詞、「が」や「は」や「を」は助詞という別分類であって、この主格言語 IV ではその意識が保たれているが、「私が」「私は」「扉を」という厳格な構造は、表面上はひと固まりであって、「私で」「私に」などをとる精神患者の世界認識の反映を許さない文法となっており、ほとんど英語の「I open the door.」の「I」「the door」の機能との一致を示している。この段階を「主格言語 IV」とする。

●(O)主格言語 V

今回の日本人による回答とは関係がないが、(N)の段階からさらに、主格＝「が」、対格＝「を」というように、格機能と助詞とが一对一で対応する規則が強固になった場合、どのような文法構造が成立するかを考えてみる。すると、現代英語や現代欧州語のように、「私」を「が」とつなげて、一単語としてしまうことが考えられる。もっとも、このような傾向は、すでに主格言語 II の段階から見られ始める。

ここでは、「が」以外の格標識の使用は文法違反・言語障害であると見なされるし、そもそも「が」以外の格標識を使いようがない。このことこそ、日本よりも英語圏で先に「言語障害」や「認知症」なる概念が現れた要因なのである。

例えば、英語の「I」は、「私」ではなく「主体である私が」であるし、「my」も、「私」ではなく「所有者である私の」である。「I love you.」を「My love your.」と言うと誤りであることになる。名詞と格機能は強固に結び付いており、逆にそれらを別々に使うことがないがために、そのような文法が可能となるのである。英語圏の幼児は、「My love your.」などの「間違い」を通過して育つことが知られる。このようなことは、すでに欧米の言語学者によって指摘されている現状を見るまでもなく、日本人（特に解離性障害者ら）にとっては今でも当たり前のことである。

言い方を変えれば、日本人精神患者（特に女性）の世界認識を正確に表現し得る文法構造は、現代欧米語にはもはや存在しないと言ってよい。現代英語では特に、語順の固定が主格言語性と同義である。

「flowers」は「花」であるが、「Flowers produce seeds.」（花は種子を生じる。）では、「Flowers」は「花は（花が）」であって、同形であっても機能が異なっている点で、日本語における格

助詞と呼ばれるものは存在せず、最初から単語に組み込まれていることが分かる。この「flowers」を無標の絶対格などと思ってはならない。（そう思い込んだがために、イエスペルセンをはじめとする言語学者らによって、「類型論的に、現代英語はいつかは中国語のような孤立語に達し、言語の文法はそのように循環する」などという、極めて疑わしき学説と論文が登場するに至った。）

実際はその反対に、「Flowers」は厳格な主格であって、名詞と主格性とを一体化して、その厳格さを極度にまで高めたものである。今日では、先の「孤立語」に対し、格機能が単語の一部（変化または無変化）として組み込まれているこのような言語を「屈折語」と呼んでおり、今でも格機能が単語として独立している日本語のような「膠着語」とは区別される。「屈折語」は、現在のいわゆる欧米文明圏あるいは現代日本の大多数の健常者の世界認識を反映した言語であって、少なくとも(A)から(J)あたりまでの精神患者の世界認識を忠実に反映する文法構造を持たない。

その点、日本語では「私が好きな花」「私の好きな花」の両方が許され、名詞と格機能との結び付きが緩やかであるため、日本語は(O)段階には達していないと言えるのである。「私で扉の閉じる」などという言い回しをする精神患者が日本社会でも文法違反であると認識されつつあり、日本語の方言や和歌や古語の教養のない言語聴覚士・作業療法士・臨床心理士らの手に精神患者や若者や高齢者が預けられている現状は、むしろ日本人の世界認識が日本語の特質を失って欧米化しつつあることの証左である。日本人でも欧米人でも、幼児期や、脳に何らかの支障が出た高齢期に(A)から(J)あたりまでのような言い回しが増えるのであるが、現代英語母語社会では明らかな文法違反と見なされるため、むしろ社会からの偏見への対策も早かった。ただし、そのような社会にあっては、こういった世界認識は、「個性」や「障害」と見なされはするが、本来の日本語のように「民族の普遍的な特質」と見なされることはない。

次に、各言語段階において実際に回答に使われた助詞そのものについて、日本の古語と照らし合わせながら検証する。

第三期岩崎式日本語文法解説（8）

格標識の分析「無標（φ）」～「の」

2005年12月4日 起筆

2009年5月29日 改筆

岩崎 純一

●無標（ ϕ ）の使われ方

まずは、無標についてである。名詞と動詞のあとに助詞に当たるものを何も入れないという、解離性障害者・重度共感覚者・自閉症者・性的被害者女性が多く示した構文は、上古代日本語においては最も一般的なものであったことは言うまでもない。「花無し」「雪降る」などである。

現代日本語でも、話し言葉で助詞を省いて、「私、泣いてしまった」「私、扉閉めたよ」「あそこに家建ったね」のように話す傾向は、特殊感覚保持者・精神疾患者に限らず、日常的である。にもかかわらず、「助詞を何も入れない」という回答が、一般日本人が圧倒的多数を占める（N）に向かうにつれて減少することは、これらの人々以外の一般の男女においては助詞を省いて会話する場合でも、実際にはあくまでも「が」や「を」の省略であって、主格・対格の厳格な対立構造が日常的に認識されていることを示すであろう。「雪降る」は、現代の一般日本人にとっては「雪（が・主格）降る」であって、上記の人々（特に女性）や私にとっては「雪（無標の絶対格）降る」と認識されていることになる。すなわち、のちに「雪を降る」という対格標識を得ることになる構文である。

さらに、(D)に属する性的被害者女性において、「私で扉で閉める」「私の花の好む」といった連続同一の助詞表現が全て「私、扉、作る」といった無標の文表現と平等に認識されていることは、「で」や「の」を、格助詞ではなく、ただ単語どうしの「つなぎの役割」と認識していることを示している。今でも「一の二の三の・・・」などと数える人がいるが、日本語のあらゆる助詞は、元はこのように「つなぎ」「口調を整える音」でしかなかったという感覚を懐古することは、第三期岩崎式日本語理解の一助となるであろう。すなわち、あってもなくても同じことである。換言すると、その「ある“つなぎ”の機能」さえ示すことができれば、「が」という形でも「ピ」という形でも、「 α 」という形でもよいことになる。重度の精神疾患女性性は、いわば日本語の黎明期と同じ言語認識世界にいると推定できる。

そして、(E)、(F)と順に主体が格標識を得ていくのであるが、のちに不活格・対格に発展する(b)の箇所は、「を」が初めて最多の地位に立つまでは、無標「 ϕ 」が最多の地位であり続けるのである。むろん、上古代から江戸時代までの日本語の変遷過程と合致するものである。

●「が」の使われ方

現代の一般日本人には、もっぱら主格を標識すると認識されている「が」であるが、重度の精神疾患者ほど、対格でさえも、「を」に頓着せず、むしろどちらも「が」で標識することに違和感がない傾向があった。すなわち、「私が扉が閉める」「私に扉が閉める」といった回答である。

重度の精神患者は、「閉める」「作る」といった行為を表す動詞の目的語も「が」で標識していることが分かる。主語を標識する助詞と目的語を標識する助詞とが、別物であると認識されていない、言い換えれば、主体と客体なる概念自体がその世界認識の中に存在しない。

そして、「 ϕ 」「の」「で」「を」などの使用頻度が(N)に近づくとつれて減少するのに対し、この「が」は使用頻度が増して、(N)ではもっぱら(a)すなわち主格標識に特化される。それに伴って、精神患者の急激な減少と一般日本人の急激な増加が見られる。

しかし、対格に「が」を用いる場合は、現代日本語にもその名残がないわけではない。以下の各文について、一般の男女にどの文を自然と感じるかを尋ねた結果、以下のようになった。

(X-3-1) 私 (が・は) 花 (を) 好む。

(X-3-2) 私 (が・は) 花 (が) 好む。

(X-7-1) 私が花が好きだ。

(X-7-2) 私は花が好きだ。

(X-7-3) 私が花が好きな理由は、～

(X-7-4) 私は花が好きな理由は、～

(X-4-1) 私 (が・は) 海 (を) 見る。

(X-4-2) 私 (が・は) 海 (が) 見る。

(X-7-5) 私が花が見たい。

(X-7-6) 私は花が見たい。

(X-7-7) 私が花が見たい理由は、～

(X-7-8) 私は花が見たい理由は、～

一般の健常者日本人は、(X-3-2)と(X-4-2)は不自然な言い回しだと感じている。ところが、「好む」を「好きだ」、「見る」を「見たい」とするだけで、自然な言い回しになったと感じる、驚くべき「変質的な」外界認識を持っている。さらに、(X-7-1)と(X-7-5)をより不自然な言い回し、(X-7-2)(X-7-6)をより自然な言い回しと感覚するのである。ところが逆に、「理由は～」をうしろに付けると、(X-7-3)と(X-7-7)を自然、(X-7-4)と(X-7-8)を不自然と感じるようになる。

重度の解離性障害者女性は、これに対し、ここに挙げた例文のどれもが自然であると回答したことを付け加えておく。

現代日本語においても、格標識がいかに不安定なものであるかということ、またその不安定さは、「が」や「は」それ自体ではなく、「私」「花」「理由」「見るのか見たいのか、見たのか、見るだろうか」といった名詞や動詞の意味内容、すなわち、文法用語で時制

や相や法と呼ばれるもの自体が決定するものであることを、これらの例は示している。日本語においては現在でも、主格・対格関係、自我・他我関係、語と語の厳格なつながりよりも、語の意味内容・話題性が優越している構文が生き残っていることが分かる。「が」が主格、「を」が対格、といった分類は、実際は不可能・不適切であり、むしろ主題や場や文脈といったものが「が」や「を」の意味を決めていると言える。

現代日本語にこのような傾向が生き残っていることは、日本語にもかつて、主格や対格、ひいては属格や具格などをも明確に区別しなかった時代があったことを物語っている。「水が飲みたい」（願望）、「本が売ってある」（状態）、「字が読める」（可能）、「その絵が気に入った」（嗜好）、これらは全て、現代日本人であっても、「を」の代わりに「が」を日常的に用いている例である。重度の精神疾患患者には、これらの動詞・述語だけでなく、全ての動詞・述語に対して、目的語の格が「が」でも「を」でも何でもよいという認識が現在も残っているのである。

「が」は、「の」との関連においても不安定であり、「私が好む人」「私の好きな人」「私の好む人」は自然であって、「が」も「の」も主格標識と認識されるが、「私が好きな人」では「私（のことが）好きな人」とも取れ、現代でも口語においては「が」が対格となりがちである。そうであるにもかかわらず、このたびのような私の特殊な実験に際しては、ほとんどの非精神疾患患者が、主格が「が（は）」、対格が「を」であるかのように答えるのは、世界認識それ自体は欧米語のそれに移行しているからに他ならないであろう。

● 「は」の使われ方

「は」を「が」と同様の主格標識である、かつ「私は」を「私が」と同様に主語であると認識するのは、欧米の厳格な主格言語の影響を受けた現代日本人の特質であって、「は」が主格標識でないことは、既に膨大な先行研究によって示されてきた。有名な「象は鼻が長い」もその一例に過ぎない。「は」は、場合によって話題格や主題格などと呼ばれ、「象は鼻が長い」は、「鼻が長い」ことが象において成り立つことを示している。現代日本語では、「は」は副助詞に分類されている。むしろ、「の」「で」「を」「が」などは格助詞に分類されている。ただし、格助詞と副助詞の境界も、また曖昧なのである。

そこで、重度の精神疾患患者の回答(D)を見てみると、先述したように、この段階では男女とも助詞を「つなぎ」としてしか使っていないのだから、「が」が主格で「は」が話題格であるとの認識もなく、「象は鼻が長い」でも「象の鼻が長い」でも「象を鼻で長い」でも「象、鼻、長い」でも、全て同じと認識される。むしろ、この「は」こそ、絶対格に近いニュアンスを持つものであって、「私は扉は作る」などと単語どうしを全て「は」でつなぐと、重度の精神疾患患者の世界認識に近づく。

現代の一般日本人でも、次の文を読んで理解することはできるものである。しかし、これは英語には翻訳できない文である。

「私は今日は編み物はしないとはあなたには二度は言ってはいないとは自分では気づきはしなかった」

しかし、日常生活において同様に「が」と「は」を混用しているとは言っても、現代の重度の精神疾患者と一般日本人とでは、その認識の仕方が異なると言ってもよいであろう。正確には、「は」のはたらきが格助詞とは異なるものであるとの認識は、明治時代の近代化・西洋化の過程でなされるのであって、上古代では「の」も「で」も「に」も、全ての助詞が「は」の主題格性を持っていた。現代の一般日本人では、主格＝主語との認識が、「が」のみならず「は」にまで広げられる形で「が」と「は」とを混同していると言える。その混同の仕方は、重度の精神疾患者とほぼ対極にあるかもしれない。

●「の」の使われ方

「の」は、(a)において、いくつかの段階で使用頻度が最も高かった助詞である。すなわち、一般の日本人が「が」や「は」を入れた箇所である。重度の精神疾患患者、特に女性ほど、属格とされる「の」を主格に当たる位置に使っていることが分かる。

しかし、このような言語認識が決して反日本語的なものでないことは、例えば先のように「私が好む人」「私の好きな人」のように現代日本語でも、ある種の述語を用いた場合に主格に「の」を用いること、何より上古代日本語においては「の」は「が」以上に主格標識として一般的であった事実をもって自明であろう。例えば、次の二つの「の」を、前者が属格、後者が主格であると峻別して翻訳するのは現代日本人の野暮な視点であって、実際には属格と主格とが分化していない使い方である。

「また家のうちなる男君の来ずなりぬる、いとすさまじ」(枕草子)

現代日本語では、「の」は、先の「私の好きな人」のような例のほかは属格（英語で言う所有格）にほぼ特化されている。（そもそも、「私の好きな人」の「の」を「人」に掛かっていると見れば、属格となる。） 反対に、「が」は「我が心」のように今でも属格に用いる場合があり、そもそも「の」も「が」も、格機能と言うよりは、名詞や動詞といった単語どうしをつなげる「つなぎ」の役割としか認識されておらず、「私が扉の閉める」「私が花の見る」などのように、「の」を対格として用いた回答が多かったことから、それが見てとれる。このような回答もまた、精神疾患女性に圧倒的であり、にもかかわらず、このような言語認識をしていながら、普段は「が・は」と「を」との対立の厳格な現代日本語を意識的に操って社会生活を難なく送れるのも、女性が圧倒的に多かった。そして、(N)に近づくほど「の」の使用頻度は少なく、最後は「が・は」と「を」とに立場を譲って消

滅してしまう。

第三期岩崎式日本語文法解説 (9)

格標識の分析「で」～「へ」

2005年12月5日 起筆

2009年5月29日 改筆

岩崎 純一

●「で」の使われ方

現代の一般日本人にとって「が」や「は」で表されるような主語を現在の具格や処格「で」で表そうとするこの重度の解離性障害者女性の世界認識は、あらゆる回答の中でも、現代の一般日本人にはとりわけ理解しがたい例と考えられる。「私で扉作る」「私で座っている」などがそれである。

「で」は「にて」の変化であり、現代日本語ではほとんど具格・処格に特化されている。そこで、一般の男女も含め、補助的に以下の質問を行った。その結果、全ての一般の男女が、「風で扉が（は）」「風が（は）扉を」と「私が（は）扉を」と回答したのに対し、重度の解離性障害者女性では、両方の助詞をそろえようとする意志が強うかがわれ、それらに加えて「風で扉を・私で扉が（は）・私で扉を」という回答を見ることができた。

風（ ）扉（ ）ひらく。

私（ ）扉（ ）ひらく。

（「ひらく」は、「～が（を）ひらく」「～が（を）閉じる」「～が（を）伴う」など、同形のままで自動詞としても他動詞としても使える動詞の一種であるから、能格動詞、すなわち私の言う原動詞である。）

この「ひらく」を原動詞でない「あける」にすると、途端に一般の男女は主語の変更を行って、「風が扉を」と「私が扉を」などと回答する。ところが、重度の解離性障害者女性らは、「風で扉が（を）あける」「私で扉が（を）あける」と答える。

風（ ）扉（ ）あける。

私（ ）扉（ ）あける。

従って、問題文に対し、これらの女性は、「主格や対格を標識する助詞は何か」「使われている動詞が自動詞か他動詞か」を考えたのではなく、「自分の世界認識を、欧米語化している現代日本語で使われている助詞に仕方なく当てはめると、どの助詞に近いか」と考えて回答したとも言える。それが、(E)や(F)の段階における「で」の優越の理由である。むしろ、他の助詞も同様である。日本の重度の精神患者は、現代日本語を母語とする現代日本人が周りにいる状況で育っているがために、「で」が「道具で」「車で」など具格・処格標識らしいことはすでに分かっており、それに影響を受けて、性的被害などによって崩壊した自己意識の表出として「私で」と回答したにすぎない。従って、「で」という回答が多いからと言って、それが一般日本人と全く同じ「で」の意味内容を指しているとは考えられない。現代日本語の「で」に近いであろうことが推定できるのみである。この実験は、現代の一般日本人が「で」を英語の「by」や「with」や「at」などと同格と見て、それを日本語に逆輸入・再転用していることを示す良い例である。

いずれにせよ、現代の一般日本人が、重度の解離性障害者女性たちの回答について、「私は、私という手段で扉を作る」「私は、私という人間において扉を作る」というニュアンスを想定することは誤りではなく、彼女たちは、「風」に対するのと同じように「私」自身を傍観していると思って頂いてかまわない。「で」が「φ（無標）」や「の」など他の助詞との役割の上での区別がない(D)の段階はもちろんだが、「木で扉を作る」「電車で移動する」の「木」や「電車」と同様に「私」を扱う点は、人間と自然、有生物と無生物とを文法でも分けようとしないう「拡散した自己による強い意志」が表明されていることを示す。これらの女性の回答を見る限りでも、「主格・対格言語」なるカテゴリーが普遍的なものではないことが暗示される。

●「を」の使われ方

重度の解離性障害者女性らが示した主格標識としての「を」も、一般の日本人には理解しがたい例であろう。これらの人々においては、一般的には対格の標識と思われている「を」を主格「が・は」の代わりに用いることに抵抗がない傾向にあることが見てとれる。

だが、これについても、特に上古代の和歌では「を」が主語となる名詞に付く例は多いことが知られる。例えば、

「女郎花多かる野辺に宿りせばあやなくあだの名をや立ちなむ」

では、「を」は主語の「名」に付いている。また、

「瀬をはやみ岩にせかる滝川のわれても末に逢はむとぞ思ふ」

においても、「瀬の流れが速いので」と主語「瀬」を擬似主体化している。「を」が他動詞の対格として特化されるのは、近代化以降である。

現代では、例えば「家を」の場合、他動詞「建てる」をつなげるのが自然であるため、「家を建つ」「名を立つ」という重度の解離性障害者女性の世界認識は、いっそう一般日本人には不自然と感じられようが、古語においては自動詞も他動詞も終止形は「たつ」であり（むしろ、動詞の自他の概念がなかった。非終止形における活用の区別は、自動詞と他動詞による区別ではない）、「家を建つ」としてもおかしくはない。ただし、「家を建つ」では、「家が建つ」のか「家を建てる」のかが判別できないことになるが、言い方を変えれば、上古代日本人にとっては、「（誰かによって）家が建つ」（家が建つことに焦点）ことと、「（誰かが）家を建てる」（家を建てる人の自己意識に焦点）ことについて、終止形においては文法的に区別がなくとも困らなかったのである。

この私の論説の根拠は、平安時代末期までは動詞が終止形である場合には主体が格標識を受けることがほとんどなかったことである。むしろ、主語は無標であることが基本である。重度の解離性障害者女性が主語標識は「が」「は」「を」などのいずれでもよいと感じていることは、決して奇妙なことではなく、格標識があってもなくてもよいのである。

「を」は近代化以降、特に対格の標識として特化されるのであるが、抽象概念や無生物を主格に立てることは戦前日本語までは少なく、「時間が残る」、「会議が終わる」といった言い方は、少なくとも明治以降の翻訳文体である。社会生活に支障が出るほどの重度の解離性障害者女性らは、「が」と「を」の区別さえ曖昧なのに対し、言語に支障のない軽微な解離性障害者女性は、「を」をほぼ対格ととらえ、一般女性と同じ世界認識を持ちつつある過渡期にいることが分かる。

● 「に」の使われ方

「に」は、現在では与格や処格として用いられることの多い助詞であるが、古語においては現在のように確定的な意味として用いられたのではなかった。

「水に洗ひてたのしびとせんよりは、・・・」

この場合の「に」は、現在の「で」に近い。すなわち、ほとんど具格と言ってよいものである。重度の精神疾患ほど、「で」に次いで「に」を主体に付した（「私に扉を作る」、「私に結婚する」など）のは、「で」「に」が上古代語的な具格・処格として認識されているからに他ならないであろう。

「春の野に若菜つまむと来しものを散りかふ花に道はまどひぬ」

「花に」の「に」は、「花によって」という原因・理由を表しており、このような表現は現在でもしばしば用いることを考えると、精神患者の「私に（よって）扉を作る」との表現が決して不自然なものでないことが理解できよう。

● 「へ」の使われ方

「へ」は、現在では向格や着格として用いられることが多く、古語においても大方そうであったが、「に」と「へ」の意味の差は、近世まではほとんどなかった。「京へ筑紫に坂東さ」の格言が示すとおり、「に」と「へ」と「さ」の差異は、意味によるものでなく方言差であって、これは重度の精神患者が示した「主体の格標識は何でもよい」とする傾向を思わせる。

もっとも、上代においては「へ」の使用例は少なく、古代以降に増えてゆくのであるが、注目すべきは、精神患者の回答でも(D)から順に「へ」が増加傾向を見せることである。

さて、ここまで、質問文に用いた動詞の意味と、実際に回答に見られた助詞について、一通り見てきた。このたびの実験で明らかとなったことを、今一度総括しておきたい。

まず、解離性障害などの精神患者の男女と現代の一般の男女の回答の差異を、動詞の意味（道具の有無、他への影響の有無、希求性の有無、能力の有無、意志の有無、行為性の有無、生命性の有無、主格性の有無）に重点を置いて追ってきた。「前言語」→「擬音・擬態言語」→「空格言語」→「識格言語」→「具格言語」→「及格言語」→「希格言語」→「能格言語」→「意格言語」→「活格言語」→「主格言語 I」→「主格言語 II」→「主格言語 III」→「主格言語 IV」→「主格言語 V」がつながり、「前言語」から「識格言語」の段階が、社会生活が困難になるほどの最も重度の解離性精神疾患に生きる人の言語認識世界であり、順に疾患の程度が軽減されていき、「主格言語 I」においてほぼ現代日本語の表面上の文法構造との一致、「主格言語 IV」においてほぼ現代の一般日本人の実際の世界認識との一致が見られることが示された。識格・絶対格言語から主格・対格言語 V に変遷する過程は、「西洋的自我が行うこと」「人為的に行うこと」が次第に増えていき、最後には主格言語で記述された一神教的超越的理念を外界に上意下達し、あらゆる自然・環境を人間が制御・支配し、それを文法にも反映させようとする過程であることが分かる。

助詞については、「単語どうしをつなげるはたらきをするもの」と認識する段階に始まり、やがて「属格や具格といった、人間の原始生活に最低限必要な意味合いを、単語どうしの関係に与えたり、口調を整えたりするもの」との認識を経て、「厳格な主格言語を象徴するはたらきをするもの」と認識するに至るまでの、様々な段階に区分できる。それはまさに、日本語が上古代日本語から現代日本語に至るまでに辿ってきた変遷過程と同一である。

そして、回答者の分布で言うと、「各々の助詞の役割を断定的に見ず、語と語のつながりの役割であるとする世界認識」、「明らかに人為的な行動以外は、単なる無標 ϕ や『の』や『で』などの絶対格として放任しておく世界認識」、「前近世日本語的な世界認識」は、重度の精神疾患者の男女に見られ、また現代の社会生活を送れる絶対的な人数は女性に多い。一方、「一助詞一格という厳格な世界認識」、「全ての名詞に主格を取らせる世界認識」、「現代日本語・現代欧米語的な世界認識」は、ほとんどの一般の男女に見られ、また絶対的な人数は男性に多い。そして、全体として同じ言語段階にいる男女を比べた場合、男性のほうが何らかの言語障害・社会生活での支障を伴いやすいがために、自力で自らの世界認識を言語化できず、それが「解離性障害や統合失調症や共感覚を告白するケースは女性に多い」という結果につながっているものと考えられる。

最後に付記しておくが、文法が混乱するこういった現象を専門家は「失文法」「錯文法」などと呼んでいるが、結局、(D)における「 ϕ 」や全ての助詞は絶対格、(E)の(X-1)の助詞は具格でそれ以外は絶対格、(F)の(X-1)と(X-2)は及格でそれ以外は絶対格、などと順に見ていけば、全てが整然と説明できるのであって、ある一時代の共時態のみを見て文法認識の正誤を判断することがいかに危険なことかを、これらの回答は物語っているであろう。日本語を覚えてたての幼児や、脳卒中で言語生活に支障のある高齢者に限らず、重度の解離性障害者女性でさえ、文法を「失って」はいない。文法なる概念がなかったり、その認識の仕方が異なったりしているというのみである。実際、(D)や(E)のような回答を示した女性も、ジェスチャーにおいては現代日本語の「私が花を見る」が指す内容を正しく示す。ただし、そのジェスチャーを「主格・対格文法」だと解釈することの愚かさを私は述べたのである。少なくとも、それは「失文法」「錯文法」ではなく、「異文法」とすべきである。そして日本人においては、民族として最も新しく身に付けた欧米語的文法や世界認識から順に失っていく点に注目すべきである。すなわち、日本人精神疾患者の世界認識を綿密に調べると、疾患の程度が重いほど、なぜ江戸時代以前ないし戦前の日本人のそれに合致するのか、言語に支障が出るとき、なぜ我々は過去に戻るのか、という点に注目すべきなのである。

第三期岩崎式日本語文法解説 (10)

既存の類型論に対する格分類の再編

2005年12月8日 起筆

2009年5月30日 改筆

岩崎 純一

現在の英語をはじめとする欧米語や、現代日本語などの主格言語と異なる文法を持つ自

然言語は、今日の言語学では能格言語や活格言語と呼ばれている。先の識格言語や及格言語といった呼称は、私による、解離性障害をはじめとする精神疾患の世界認識を精査した結果を用いての、新たな類型論の提案と言うこともできる。

今一度、現在の言語学における能格言語、活格言語、主格言語の定義について、概観しておく。

能格言語

名詞（絶）＋自動詞。（例：春 β 来る。）

名詞（能）＋名詞（絶）＋他動詞。（例：私 α 花 β 見る。）

活格言語

名詞（不活）＋自動詞。（例：春 β 来る。）

名詞（活）＋自動詞。（例：鳥 α 飛ぶ。）

名詞（活）＋名詞（不活）＋他動詞。（例：私 α 花 β 見る。）

主格言語

名詞（主）＋自動詞。（例：春が来る。）

名詞（主）＋名詞（対）＋他動詞。（例：私が花を見る。）

能格言語とは、自動詞の主体 **S** と他動詞の対象・目的物 **O** が同じ格標識（絶対格）を受け、他動詞の主体 **A** がそれらとは異なる格標識（能格）を受けるとされる。絶対格はほとんどの場合、無標である。能格時代の日本語も例外ではない。（「花無し」「雪降る」など。）

先の考察で、「風で」のみならず「私で」という言い方が日本の重度の解離性障害者女性に多く見られたのは、その世界認識が能格言語話者と同様であるからに他ならない。また、グルジア語に関しては、意志的・随意的な行為を表す動詞文は、もはや能格言語の段階にないのだから、グルジア語は意格言語であるという分析ができるのである。

「分裂能格性」なる概念は、あくまで主格言語を母語とする人々（すなわち、動詞を自他に分けたり、森羅万象を主体と対象物、人間と有生物と無生物とに分けたり、時間を直線と見なして過去と現在と未来とに分けたりする世界認識を持つ人々）から能格言語を見た際の分析であって、能格言語話者にはそのような認識はなく、それが一つの言語体系であって、「分裂」でさえないだろう。

私の言語獲得記憶という（私にとっては何よりも確実だが）曖昧なものを持ち出さずとも、私の先の実験に示された精神疾患の世界認識に照らして考えてみれば、日本の言語学者までが存在を主張する能格言語・活格言語なる言語は、私の考察による識格言語から活格言語までの、どれかの言語を指しているのである。

「言語は能格→活格→主格言語の順に変遷する」との主張は、言語学者近藤健二氏らによってなされており、私を含めた特殊共感覚保持者や解離性障害者女性の幼児記憶にほとんど合致する見事な見解であるが、これは「活格」の定義が私とほぼ同じであるからに他ならない。すなわち、能格言語は、「意志的・随意的な行為」にも能格を当てていき、「活動するもの」と「活動しないもの、活動していない有生物」との間に線が引ける段階で活格言語と称されることになる。そこからさらに全ての名詞にも活格が波及して主格となり、その言語体系は主格言語と称されるようになる。私の場合、能格から活格に至るまでに追加される「意志的な行為」を、「泣く」や「笑う」のような感情的行為と、「転ぶ」や「落ちる」のような純然たる不随意行為とに分けている点で、より正確な基準を設けたのである。

「活格→能格→主格」との主張であるが、これはクリモフらによって展開され、日本の言語学者の多くもこれに賛同してきた。しかしこの主張は、「活格」の定義が全く異なるというだけでなく、そもそも人類の言語の変遷過程を見誤っていると考えられ、先の近藤氏をはじめごく少数の学者のみによってそのことが指摘されたのであったが、このたびの私の実験結果によっても誤りである可能性が示されたのではなかろうか。

まず、「活格」の定義であるが、活格言語話者（例えば、グアラニー語など）は、行為と状態すなわち「動くこと」と「動かないこと」とを区別しているのみであるのに、クリモフらはそれを有生物と無生物の対立であるとしており、能格言語では有性性と無性性の対立はもっと厳しく、それが弱まって成立したのが活格言語であると結論している。近現代的な生命の有無によって名詞を分類するのは、主格言語の発想であって、そのような文法はアメリカ・インディアンには存在しないだろう。ここでクリモフらが言う活格言語とは、私の考察で言えば識格言語から希格言語のいずれかに相当するのであろうが、「人類の言語の変遷過程は、有生物と無生物の対立がなくなって自然と一体化していく過程であり、その先端に欧米の主格言語文法がある」などという認識は、大きく誤っていると考えられる。

それにしても、日本の言語学者の間で、主格言語に対立する言語が、私の言う及格言語や希格言語や意格言語ではなく、能格言語であると認識され、様々な議論が能格言語を中心に行われるのはなぜであろうか。

ここで、私が出題した質問文を参考資料の表のように並べ替えてみる。（参考資料の「動詞の連続性」）

識格言語から能格言語までの自動詞文、意格言語から主格言語 III までの他動詞文を見つけようとすると、非常に少ないことが分かる。

例えば、識格言語の自動詞文（もっとも、私の用語では「識動詞文」）を作ると言っても、「目的語を取らない行為のうち、人工的な道具や手段を用いる行為」を表さなければならぬが、目的語を取らない文を作ること自体が難しい。例文の「移住する」は、自動詞でありながら、常識的に考えて大がかりな作業と移動とを伴うことから、条件を満たす文の一つではある。しかし、「移住する」を和語に直すと「住む所を変える」となり、「を」（対

格)が現れる。すなわち、識格言語段階において、主体が格標識を取るということは、同時に他動詞ないし他動詞的な意味を暗示させる表面上の自動詞が述語となる、ということに等しい。(そのために、日本語においては目的語をも同時に表現してしまう漢字熟語が多くなってしまふのである。)

反対に、例えば活格言語において、自動詞文「私が転ぶ」に対応する他動詞文、すなわち「行為の対象がありながら、不随意的に起こる行為」を表す文を作ろうと思えば、結果として人体の生理現象など、主体自身の再帰的な行為が中心となる。

これと同様に文を作っていくと、ちょうど能格言語の段階で、能格主体に続く動詞と、絶対格主体に続く動詞との区切りが、ほぼ他動詞と自動詞との区切りに一致することが分かる。これが原因で、「能格言語は、自動詞と他動詞とで、その主体の格標識が異なる言語である」との誤った解釈を日本の言語学者がことごとく与えてしまったというのが、私の見解である。実際は、「能格言語は、対象となる他者や物体や概念に対して実現可能となる行為を表す動詞と、人体や主体自身のみで実現可能な行為を表す動詞とで、その主体の格標識が異なる言語」なのである。現行の言語学が知りたがっている能格言語話者の世界認識は、私の言う識格言語から活格言語までの通時態のどこかに位置するのであって、彼らは動詞の自他など考えてもいない。むしろ、あらゆる動詞が右の能格動詞的に認識されているのである。

そうなると、動詞の自他という概念がいかに主格言語のみに適用可能なものであるかがよく分かる。冒頭の模式図は、私ならば以下のように書き変えるのである。

能格言語

名詞(絶) + 自ら不可能な行為を表す動詞(非能動詞)。(例: 春 β 来る。)

名詞(能) + 名詞(絶) + 自ら可能な行為を表す動詞(能動詞)。(例: 私 α 花 β 見る。)

活格言語

名詞(不活) + 不活動を表す動詞(非活動詞)。(例: 春 β 来る。)

名詞(活) + 名詞(不活) + 活動を表す動詞(活動詞)。(例: 鳥 α 飛ぶ。私 α 花 β 見る。)

主格言語

名詞(主) + 自動詞。(例: 春が来る。)

名詞(主) + 名詞(対) + 他動詞。(例: 私が花を見る。)

ここにおいて、活格言語に見られた不自然な三構文の乱立は二構文に吸収され、能格言語から主格言語に至る言語連続体の或る一段階に位置付けられるのである。

私が今回の実験において自動詞・他動詞・能格動詞の全てを出題した理由は、ここに来て明白となるだろう。例えば、一般の日本人には、「増す」が能格動詞である以上、「私は

悲しさを増す」（他動詞として使用）と「私は悲しさが増す」（自動詞として使用）は自然な表現と感じられるが、「私は扉を作る」と「私は扉が作る」では前者のみが自然であると感じられる。もし或る重度の解離性障害者女性がそれと同じ世界認識を持っているならば、(1-1)～(1-9)、(2-1)～(2-9)、(3-1)～(3-9)のそれぞれで異なる助詞が回答に現れたはずである。ところが、実際にはそのような差が全く出なかった。彼女たちには、動詞に自・他・能格という三分類があるという認識自体が、無意識の中さえない。いかなる形の動詞で実験を行っても助詞の使い方に全く影響が出なかったことは、重度の解離性障害者女性たちの世界認識が極めて上古代的であることの証左であろう。

第三期岩崎式日本語文法解説（11）

社会的少数者の世界認識

2005年12月11日 起筆

2009年5月30日 改筆

岩崎 純一

ここまでは、私のような日本の重度の共感覚者や解離性障害者女性の現在の世界認識が、日本語が辿ってきた変遷過程の途上（上古代日本語や近世日本語）にとどまっていることについて述べてきた。

ここからは、一個人が成長過程で言語を獲得するに当たってどのような変遷過程を辿るかを簡単に紹介し、その過程もまた、日本語の歴史的な変遷過程におおまかに合致することを示す。さらに、解離性障害者や言語障害者では、その幼児記憶が一般日本人よりも鮮明であることの意味についても考察したい。

一個人が母語を獲得する際にどのような過程を辿るか、従来の研究で分かっていることをいくつか示しておく。むろん、これらは全て、非精神疾患患者や幼児記憶のない研究者による研究結果であろうが、一個人の母語獲得過程と日本語の歴史とのおおまかな合致を示すものである。

幼児の現代日本語の獲得過程では、主格について、最初から大人のように「が」を用いるのではなく、まず無標が基本であって、やがて「の」が属格標識・具格標識らしきものとして現れ、それが主格を表すようになり、そこに「が」が重なって、最後は「が」が主格標識に落ち着くという、上古代日本語から現代日本語に至る主格成立の変遷と全く同じ過程を辿ること、その変遷の途中で能格言語（私の言い方では、活格言語以前の段階）の世界認識を経験することは、すでに先行研究によって明らかにされている。（例えば、「日

本語の獲得過程で現れる主語標識の分裂」 鈴木猛（東京学芸大学紀要人文社会科学系、I Vol.58、2006） むろん、幼児は実際の日本語の変遷過程に関する知識があるわけではなく、周りの現代日本語話者の助詞の使い方から影響を受けるのみであり、その中で上古代日本語から順に助詞の変遷過程を辿るのである。これと同様の結果は、私自身の母語獲得過程及び私以外の重度の解離性障害者女性三名においても得られた。

また、手話に接したことのない先天聾の幼児（民族・国籍問わず）のジェスチャーが、能格言語の特徴を示し、主格言語に移行せずに手前の段階にとどまることが知られている。どんなに高度な主格言語に達している言語圏であっても、先天聾の子どもは必ず、人類の言語獲得過程と同じ変遷を最初から経験し、かつ現代欧米語の文法（私の言う主格言語 I～V）には達しないことが明らかになっている。これは、先天聾の幼児の親の母語や、幼児が属する国の公用語や民族言語がもはや主格言語である場合であっても関係なく、「能格言語性は人類にとって生得的・普遍的である」との同様の予測が得られている。（例えば、「言語獲得のモデル」 櫻井彰人、酒井邦嘉（数理科学、2000））

さらに、まさに私のような共感覚者の例であるが、現在の欧米語（英語・フランス語・ドイツ語・イタリア語など）を母語とし、操っている共感覚者であっても、その母語の文法構造にしばしば違和感を覚え、個人的な楽しみとして創作言語を生み出すことが知られるが、主格言語 IV や V の構造を排除して、主格言語 I～III、時に私の言う能格言語周辺の文法に前戻った言語を作る者がいる。（例えば、英国の共感覚者ダニエル・タメットの創作言語 Manti は、膠着語であり、本人の母語である英語の文法を持たず、フィンランド語やエストニア語、日本語に近い文法を持つ。）

参考資料の年表に、どの言語段階にどの年齢層の特殊感覚者・解離性障害者が分布しているかを、その平均年齢によって示した。

精神疾患の程度と年齢とにはほぼ関連はないが、多少、年齢が高いほど、あとの段階の言語、特に「主格言語」が認識できるようになっていることが分かる。

私は、解離性障害者・共感覚者一個人の成長過程での言語の変遷を調べるため、特に上古代日本語的な世界認識を強く示す解離性障害者女性・共感覚者女性における言語獲得に関する幼児記憶を調べた。そうしたところ、主格言語 I よりも前の段階、特に能格言語以前の段階にとどまっている女性の場合、幼児期に母語を獲得する際に、自らの世界認識にどのような変化が起こっているかを、かなりの程度、意識の上で記憶していることが分かった。どの言語段階をどの年齢のときに通過したかを見た結果、言語活動・社会生活に支障がない、より軽度の解離性障害者女性ほど、速く主格言語の段階に達している。例えば、能格言語的な回答を示した 24 歳女性（解離性遁走などを抱える）は、現在の段階に達するまでに 0 歳～およそ 7 歳までの 7 年かかっており、かつその後はその段階にとどまり、現代日本語が属する主格言語の段階に達しなかったのに対し、一般の社会生活を送ることができている 26 歳の健常者女性は、5 歳頃にすでに主格言語 I の段階に達し、その後、英語の文法も平均以上に習得している。

さらに、その横に、私が今でも記憶している私自身の言語獲得過程と対女性共感覚の変遷過程を描き込んだ。そして、一般の男女の成長過程をも描き込んだ。一般の男女は、初めて喃語を発し、初語をしゃべって以降、たった 5 年ほどで現代日本語のあらゆる文法を獲得して主格言語 I に達し、生活に必要な一通りの言葉を小学校の終わりまでに獲得、最終的にはほとんど英語の文法と同じ世界認識に達する。女兒においても、一般に男児よりも多少遅れるという以外は、主格言語 I に達するのに 5 年しかかからない。

さらに重要なことは、現代の一般日本人は、主格言語以外の段階について、一切記憶しておらず、特に 0 歳から 3・4 歳あたりに起こったことを自ら説明できない、すなわち、4・5 歳頃を過ぎると、もはや成人まで、自らが話している言語の文法に関する何の変化も意識上では経験していない点である。一部の性的被害による解離性障害者の女性及び共感覚者の私においては、一般の男女において物心付く以前に展開することが、そのあとの意識上で展開されており、なおかつ世界認識自体は今もそこにとどまっており、その世界認識に現代日本語の文法が合致していないことを常に意識しつつ、現代日本語を母語として生活していかなければならない、とすることができる。

私の問題文に対する一般の日本人の回答が(N)のようになり、そこからほとんど外れなかった理由は、ほぼ完全に主格言語 IV の世界認識によって回答がなされたためであると言えるであろう。一方、特に解離性障害者女性において、普段の社会生活で用いている現代日本語とは異なる自然な回答が得られたことは、これらの女性は疾患の程度が著しい場合ほど、普段から何らかの発話上の大きな調整・制御を行って周辺の現代日本語に合わせて生活していることを物語るであろう。そして、男性の場合は自らそれをコントロールできず、結果として障害者と名指しされることが多いのであろう。

このように、解離性障害者女性や極めて限られた一部の男性が現在とどまっている言語段階は、一般の日本人の男女が幼児期において無意識に経験したことの途上にあつて、長い時間をかけてもその初期段階にとどまっている者ほど、解離的・共感覚的知覚世界を強度に残しており、言語にも何らかのいわゆる障害が出やすく、また一般の社会生活も困難であることが分かる。

さらに、日本語に加えて現代英語や現代欧州語を同等に解し、流暢に話すことのできる男性は、たとえ基本的な解離感覚や共感覚は持っていたとしても、女性の排卵や月経を感知できる原初的な感覚能力を持っている人が全く見当たらなかった。女性においても、現代英語や現代欧州語を母語である日本語と同等に解して話す女性の場合、活格言語以前の回答を示した女性は一人も見当たらなかった。

日本人の精神疾患者、特に女性において、表面上の文法よりはずっと欧米的な世界認識にある一般日本人の日本語に違和感を覚えて自ら創作言語を生み出す人を、私も見てきたが、そういった女性たちの創作言語の文法は、奈良・平安日本語や江戸日本語の特徴を呈している。以下に一例を示す。

23 歳の解離性障害者女性（アスペルガー症候群を持つ）は、所有している人形に幼い頃

より創作言語をしゃべらせて遊んでいた上、成長した現在でも軽度の言語支障を抱えるが、彼女の創作言語は意格言語的な構造を有していることが分かった。

Sara na suyasuya shiteimasu. (サラは眠っています。)

Sara no shaberimasu. (サラはしゃべります。)

Sara no pera na shaberimasu. (サラは言葉をしゃべります。)

(状態を表す「眠っている」の主体と能動行為を表す「しゃべる」の対象が、同じ格標識となっている。)

さらに、私にも、幼少時に玩具のフィギュアにしゃべらせていた言語があり、二十五歳あたりに、この言語があとで考察する対女性共感覚をなるべく忠実に写し取るのにふさわしい文法を有するものであったことを再発見し、書き留めているが、この言語は基本的に能格言語の構造を持っていたことが分かった。

Wogun kozo meruna no φ an φ isu sentuworu.

私ンコゾ女性ノ性周期感ツオル。(私はこの女性の性周期を共感覚で感じる。)

ウオグンコゾメルナノファンフィスセントウラル。

Wogu φ erinesu.

私傷ネス。(私は傷つく。)

ウオグフェリネス。

前者のニュアンスを最も近い現代日本語の語彙によって表すならば、「私には、私という手段によって、あの女性の性周期が感じられる」となるであろう。ここで主語としてはたらいているのは、「性周期」のほうであって、「私」ではない。「私」を自然の中の一員と見て自我を突き放し、無我に立っているかのようなこの文法は、近現代の主格言語圏にあっては個人の創作言語にすぎないが、こういった共感覚が男性の自然の能力であった時代には、一部族や一族の言語として存在し得たであろう。

ただし、自ら進んで意図的に行為を行っていることを強調する場合には絶対格を有標化することがあり、逆に意図的に行為を行わない場合には主体が無標化することがあった。のちに第三期岩崎式日本語の原形の一部となるこの創作言語は、能格構造を中心として、意格構造や希格構造に波及する言語であると結論することができる。

Wiu se φ ira φ orishite φ irisu. (私は、月を、見えています。)

Wiun se φ ira φ orishite φ irisuno. (私はね、月を、見ているのよ。)

また、少女期・思春期または成人を迎えた直後に性的被害を受けて解離した女性の場合、

しばしば自我の確立と共感覚の減退がそこで止まり、世界認識や文法構造も近世以前の日本語の段階にとどまることもある。表面的には現代日本語で話し、文章を書いている、私の先の質問実験では、助詞の使い方がほとんど平安時代女性のそれに一致していた。

この年表において、例えば、平安時代女性の世界認識にとどまっている解離性障害者女性について考えると、平安時代の「が」はまだ主格標識ではなく、能格（私の言う希格や能格）の段階にあったのであるから、たとえ現在、この女性が「私が」などと「が」を使って日常会話を行ってはいても、それを他の一般日本人の用いている「が」と同一視してはならないことになる。また、この女性の世界認識が平安時代女性と同等の段階にとどまっていることは、私の行った実験において、この女性が「が」を抽象概念主体や状態主体には付けないことから、明らかになるのである。

以上、一個人の母語獲得過程が人類の自然言語の変遷過程に合致することが、解離性障害者や共感覚者においても例外ではない上に、一般の男女よりも文法の変遷が遅く、さらに成人後も厳格な主格言語の段階に達しないため、母語獲得過程についての記憶も正確であることが示されたと考える。そして何より、同じ現代日本語を母語として用いてはいても、一般の男女とそれらの人々（特に女性）とでは実際の世界認識が大きく異なることが浮き彫りとなったのではなかろうか。

第三期岩崎式日本語文法解説（12）

解離性障害者女性等の擬音語・擬態語

2005年12月13日 起筆

2009年5月30日 改筆

岩崎 純一

これまで、上古代から現代に至るまでの日本語の変遷過程が、日本人の幼児期の言語獲得過程とおよそ一致すること、細かな助詞の使い方（主格の「の」「が」の変遷など）までが一致すること、さらに重度の解離性障害者女性の場合、その変遷の速度が遅く、成人以後も江戸時代以前や戦前のどこかの段階にとどまっており、一様に戦後日本語の段階に進もうとしないこと、性的被害者女性では江戸時代以前や戦前の日本人の世界認識に前戻りがあること、などを示した。

次に、現在の言語学の言う能格言語や活格言語の段階、すなわち私が前言語から活格言語まで細かく分けた言語の話者の世界認識と、主格言語話者の世界認識との違いを詳しく見ていく。それはすなわち、私の先の実験から言えば、現代日本の重度の精神疾患者たち

の世界認識と、一般の男女のそれとの違いでもあることになる。

まず、全ての基本となる、真格言語話者と主格言語話者の人間観・自然観の相違を模式的に示す。真格言語話者とは、私の言う前言語から活格言語までの非主格言語の母語話者のことである。

真格言語と主格言語の違いを一言で言うとするれば、真格言語話者においては、人類を自然の一部と見なし、近現代的な「個」「自我」の概念を持たなかった頃の世界認識を残しているということに尽きる。これに対して、主格言語話者においては、確固たる個人の存在があり、自己と他者、人類と自然の関係は、すなわち主体と客体との対立的関係であって、さらに人類が自然の上位に置かれる。主格言語が一神教、特にキリスト教文明圏において主要な言語となっていることは、偶然ではあり得ない。あるいは、このような分析は、言語学と言わずとも哲学などの諸分野ではもはやありふれたものであろう。

★真格言語話者、江戸時代や戦前までの日本人、近現代日本の重度の解離性障害者女性、仏教文化圏の世界認識

自然～自分～他者～動植物

★主格言語話者、近現代の一般日本人、キリスト教文明圏の世界認識

超越理念（「神」「イデア」「純粹形相」など）

↓

人間 —————→ 自然

自己（自我）

他者（他我）

■前言語から単語羅列言語の時代

今の目的は、真格言語と主格言語との違いを見ることであるから、主格言語以外は全て一くくりにして語るべきだし、実際にそれも可能なのであるが、まず、最初の三つの時代について見ておこう。前言語、擬音・擬態言語、空格言語の時代である。

以下は、重度の解離性障害や自閉症の女性から得られた、擬音語・擬態語表現である。

「昨日は、景色がボラボラして悲しかったです」

「ハムスターの表情がソセソセしていて可愛かった」

「花の表情がリセ、リセ、リセという感じでした」

(以下三例は、女性が月経中の体調を自ら表現したもの。)

「体がヌンヌンする」

「モユモユした曇り空のような感じ」

「ゾネゾネしてしんどい」

以下は、幼児の発言である。

「ママ、レンジでチンするの？」

「ブーブー来たね」

「紐がクルクルだ」

我々の言語は、まずは泣き声や笑い声、唸り声やささやき声で始まる。そしてある程度整った擬音語・擬態語が見られるようになる。やがて、簡単な単語の羅列の時代を迎える。これこそが、日本語史や世界の言語史、一般の幼児の言語獲得過程、私を含めた「特殊感覚」保持者や解離性障害者女性の記憶の三つ巴の研究から見出されるべき普遍の法則なのだろう。

人類が初めて使った言語がいかなるものであったか、それを寸分の狂いもなく再現することは不可能だが、現代の言語学が言う「擬音語・擬態語」を中心とするものであったろうことまでは、誰でも予想が付く。また、これは幼児が言語を獲得する過程（「ブーブー」→「くるま」、「ワンちゃん」→「いぬ」など）の最初の段階にも重ねることができるだろうという点についても、予想が付く。このことから、普遍的な音象徴（鶏の鳴き声には、「コケココー」「コッカドゥードゥルドゥー」のように必ず「k」音や「d」音が入るのではないかなど）を想定する向きもある。また、特に擬態語については、星の光（視覚）を「キラキラ」（聴覚）と言うなど、共感覚の原点であると見る向きがある。しかし、まずはこういった普遍的な音象徴を（言語学者のみならず）我々がぼんやりと意識している心理状態が本当に時代を問わず変化しないものであったかについて、反駁を加えたい。擬音語や擬態語を今日ではまとめてオノマトペと呼んでおり、ここでもそれに従う。

先の「ヌンヌン」などのオノマトペを見て、「そんなオノマトペは聞いたことがない」と言う人がいたならば、その人にとってのオノマトペとは、これらの重度精神疾患女性らから見れば、すでに厳格な西洋主格言語的な文法分析に基づく単語としか言いようがないであろう、との結論を私は下したく思う。

解離性障害者や共感覚者の中には、症状や感覚が強い日には会話の意味がうまく聞き取れない人がいる。私の場合は、中学・高校の頃がそのピークであった。こういった状況で私の身に起こっていたのは、「オノマトペとそれ以外の語彙の区別がなくなって感じられる」

ということである。人類の原初の言語にオノマトペしかなかったという説が正しいとしても、それがオノマトペであるということ自体も人類は考えていなかったはずで、私の言語感覚も十代後半まではそれに類似したものであったと言えるだろう。

私や周りの共感覚者が訴える「共感覚」と、言語学で言う「共感覚」とは、かなり様相が違っている。私が一番話題に上らせたい私の「共感覚」というのは、「輝く星を見てキラキラという感じがする」ということとは、実はあまり関係がない。むしろ、それよりもっと手前の原初的な感覚である。もちろん、私も星を見て「キラキラ」とは感じるけれども「ニョロニョロ」とは感じない、という言い回しは誤謬ではないが、これは私にとって、「私が訴えたい共感覚」と違って後天的・社会的なものだと感じられている。そもそも、今の「私も星を見てキラキラとは・・・」というフレーズ自体にも色や音が見えてしまうのが、私や他の共感覚者・解離性障害者女性の訴える感覚世界である。（「私」という漢字は肌色、「も」はツツジの花の色・・・というように。）

従って、例えば「コンコン」の「コ」と、「怖い」の「コ」との区別自体ができなくなる時がある、とでも言えば、分かりやすいかもしれない。それが私や私が出会った共感覚者・解離性障害者女性の言語感覚であり、「オノマトペとそれ以外」という分け方自体が、本当に我々の感覚世界の記述にとって正しいのかどうか、という、ある意味では「オノマトペという概念の是非から問い直す」のが私の探究方法である。「オノマトペとそれ以外」が別物と認識されるようになったこと自体が、人類が共感覚を失った根本原因であるとも言えるのであり、この分け方が、西洋あるいは近代以降の日本にしか無い世界認識だということ念頭に置く必要がある。

オノマトペは、その他の語彙よりも世界的に普遍性があるのではないかと、私も以前は考えていたが、民族ごとに厳格な壁ができていようなところもあり、突き詰めていくと、「ポロポロ」のニュアンスが伝達可能なのは「ポロポロ」というオノマトペを共有している日本人のみである、というトートロジーになってしまう。母語の中に「ポロポロ」という語があって、その中で育つがために「ポロポロ」と感じられる「よくなる」という後天的なトートロジーを無視するのは、危険である。女性の涙自体が「ポロポロ」という性質を持っているからだ、などという言説は、実はむしろ、共感覚者や解離性障害者の感覚世界に対して大きな暴力を振るうことになるであろう。

日本の子どもは、「くるま」なる名詞を覚える前に「ブーブー」というオノマトペを発するが、この「ブーブー」自体が、すでに多分に物心付く前の環境、周りの日本人がしゃべる（欧米語に多分に影響を受けた）現代日本語に束縛された音象徴にすぎない。むしろ、車のエンジン音を聞いて、「ブーブー」や「バーバー」、あるいは「トンギンガー」や「クジャンララー」などしゃべる子どもこそ、環境的要因を排除した人類普遍の音象徴を示しているとも言えるのである。ある車種のエンジン音は「ゾンゾー」だが、別の車種のエンジン音は「ケンゲー」だと言う子どももいるはずである。そういった子どもから見れば、周りの子どもの多くがしゃべる「ブーブー」なるオノマトペ自体が、すでにオノマトペで

はなく「名詞」である。自分が「ゾンゾー」をしゃべったときには、周りの子どもはすでに「ブーブー」をしゃべり、自分が「ブーブー」をしゃべったときには、周りの子どもはすでに「くるま」なる単語を覚えている。ましてや、「レンジでチン」の「チン」が「客観的・普遍的」な音象徴であるなどと心理学者や言語学者が断言して、子育て中の主婦に「擬音語を大切にしましょう」などと教え込んでいる現状が正しいと言える根拠は、どこにあるだろうか。現代の欧米先進諸国や現代日本人「健常者」にしか通用しないのではないか。こういった連続体的観点こそ、共感覚者や解離性障害者が本能的に実感し洞察していることである。

例に挙げた「ボラボラ」や「ヌンヌン」のほうが特定の日本人女性のみには当てはまる個人的感覚で、「(体が) ゾクゾク」や「(お腹が) キリキリ」などの一般的なオノマトペのほうが日本人に普遍のオノマトペであると言ってよい根拠は、どこにもない。「ボラボラ」や「ヌンヌン」といった自由なオノマトペが、第三期岩崎式日本語では許される。

私の場合、例えばAさんという女性を見ると、「フィステファンデオン」という色彩や音を感覚し、これらの微妙な変化で排卵を感知するが、これを「私のオノマトペだ」と主張しても、一般の非共感覚者男性には通じないと思う。現代日本人と外国人の間に起こっている「感覚の差」が、私と他の現代日本人男性の間にも起こっている、ということが言えるだろう。

むろん、日本語の恐るべきところは、オノマトペにそのまま「する」を付けて動詞にしてしまうところで、「キラキラした星」「鼻でクンクンする」などと言えてしまう。しかし、それが許されるなら、私が「私は昨日、Aさんを目でフィステファンデオンした」などという言い方が許されるはずである。第三期岩崎式日本語ではこのような言い方を許してしまおうというわけである。

この私の感覚に似たものは、かつての日本にもあって、「枕詞」と言われるものがそれに当たる。「白妙の(シロタヘノ)」と言い合った時点で、「袖」や「雪」にかかることは互いに了解されていた。つまり、「シロ」や「タエ」という語自体が、いわばオノマトペと認識されていた、というのが、私の考えである。誤解を恐れずに言うなら、これはほとんど呪文と言ってもよいものであろう。幸田露伴は『音幻論』の中で、「風(カゼ)」の種類を「東風(コチ)」や「嵐(アラシ)」などと言うように、「風」に当たるものを我々日本人はかつて「thi」のような音で呼んでいて、それが「ゼ」「チ」「シ」などに分化したのだと述べている。すなわち、「カゼ」なる単語と「ビュービュー」なるオノマトペとが別々に感じられるほとんどの現代日本人は、西洋的文法論理によってしか日本語を認識できないからこそ、「擬音語」などという用語を設けたのである。

どこの国・民族でも、日常で使う言葉を調べると、オノマトペの使用量は女性が圧倒しているようである。「景色がボラボラする」、「花の表情がリセ、リセ、リセ」などという表現は、今のところ解離性障害者・共感覚者の女性しか使ったのを見たことがない。だが、こういった世界認識が、あくまで「個人的・主観的」であって「普遍的・客観的」でない

理由は、どこにあらう。女性の性周期の例に至っては、体の音を象徴した擬音語でもなく、体の見た目を象徴した擬態語でもなく、それらを統合し、体の深部感覚を象徴した「擬体語」とも言える。そして、このような共感覚者の女性や私の世界認識こそ、私が(A)で示した段階にあるとも言えるのである。赤ん坊が「ブーブー」としゃべったからと言って、これを「初語」だなどと喜んでいる母親は、赤ん坊の初語が(A)段階の「ズーザー」や「トンギンガー」であったことを知らないのである。赤ん坊の「言語」と「世界認識」は受精卵のときから存在するのである。これまでに日本や世界で為されてきたオノマトペ研究は、言語の古い姿の研究と言うよりは、人類の言語獲得過程の一時期を切り取って、それをオノマトペと名付けている「出来レース」にすぎない。言い換えれば、オノマトペと、それ以外の名詞や動詞といった品詞との境界を設けること自体、西洋の主格言語にのみ適用できる論理であって、それで日本の古語を語ろうとすることは避けるべきなのだと考える。

第三期岩崎式日本語文法解説 (13)

生命性解釈の再編

2005年12月15日 起筆

2009年6月1日 改筆

岩崎 純一

さて、非主格（真格）言語の中でも最初の三期に特徴的な「擬音語・擬態語」を取り出して述べてきたが、結局はこれらの三期と、それ以降の識格言語から活格言語までは、一貫して先の自然観に乗った連続的变化なのである。

単語羅列言語（空格言語）のあと、今度はその並べられた単語どうしの関係を認識しながら言語を話す時代となる。単語どうしの関係を認識するということは、生物や物体の名称とその動作や状態を表す語、すなわち、名詞と動詞・形容詞程度の区別が生じるということである。例えば、「私、石器、落ちる」に当たる三単語と「石器、落ちる」に当たる二単語が発せられた場合、当然ここで言う「私」は対自然としての「自我」ではなく、「自然・動物の一種としての私」であるから、どちらも自然（人類を含めた）が行った行為と認識されるが、「私」があることで、「私が石器を落とす」という、より複雑な現象を指していると認識される。このとき、「私」「石器」のあとに、無標の格表示（絶対格）があると考えて、これを私は識格言語と名付けたのであった。「私」「石器」と言った瞬間に、意識がそれらに向かって収束するというに加えて、「私」「石器」「落ちる」という語どうしの関係が表されるという点で、単なる単語の羅列とは違う。こうして、自分たちが他の動植

物や物質と異なる意識を持って言語を主体的に操る存在であることがようやく意識される。ただし、それぞれの単語自体は、現代から見ると、ほぼ全てオノマトペ的に聞こえるものであったに違いない。

■有生物と無生物の対立の有無

さて、重度の解離性障害者女性らが有生物名詞と無生物名詞を区別していないことは、能格動詞を用いた次の質問実験によって明らかとなる。

風（ ）扉（ ）ひらく。

皆（ ）扉（ ）ひらく。

二人（ ）扉（ ）ひらく。

彼（ ）扉（ ）ひらく。

私（ ）扉（ ）ひらく。

「風」「皆」「二人」のみならず、「彼」「私」のあとにも「で」を付して、「彼で扉がひらく」「私で扉がひらく」と答えてしまうのが重度の解離性障害者女性の特徴であることを、先に示した。

非主格言語の特徴として、人間を中心とする有生物と、植物・無生物・抽象概念との文法上の峻別がないことが挙げられる。主格言語は、これらを峻別する言語である。名詞の性（文法性）が消滅した現代英語では特に、人間と人間以外の動物との境界も明確であって、代名詞 *it* の使用領域の甚大さがそれを示している。

そもそも、名詞に性（最初は、男性・女性・中性の三種あった上、アメリカ先住民語では五～数十種もあった）が生じたのは、あらゆる自然物・物体に主格を取らせる、すなわち代名詞で受けることを可能にするための人為的措置であって、いわゆる印欧語の祖語は紀元前にすでにその段階に達していた。現在では、この三性全てを残している印欧語のほうが珍しく（サンスクリット・ギリシャ語・ラテン語・ドイツ語など）、多くの印欧語で男性と女性のみ（フランス語など）、通性と中性のみ（オランダ語など）に整理・統合されており、現代英語に至っては、性が消滅し、完全に全ての自然物や抽象概念が人間と同様に主格を得るようになっている。

例えば、近藤健二は「能格的なものの発展をめぐって」(Studies in language and culture, 1994～2002)の中で、印欧祖語においては、有生物と無生物の対立が厳しくなったその時期に、すでに名詞の男性・女性・中性の区別が生じ始めていたと推定している。

ちなみに、私の言う識格言語や及格言語に属する先住民の言語では、名詞を数十にも分類する言語があるが、これが有生物と無生物の対立を意味するものでは全くないことを指摘しておきたい。クリモフらは、こういった言語を類別言語として、「ここから有生物と無

生物の厳格な対立が失われたのが活格言語で、そこからさらに能格言語と主格言語とが生まれる」と説いているが、大変な誤りであるだろう。

まず、人類の言語の黎明期には、名詞や動詞なる分類はないだろう。先のように、「石器が私を落とす」のではないこと、「私」が「石器」とは異なる存在であることが認識されているのみである。そこから段階を経るに従って、一般に「私、他の人間、動物、植物、無生物、抽象概念」の順に、主格の位置に立つようになっていくのである。その間、人間と動物一般の全てが主格に立つようになった時期に、初めて動的な「人間や動物」と静的な「植物や無生物」との区別が生まれ、しかも人間が動物の上に立つとの認識が生じたのである。印欧祖語はこの時期を紀元前にすでに通過しているが、日本語は江戸時代末期まではそのような世界認識を持たなかった。

活格言語の時代について付け加えておくと、この時代には、行為の主体になるか状態の主体になるかで名詞が分けられる。有生物か無生物かで分けているというのがクリモフらの説であるが、有生物は行為の主体になりやすく、無生物は状態でありやすい、ということにすぎない。生命の有無で主体を分類するのは主格言語以降であって、活格言語圏の民族はそのようには認識していない。

主題優勢言語では、無生物や抽象名詞は主語に立たない傾向がある。日本語でも、「会議が開かれた」などは翻訳体として生まれた文体だが、今では普通に使う。その意味では、現代日本語は、本来は西洋の抽象概念名詞が全くうまく乗らない文法に、それらの名詞を強引に組み込んだ結果できた、世界でも極めて異質な言語なのである。現代日本語の文法が主格言語 I や II あたりでありながら、そのほとんどの話者の意識が主格言語 IV や V であることは、先の実験と解説で示した。もっとも、現代日本人には、自然に対して人間の西洋的「個」としての自己意識の实在が意識されているから、現代日本語の異質さに気づかない。

このように、人類の言語の主格言語化の過程は、人間のみを自然から取り出して上位に立たせ、自然を人間の世界認識に組み込んでいき、自然に人間と同じ格標識を与えてセンテンスの主語に立たせることで、「人間中心主義」を徹底させる過程なのである。

第三期岩崎式日本語文法解説 (14)

動詞の自他の不問

2005年12月17日 起筆

2009年6月2日 改筆

岩崎 純一

重度の解離性障害の日本人女性が自動詞と他動詞の区別をしていないことは、先の私の質問実験によって示された通りである。

「作る」は、一般日本人にとっては、「～を作る」という他動詞である。ところが、解離症状の著しい女性では特に、本来なら「私が扉を作る」と他動詞で言うか、「私によって扉が作られる」と受動態で言うところを、「私で扉が作る」と自動詞のように扱う。こういった人たちは、一通りの社会生活が送れる場合は、単語羅列の空言言語しか解さない重度障害者に比べれば名詞と動詞の区別は付いているが、動詞をただ「動作・行為を表す」とのみ認識していて、それを自他の二種類に分類するということがない。

むろん、主格言語に近い活格言語や意格言語段階の人であれば、「私が扉、作る」「私、扉を作る」などと、比較的回答が絞られてくる上、症状も軽度の人が増えてくるのであるが、識格言語や及格言語段階の人では、あらゆる助詞が同様に使われ、動詞の形には全く影響されない。

こうして第三期岩崎式日本語は、ある一つの動作や行為を表す動詞は一つの形しか持たないと解釈し、自動詞と他動詞の別という概念が理解できない重度の解離性障害者女性の世界認識を許容することが、特徴として挙げられる。

動詞の自他なる概念が主格言語になって初めて生じたものであることは、すでに何度も述べた。生物や物体に名称を付けるだけでなく、それがいかなる動作をしているかということまでをも言語化するようになった時代、すなわち名詞と動詞の区別が初めて付いた時代は、識格言語なのであるが、この時代においては未だ全ての動詞が「アル」型として使われる。すなわち、人間が自然に対して「スル」随意的行為や随意的状態が存在しない。現在言うところの自動詞の主体、他動詞の主体と被動者・対象者（物）が全て異なる格を取ろうとも、全て格が付かなくとも、構わない。人為的に行ったことが、全て自然の行いであると認識される時代である。自然を大幅に改変するような人為的行為自体が存在しない時代、あるいはそのような民族・地域には、このような文法を見出すことができる。

シベリアのハンティ人の話すハンティ語（特にヴァフ川方言）は、S、A、O が全て異なる格標識を受ける言語である。S は基本的に無標であり、絶対格と呼ばれる。同じくオビ・ウゴル諸語に属するマンシ（ヴォグル）語も、処格や奪格と並んで具格が主語となり得る。これらの言語は、多くの言語学者によって迷いなく主格言語とされることが多いが、主格を具格と区別して、後者が主語のときを能格言語的であると説明し、言語自体を分裂能格性言語であると断定するのは、主格主語を明確に認めたいという先進文明圏人の横柄な行動にすぎない。マンシ語の主格・対格・属格・具格は、オーストロネシア語族の焦点標識と同等である。その中で具格が特に強調されるのである。「老人は斧で木を切った」「女の子が着物を着た」「私は老いた老人と食卓についた」の「斧で」「着物を」「老人と」は全て具格で標識される。

タジキスタンで話されているイラン語派のルシャン語では、S の標識が異なり、A と O

の標識は同じである。日本の解離性障害者女性の中に、「私座っている」「私は扉が閉じる」と答えた人、「私の座っている」「私を扉を閉じる」と答えた人がいたが、それぞれ、ハンティ語とルシャン語の格標識法に合致していることが分かる。

日本語の動詞の分類も自動詞と他動詞という概念で説明できないことは、三上章をはじめ多くの言語学者によって指摘されてきた。これを発展させて、金谷武洋は、「日本語における自動詞と他動詞の差は、自然がそう“ある”か、人間が自然に対して“する”のかの差である」と述べている（『日本語に主語はいらない』 金谷武洋（講談社、2002））。私の場合、自動詞と他動詞という語さえ廃して、動詞は元々全て「自然がそう“アル”ことを示す単語」であったと考えるため、私のほうが通時的観点を加味しているという点で、金谷氏と差があるが、基本的に述べていることは同じと見たい。私の場合、精神患者の実際の回答を用いて、より細かい言語段階を見出し、その変化を記述したということである。私の言い方で言えば、参考資料の年表の青い部分の文の動詞は「自然詞」、灰色の部分の文の動詞は「人為詞」とでも言えるだろう。

明治時代以降、西洋の文法論理を日本語に適用するようになって、日本語の動詞の変化の速度は異常と呼べるほど速かった。漢語動詞に至っては、明治時代には、自動詞としても他動詞としても使えた動詞（「(~が・~を)感動する」「(~が・~を)変更する」など）が、現代では自動詞専用か他動詞専用に分裂していることが知られる（例えば、「漢語動詞の自他体系の近代から現代への変化」 永澤済（『日本語の研究』第3巻4号、『国語学』通巻231号、2007））。先の例では、現在は「感動する」は自動詞「~が感動する」として、「変更する」は他動詞「~を変更する」としてしか使えない。かつては自動詞と他動詞の概念が日本には存在しなかったことを示す良い例である。

なお、自他両用動詞から自動詞専用になった動詞は、「動揺する」「運動する」「影響する」など多々あるが、他動詞専用になった動詞は、「変更する」「隔離する」など、かなり少ないことが知られる。これは例えば、明治時代の「風が吹き、風車が回転する」という文の「回転する」を他動詞として使うと、「風が吹き、風車を回転する」または「風が吹き、風車が回転される」となるが、後者の言い方では「誰によって」という行為者の存在を感じさせ、不自然となってしまう。従って、「変更する」「隔離する」など、明らかに人為的行為を表す動詞以外は、基本的に漢語動詞が他動詞専用になることはないのである。

また、「風が吹き、」といったん区切って複文としたが、「風で風車が回転する」ではどうだろうか。これを他動詞として使うと、「風で風車を回転する」または「風で風車が回転される」となる。後者の受動態の説明はあとに譲るとして、「風で風車を回転する」なる言い方は、先の重度の解離性障害者女性の世界認識に沿った言い方であることに気づくだろう。そのような精神患者の世界認識と江戸・明治・大正時代までの日本人全体の世界認識とがいかに近いのか、動詞に関してはいかに自動詞と他動詞なる区別もなかったかが分かるであろう。

自動詞と他動詞の区別が今でも曖昧な言語の例を示すのに、漢語を挙げないわけにはゆ

くまい。漢語は最も原始的な孤立語であって、動詞に活用がないのだから、全ての動詞が能格動詞（私の言う原動詞）であると言えるわけである。もっとも、かつては漢語にも格標識や動詞の活用があったとされるが、おそらくは私が言うところの識格言語を出るものではなく、名詞と動詞の違いが認識されている程度であって、語順は SVO を基準として自由であったろう。例えば、

他推窓戸。（彼は窓を押す。）

窓戸開。（窓が開く。）

の二つの文を合体させて、

他推開窓戸。（彼は窓を押し開ける。）

という文を作ることができる。漢民族には、上記の二つの文が、それぞれ自動詞、他動詞とは認識されない。このような漢語の特徴も、しばしば動詞の自他及び能格性といった用語で説明されることがあるが、A、S、Oの全てが無標の絶対格標識を受けていると見なすべきであって、日本語訳としては、「彼で窓が押す」「窓開く」などでもよいのである。

第三期岩崎式日本語文法解説（15）

能動・受動両態の区別の破棄

2005年12月18日 起筆

2009年6月4日 改筆

岩崎 純一

さて、非主格言語において、自動詞と他動詞の区別がないということは、態で言えば能動態と受動態の区別がないこととほとんど同義である。「甲さんが乙さんに動作を“する”」ことと、「乙さんが甲さんに動作を“される”」こととの間に、文法的に全く区別がない言語のことである。「オーストロネシア語族（特に台湾、フィリピン、ポリネシア、インドネシアなど）に見られる、いわゆるフィリピン型格配列は、この語族が識格言語や及格言語あたりの最古の形態を未だ維持していることの証左であろう。従来、「焦点」という概念が用いられ、主格言語における能動態と受動態との区別に当てはめる作業が行われてきた。私の分析によれば、この「焦点」は、私の言う真格時代初期の名詞の格標識である数々の

絶対格の中の強調形であると説明することが可能となる。例えば、台湾南部のパイワン語では、普通名詞に付く a、人名单数に付く ti、人名複数に付く tia は主格とされているが、これこそ焦点と呼ぶべきものであり、私の格分析では絶対格の一種であるということになる。これを新たに「視点」と呼ぶ動きもある（「能格的なものの発展をめぐって（7）」 近藤健二（Studies in language and culture、1999））。

日本語は、実は現在でも焦点・視点・私の言うところの絶対格が残っている言語であると見ることができる。

私ね、花を見ているの。

私が、花を見ている。

今では後者の「が」は主格、「を」は対格とされるところだが、上の「ね」や「の」を絶対格と見なせば、「が」や「を」でさえ、絶対格と見なすことも可能である。「私ね」について、「私が」から主格の「が」が抜け落ちて、そこに「ね」が加わったと見なすのは、主格言語的な発想であって、「私ね」と「私が」は、重度の解離性障害者女性には同等であると日常的に認識されており、「ね」は特に女性強調形の絶対格であると感じられているにすぎない。多くの解離性障害者、特に女性が、「私で花を見る」「私を花見る」などと答えたのは、これら「の」「で」「ね」「の」「が」「を」などを全て同じ「つなぎの音」「口調を整える音」「特に単語を強調する音」程度の感覚で答えたからに他なるまい。現代日本語、特に女性言葉に付けられる「ね」「の」「わ」「かしら」などと、オーストロネシア語族に残る焦点格ないし絶対格とは、機能的に見て同等であり、同時にそれらは言語の原始的形態を残すものと見てよいであろう。もし私の質問実験文の中に、「ね」などが入っていたら、むしろ多くの解離性障害者女性は、「私ね、扉、閉める」などと答えたであろう。

この傾向は、幼児の言語獲得過程にも現れる。

ねこがねずみにおいかけられました。（猫が鼠を追いかけた、の意で発言。）

花が雨に降っちゃった。（花が雨に降られた、の意で発言。）

幼児には、「猫、鼠、追いかける」「花、雨、降る」の単語が含まれることが重要なのであり、またそれらの単語がありさえすれば文意は通じるのであって、「猫が鼠を追いかけた」（能動態）と「鼠が猫に追いかけられた」（受動態）、「雨が花に降った」（能動態）と「花が雨に降られた」（受動態）とに区別はない。「自動詞と他動詞の区別がない言語であること」と「能動態と受動態の区別がない言語であること」とが同一の概念であることがよく分かる例である。

第三期岩崎式日本語文法解説（16）

中我態

2005年12月20日 起筆

2009年6月6日 改筆

岩崎 純一

能動態と受動態の区別、「自分が他者にはたらきかけること」と「他者が自分によってはたらきかけられること」との区別が、いかに近現代の主格言語にしか通用しない概念かということを行うには、中間構文を語らねばならない。ここでは、次の二文を検証する。重度自閉症者においてこれらの区別が付かないことは多いが、重度の解離性障害者女性・性的被害者女性でも、全く同様のことが見られる。

昨日ね、私は髪を切ったの。

今さっきね、私は目を閉じたの。

一般の日本人は、文法的には全く差異のないこの二つの文を読んだとき、前者を「私は美容師に髪を切られた」、後者を「私は自分で自分の目を閉じた」と、驚くべき理解の仕方をする。すなわち、動作主の「自己」と「他者」の区別を無意識に行っている。前者では、「髪を短くしたい」と思った意志者は私、「髪を切った」行為者は美容師であり、後者では意志者（目を閉じたい）・行為者（目を閉じた）共に私である。会話の当事者どうしでこのような抽象的思考と状況把握が可能となるには、「髪は床屋や美容院で切ってもらうものである」、あるいは「自分の目を他人の指で閉じてもらう状況は、一般の生活ではまずあり得ない」といった社会通念が当事者どうしに共有されていることが必要となる。一般の日本人の場合、この種の「文法への無頓着」は、多分に「後天的・社会的に」身に付いたものであることが分かる。すなわち、日本人の世界認識の驚異的な欧米化・主格言語化に、日本語の文法のほうが追い付いていない。

同様の例としては、「昨日、車を修理した」、「先日、手術をした」、「卒業式で集合写真を撮った」などがある。車を修理した人、手術をした人、写真の撮影者が、話者本人でなく、修理工、医者、カメラマンや教員や友人や話者の家族であることは、聞き手に問題なく伝わる。また、例えば「彼女は服を着た」の文について、この「彼女」が成人である場合には、「彼女は他人の手によって服を着せられた」の意に解する人は、ほぼいないだろう。もし「彼女は髪を切った」（背後に美容師の存在を想起させる）と同様に、「彼女に服を着せた人」の存在が想起されたとすれば、親が子に服を着せる、着付け師が女性に着物を着せ

るなど、特殊な状況で発話された場合であろう。あるいは、自分で服を着たのでない場合は、「服を着せてもらった」（「もらい」構文）、「服を着せられた」（受身構文）などと、明示的に表現するだろう。「私は着物屋さんで着物を着て記念写真を撮りました」の場合は「着物を自分に着せた」のは着付け師、「私は制服を着て学校へ行った」の場合は「制服を自分に着せた」のが彼女自身であることは、一般日本人には何の問題もなく理解されるだろう。

一般日本人がやっているこのような作業（世界認識と文法とが一致していない）は、重度の解離性障害者女性らからすれば、驚異的に不自然なことである。親や他人にしてもらっていた「服を着る」行為を、成長につれて自分自身でできるようになると違って、「散髪」という行為が、成長過程あるいは時代を経ても、なお他人の手によってなされる行為であるがために、「私は美容師に髪を切ってもらった」、「私の髪は美容師によって切られた」などという言い方をしなくても、コミュニケーションに支障がないというわけである。

また、同様の差異は体の部位によっても見られる。「彼女は爪を切った」の場合は、容易に「彼女自身が爪を切った」の意に解される。話者が行為を及ぼそうとする対象（ここでは彼女自身の爪という身体部位）が話者自身の物理的な身体能力の（手の届く）範囲内にあり、「爪を切る」行為が話者自身の年齢において可能な行為の範囲内にあるためである。髪を切ることや手術をすることは、たとえ大人であっても、この限りではない。また、「少女は爪を切ってから、外で元気に遊びました」のような場合は、背後に「その子を外に出す前にその子の爪を切ったお母さん」の存在が想起されるために、「爪を切ってから」の箇所は、事実上「爪を切ってもらってから」「爪を切られてから」と解されている。

現代の一般日本人は、このような複雑な欧米語的世界認識を現代日本語において瞬時のうちに行って文明生活を営んでいる。言い換えれば、口から発せられるセンテンス（文）の構造は、日本語古来のそれ（受身を能動文で表現する）を保っているながら、実際の世界認識は日本語の文法よりも印欧語ないし英語的なそれそのものと言える。むしろ、自民族古来の言語の文法をほとんど変えずに欧米文明に親和できた民族は、まことに稀有である。あるいは日本人しかいないと言って過言ではないだろう。ところが、重度の解離性障害者や対人恐怖症者などには、先の二文の違いが分からない。分からないほうが当たり前なのである。分からないと言うよりは、日本語の文法に忠実なのである。日本語の文法は、まだ潜在的にはこういった人々の世界認識を適切に表現し得る力を何とか残しているのである。

世界の少数先住民族や東南アジアの言語は別にして、いわゆる先進国の言語でありながらこのような文法構造を残している国（ないし民族）は、日本において他にはなく、現代欧米語においては、古典ギリシア語まで遡らなければ、現代日本語と同じような中間構文的な世界認識が見当たらない。古典ギリシア語では、受身的な意味を能動文で表現するこの構文を「中動態」と呼び、能動態や受動態と区別している。一般には「中間構文」「能動受動態」などと呼ぶ。新訳聖書では「福音を述べ伝える」意の動詞「エヴァンゲリゾー」が中動態で多用される。すなわち、自己が他者に一方的に伝えるのでも、他者によって一

方的に伝えられるのでもなく、自他が福音を共有することに重点が置かれる。現代において中動態ないし中間構文を残している言語は、例外なく能動と受動の厳しい対立に移行しつつあり、欧米語と同様の道を辿っている。元々受動態をほとんど用いないハンガリー語でさえ、現代英語に引き寄せられて能動態と受動態の対立が厳格になりつつある。日本語は元々この中間構文を持つ言語であり、日本人の世界認識もそうであったが、能動態と受動態の区別しかない印欧語（特に英語）圏で発達した「自我」「個人」といった概念を急速に輸入したために、「言語」と「世界認識」とが今でも乖離している。

英語では、「I cut my hair.」と言って「私は美容師に髪を切ってもらった」を意味することはできない。英語の「I」は「私」ではなく、主語と主格と動作主体とが一致することを示す人称代名詞である。「I had my hair cut.」すなわち「私は、美容師から髪を切られた、という状態を所有している」と、自我と他我との区別を文法上でも明確に表明する。日本の重度の解離性障害者女性らからすれば、もはや一般日本人も本当はそういう日本語をしゃべってくれるべきなのである。そうしてくれない限り、事態把握が困難である。「This book sells well.」（この本はよく売れる）や「This knife cuts well.」（このナイフはよく切れる）など、現代英語にも中間構文に似た構文はあるように思えるが、本を買う不特定多数の人々やナイフを使う人が誰かということは重要ではなく、英語では多くは無生物が主語に立つのであり、日本語の中間構文的な表現とは全く異なる。「私は髪を切ったんだ」に該当する現代英語は存在しない。「I had my hair cut.」の主語は確固たる個としての「我」を持つ「I」であり、「私は髪を切ったんだ」の主語は「場」でしかない。

私が第三期岩崎式日本語制作過程で面識を持った自閉症女性たちの中にも、「彼女は髪を切った」と「彼女は目を閉じた」の文の意味上の動作主が異なることが全く理解できない女性たちがいる。彼女たちには、今の一般日本人が英語的に前者を受動文、後者を能動文と瞬時に（無意識に）把握していることが理解されない。「髪を切った」のが自分であるのか他者であるのか、「目を閉じた」のが自分であるのか他者であるのかの問かけが、世界認識の中心にない。こういった世界認識の仕方では、地域社会が一定の伝統や風習を守っている状況では支障がないが、「個人」対「個人」が厳しく対立する市場競争型分業化社会では、自力で生活を送ることは難しい。こういった女性たちに「私は髪を切った」、「私は目を閉じた」とだけ言うと、「髪を切りたい」「目を閉じたい」と思った意志者が「私」であることまでは理解できても、前者の行為者を確固たる他者である美容師に、後者の行為者を確固たる自己である私自身に収束させることができない。その中で、明治以降ないし戦後の欧米的世界認識に立脚した現代日本語を母語として生活することを余儀なくされる。

こういった古来の日本語的な世界認識を残していることが原因で公的な場においてパニックに陥る（人前で話せない、電車に乗れない、など）ケースが、特に重度の解離性障害や自閉症の女性に多いことを、私は多く確認してきた。男性の場合、このような世界認識を持つ人は、ほぼ必ず言語障害ないし知的障害を伴っているようで、体験を自らの力で言語化できる私のような男性は、今ではほとんど残っていないと思われる。その結果、「対人

恐怖症」や「社交不安障害」や「鬱病」など精神疾患に関するレッテルが女性に対して多く貼られる一方で、「自閉症」や「言語障害」など脳と体そのものの器質的障害に関するレッテルは男性に対して多く貼られることとなるのであろう。

「中間構文」的な世界認識を今でも日常的に行っている言語の一例として、マレー語を挙げておく。むろん、このような言語圏においては、自閉症や解離性障害なる概念自体の登場が遅れた。（まことに良いことであると思う。）

Saya membaca buku itu. （私・読む・本・その）

Buku itu saya baca. （本・その・私・読む）

多くの現代日本人なら、前者を「私はその本を読む」、後者を「その本は私によって読まれる」と訳したくなるころだろうが、マレー民族の世界認識には能動や受動という区別がない。欧米の言語学者は、常に能動と受動、自我と他我との区別によって世界の言語を解釈してきたが、現代の日本人言語学者も、現代マレー語の世界認識が古代日本語にもあったことが理解できなくなっている。このマレー語についても、「me(m)」が、能動行為を表すときに付くのか、行為動詞には全て付くのか、それ以外の理由で付くのか、欧米と現代日本の言語学は結論できないでいる。「能動か受動か」という問い自体が不適切であることに気づかない。

ただし、現代日本語でも、口語では「私、本読む」などと言う。「私は本を読む」と主語や目的語を明示しなくとも、あるいは「本、私読む」と語順を入れ替えてもコミュニケーションが可能であることは、日本人が今でも深層意識では能動と受動の区別を行っていないことを確かに暗示する。先のマレー語の訳は、助詞を用いない「私、本読む」（第三期岩崎式日本語の識格・絶対格構文）に近いと言える。しかし、少なくとも中間構文的な世界認識に生きる私の見る限り、あるいは私が解離性障害の日本人女性の言語認識の特徴を見た上で一般日本人の世界認識に立ち返る限り、一般日本人は「私、本読む」において、主語を「私」、目的語を「本」などと認識していると見える。

私自身の共感覚について言えば、対女性共感覚は、極めて中間構文的な様態を呈していると感じられている。例えば、ある女性が排卵にさしかかっていることが私に共感覚で分かったとき、「私はその女性の排卵を発した」なる中間構文を使いたくなる。「私は髪を切った」が、「私は髪を（理髪師によって）切られた」、「私は髪を（理髪師の手に委ねて）切った」ことを意味するのと同じく、「私はその女性の排卵を発した」も、「私はその女性の排卵を（その女性によって）発せられた」、「私はその女性の排卵を（その女性自身に委ねて）私に向かって発した」ことを意味している。言い換えれば、かつては男性が広く持っていたであろう、女性の身体情報を感知するこの能力は、男性にとっては「自分の意志が為す能力」とも「女性自身の意志が為す能力」とも感じられておらず、またそのどちらとも感じられており、ただ「自然の一員としてのオスたる私が為す能力」としか感じられて

いなかっただろう。少なくとも、私の対女性共感覚を表す文法は、現代日本語や現代英語には存在し得ない。このような中間構文を現在でも有するマレー語、インドネシア語などは、私にとっては羨ましくてならない。

しかしながら、現代日本語ではそういった世界認識が全く反映されないかと言えば、かろうじて反映できる方法が残っているのである。日本語においては、自発・可能・受身・尊敬の四つの意味が、助動詞「る」と「らる」によって表されるとされてきたが、これも非常に欧米の言語学的手法での分析の結果であって、上古代日本人はこれら四つの違いを認識していなかったと見るべきである。

次の現代日本語を見てみる。

「展示品をこのように並べたほうが、お客様にインパクトが与えられるでしょう」

これは、私が実際に耳にした言葉であるが、これを口語として聞いたとき、不自然であると感じる日本人は現代でも少ないであろう。この例文は次のように分析できるはずである。

「お客様にインパクトが自然と与えられる（自発）」

「お客様にインパクトを与えることができる（可能）」

「お客様がインパクトを与えられる（受身）」

先のように話した或る日本人は、これらの区別を全く考えずに言葉を発したはずである。なぜならば、先に見たように、述語が可能表現であるときには対格として「が」を使うこともある上、この文の助詞の使い方では自発と受身の違いはそもそも明確でない。「に」を「お客様におかれましては」と取るならば、「尊敬」とも取れてしまう。むろん、こういった世界認識は現代英語や現代欧州語の母語話者には存在しないものであって、この例文は、今でも日本人は、「る」「らる」（「れる」「られる」）を時に上古代的な世界認識のままに用いることがあることを示す良い例である。事実、これら四つの意味の混合した状態を、聞き手側もそのまま認識するのだから、コミュニケーションには何の支障もない。

態とは、自我と他我、自己と他者とが対立的に把握される世界認識と一体化して発達する文法範疇である。印欧語が祖語の段階からそうであるのは言うまでもなく、日本語でも武家政権の誕生とともに文法が急に変化し、行為者標識の筆頭が「の」から「が」へと移り、受身表現が比較的明確になり始めたのは当然である。しかし、それはあくまでも「受身」であって、印欧語的な受動態ではあり得ない。印欧語では、話し言葉と書き言葉とで、受動態の用い方が変わらない。

「私は驚いた」

「私は驚かされた」

「I was surprized.」

日本語では、現在でも「私は驚かされた」を単文として話すことは少ないであろう。話すとしても、「お化け屋敷でお化けに驚かされたよ」など、「驚かせた」動作主を明示する場合のみである。現代英語では、「I was surprized.」しかない。すなわち、自発的に驚くということはなく、驚くという心理状態は、必ず「～によって」という、自己を脅かす他者や対象物との対立的・戦闘的關係を前提としている。

もっとも、「る」「らる」は、最初は自発の意味として生じ、のちに可能・受身・尊敬の意味が加わったと説明されるのが一般的である。受身としては、無生物に用いられることは中世になるまでは少ないというのが通説であった。しかし実際は、それまでにも無生物主体の「る」「らる」表現は話し言葉を中心に見られ、中世になると無生物においても「受身」の意味が独立してきたと見るべきなのである。実際、上古代にも無生物主体の受身的表現が多かったことは、文献の緻密な分析によって明らかになってきた。

（「非情の受身表現考」 宮地幸一（『近代語研究』第二集、武蔵野書院、1968））

（「非情の受身について」 小杉商一（『田辺博士古稀記念国語助詞助動詞論叢』、桜楓社、1979））

（「何故受身か？—＜視点からのケース・スタディー＞—」 奥津敬一郎（『国語学』132集、1983））

日本語は、話し言葉での無生物主体の受身表現の使用頻度は上古代からあまり変わらず、書き言葉では受身表現の使用頻度が高い。「非情受身とその類似機能表現」（田中道治、富山国際大学人文社会学部紀要 vol.2、2002）は、有対自動詞の存在と話し言葉でのその多用が、無生物主体の受身表現の使用頻度が少ない要因である、と述べている。

第三期岩崎式日本語文法解説（17）

斜格主語の優越

2005年12月23日 起筆

2009年6月10日 改筆

岩崎 純一

あらゆる言語において、無標・絶対格の次に初めて明確な形で現れる格標識は、具格で

あると言って差し支えない。現在では、例えば英語では、具格的な意味は主に **by**、ラテン語では、それは奪格的な意味を持つ **ab** で表されるが、これは主格言語の能動態と受動態の区別におけるはたらきであって、今私の言う具格言語とは、のちの主格の原点となる格が初めて絶対格と区別される形で現れた言語のことである。今や具格は、主格や対格などの文法格に比べて重視されない上、日本語や英語では主語に立つこともなくなった。しかし、第三期岩崎式日本語では、具格が主語になるなど、斜格（主格以外の格）主語が主格主語に対して優越する。

古形の具格標識を現在でも残すウラル諸語を見してみる。ハンティ語においては、名詞の格と呼べるものは与格の他には具格しかない。「私はあなたに魚を与える」「犬があなたを噛む」において、「私は」「犬が」が具格をとる点は、私の質問実験で解離性障害者女性が示した結果と合致する。（「私で扉を作る」「私で花が見る」など。）

具格が主語に立つことは、その言語が具格言語である証拠だが、トゥルン語では、三人称を主語とする他動詞文でのみ、主語が具格と同形の能格をとるとされる。だが、能格と具格が同形であるのではなく、それはすなわち具格であって、トゥルン語が私の言う識格言語と具格言語との中間に位置することを意味する。次の能格は、具格と見るべきである。

男・能格 私 棒・具格 打つ・3単・1単・過去

「男が私を棒で打った」

解離性障害者女性には「私で扉で作る」と答えた女性が多かったが、トゥルン語の世界認識とほぼ同等である。彼女たちはこれを絶対格的に把握しているため（「私で扉で作る」と答えた女性は、必ず「私の扉の作る」なども併記した）、私はこれを識格言語の結果に入れたわけだが、トゥルン語では **ka** は「～によって」に当たる意味に認識されており、能格と言うよりは、まさに私が具格言語と言うときの具格に等しい。上の例文は、「男によって、私、棒によって、打つ」と翻訳すべきである。

中国雲南省・四川省・貴州省・広西チワン族自治区などに住む彝（イ）族が話す口語は、二人称単数以外は主格・対格・属格が全て同形という特徴を持つ。しかし、口語には具格・能格同形の接辞があることから、主格・対格・属格は絶対格と呼ぶべきものであることが分かる。重度の解離性障害者女性の中に、(1)の(a)のみを「で」とし、それ以外は無標か全て同じ助詞を入れた人が多かったが、この口語も、いかに一個人の言語獲得過程の幼児期に該当する段階を呈しているかがよく分かる。

具格がのちの主格の原点であった痕跡は、現代日本語にも残っていないわけではない。再び同じ例を出しておく。

風（ ）扉（ ）ひらく。

皆（ ）扉（ ）ひらく。

二人（ ）扉（ ）ひらく。

彼（ ）扉（ ）ひらく。

私（ ）扉（ ）ひらく。

重度の解離性障害者女性では、「彼（私）で扉が（は）」という回答が見られる。一般の日本人は、無意識のうちに確固たる自我と他我、単数と複数、有生物と無生物とを峻別するがために（正確には、自然現象に対して生命性を感じなくなったために）、「彼」と「私」にのみ具格標識を付けないのであるが、しかしともかく、「風」「皆」「二人」には今でも「で」を付けるのである。

上古代日本語に「私で」なる表現がなかったのは、むしろ「が」が、元は絶対格、のちに属格や具格のはたらきをする接辞であったからで、近代において「が」が主格に特化されたがゆえに、「で」が具格となったのである。「私で扉が」と回答した女性の世界認識は、上古代日本人のそれに合致している。

オビ・ウゴル諸語に属するマンシ（ヴォグル）語では、処格や奪格と並んで具格が主語となり得るが、これは私の言う及格に近い。この言語は主格言語とされるが、「主格を具格と区別して、後者が主語のときを能格言語的であると説明するのは、主格主語を明確に認めたい先進国の言語学者の願望にすぎない」ということを今一度書いておきたい。マンシ語の主格・対格・属格・具格（及格）は、オーストロネシア語族の焦点標識と同等である。その中で具格が特に強調されるのである。他者や対象物に変化・影響を与えるという点で、私の言う及格とよく合致する。

第三期岩崎式日本語文法解説（18）

時間の非直線性

2005年12月25日 起筆

2009年6月20日 改筆

岩崎 純一

言語において「時間」なる概念がどのように反映されているかを示す指標には、時制・相・法といった概念がある。時制とは過去・現在・未来、相とは進行・完了、法とは直接法・接続法などを表す。しかし、これらに共通していることは、時間を「過去から未来に向かって直線的に流れるもの」と見なす民族や宗教圏でしか成立し得ない文法範疇であるということである。事実、時制・相・法の概念は、主格言語特有の文法範疇ではない。

印欧祖語では、すでに紀元前に時制・相・法は別々の概念としてほぼ独立しており、それはここ数千年を経て、現代英語のように時間を幾何学的に区切る世界認識へと到達した。現代英語においては、時制・相・法が互いに混ざり合うことはほとんどなく、「do」から「will have been doing」まで、極めて分析的な時間感覚を持っている。

現代フランス語のように、現在形と進行形とを文法上は区別しない印欧系言語もあるが、むしろこれは、時制・相・法の区別が明確になったあとの時期に起こった変化であって、非主格言語の時間感覚とは似て非なるものである。

非主格言語の時間認識の特徴は、そもそも時間と空間とを別物と考えない相対性理論的な認識を持っていること、過去・現在・未来という概念がなく、過去と未来とは等しく「現在から見た距離感」でしかないこと、過去や未来という概念がないのだから、むしろ行為の進行性や完了性に優先的にこだわること、などが挙げられる。

まず、日本語で見てみよう。現代日本語では、「私は座っている」と言ったとき、「まさに座ろうとしているときの動作」ではなく、「座った状態にある」ことを意味する。明確に動作を表す動詞（走っている、食べている、など）では、「～ている」は進行を表すが、「座っている」では完了の継続を表し、辞書的には「存続」なる用語が当てられる。進行を表すには、「座ろうとしている最中である」などと言わねばならない。しかし、こういった特徴は、英語・欧米語の時間感覚が輸入された明治時代以降にのみ見られるものである。

本来、日本語は、過去から未来に至る直線的な時間認識を持たず、進行と完了とを区別する言語である。現在でも西日本ではその残影が見られ、「座りよおる」は進行・継続、「座つとる」は完了・状態を表す。これは、「座り・居る」と「座り・て・居る」、すなわち接続助詞「て」の有無の違いによる。私の故郷岡山では現在でも、南部の都市部であってもこれらを区別するほか、山陰や四国・九州・北陸・東北の過疎地域でもこれらを区別している。古語の「り」「たり」は、完了と進行を表すと言ってもよいが、厳密には「むらさきだちたる雲の細くたなびきたる」のように、まさに存続という概念がふさわしい。それだけ日本人の行動様式には、瞬時に大きな動きをするような「進行形」的な行為がなかったということになるだろうが、元々、進行・存続・継続・完了といった概念は、人間も含めた自然現象（風雨・雪月花・男女関係の有りようなど）を写し取ったものであったと私は考える。そうしたところに、急激に漢語文法、さらに欧米文法を輸入したために、外界に急変を加える進行的な行為と穏やかに存続している状態とを区別する必要に迫られた。そのために、「座りよおる」と「座つとる」が生じ、それがしばらく続いたのだが、ついに欧米文法の影響を最も強く受けた東京語が全国語となるにつれて、「座っている」の単一表現となった。これこそ、現代フランス語や現代ドイツ語や現代イタリア語や現代スペイン語が現在形と現在進行形とをあまり区別しないのと同じ現象なのである。現代英語の現在進行形「be ~ing」は、そのさらにあとの時期、私の言う主格言語の時期に生じた文法変化である。日本語の「座りよおる」と「座つとる」の区別は、活格言語時代までの特徴であって、「座っている」に一本化されたとき、日本語の時空観は主格言語Ⅰに達したのである。

従って、現代日本語の「私は走っている」と「I'm running」とは、実は全く異なる時空観に基づいた表現であって、本来は翻訳不可能であることが分かる。日本語の進行形と英語の進行形が全く異なる時空認識に基づいていることは、その成りたちを見れば判明する。

朝鮮語は、今でも半島全体を通じて進行と完了とを優先的に区別する言語である。これらの使い方は、先の西日本方言などに残る進行と完了の区別の仕方と同様の現象である。中国語も進行と完了とを区別する言語である。進行は「在、正、正在」など、完了は「着」などで示される。これら朝鮮語の例も中国語の例も、現在の英語はじめ印欧語系の言語における進行と完了の区別とは全く異なる時空観に基づいているものである。

一方で興味深い現象もあり、日本語は、印欧語文明の影響を受けやすい都市部から順にその文法も印欧語化していくのに対し、印欧語文明圏では反対に、農村部から順に、非印欧語的な特徴に後退する例が見受けられる。例えば、ドイツ語においては、厳格な時制・相・法の区別を廃して、再び進行と完了とを活格言語的に区別しようとする動きが見られ、ラインラント地方にその傾向が大きいことから、ラインラント進行形（*rheinische Verlaufsform*）なる表現が生じた。進行相を「sein + am または beim + 動名詞」とするもので、「私は読んでいる」の意味で"ich bin am Lesen"、"ich bin beim Lesen"などと表現する。これは何よりも、現代英語のように直線的な時間認識の結果生じた進行形ではなく、むしろ俗語的・反印欧語的な表現に前戻っているという意味で興味深いものである。

さて、簡単ではあるが、進行と完了とを優先的に区別するということが、本来は活格言語時代までの特徴であり、ひとえに現代英語やその周辺の印欧語の進行と完了の区別のみが異なる段階を進んでいるものであることは示されたであろうが、進行と完了の区別に重点があるのならば、その行為の主体の格標識にも区別があるはずである。さらに、活格言語とは、主体の状態・存続については、未だ自然の成すことと認識され、主体が人間であっても格標識が付かない言語段階なのであるから、「私が扉を作りよおる」及び「私が座りよおる」と、「私、座つとる」の区別に該当する区別を持つ言語が活格言語ということになる。そして、そういった言語が現在でも存在するという例を挙げておこう。

wa-t' i（私は住む）

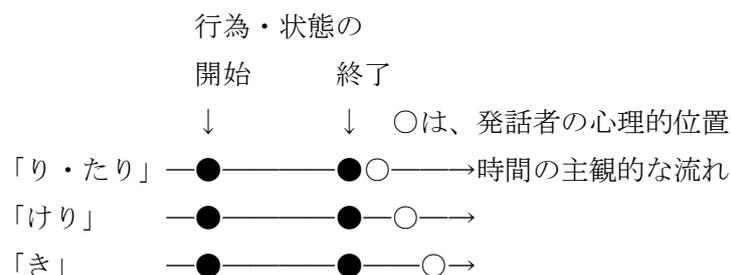
ma-sica（私は悪い）

ma-ya-k' te（私はあなたを殺す）

これは、スー語族に属するダコタ語の例である。「私は」を表す「wa」と「ma」に注目すると、他者に影響を与えない状態であるはずの「住む」と「悪い」とで、主体の格標識が変わっていることが分かる。

■過去

かつての日本人の時間認識についてしばしば議論に上るものに、「き」と「けり」の違いというものがある。「き」は経験過去で「けり」は伝聞過去という説、または事実過去（過去の事実）と発見過去（あとからそうと気づいた過去）という説、完了過去と存続過去という説など、西洋の言語学の時制・相・法が複雑に混ざり合った多くの説が出されているが、その正誤を判定することは大変に困難な状況にある。しかし、私が解離性障害者女性に対して行った質問実験に基づいて作成した言語変遷過程表に従えば、実に整然と説明されうらと思う。



「り」「たり」は一般に完了・存続と見なされているが、「き」「けり」の議論に重ね合わせ、それら三者は「行為・状態の終わった時点と発話者の現時点との主観的時空間的距離感」の違いと見なすことができる。そうすれば、「り」「たり」は、必然的に存続・完了に多用され、「けり」は現在と心理的につながっている過去として多用され、「き」はそれよりもさらに心理的に遠い単純過去として多用される、という説明が可能になる。

現在では、「き」「けり」を時制の問題、「り」「たり」を相の問題と称して西洋の時空間認識に当てはめるから説明が付かないのであって、時制と相とを未分化のものとしてとらえることが必要であろう。

もっとも、現代日本語の過去形「た」は「たり」の変化したものであり、このように完了の接辞が過去の接辞に転化していく傾向は印欧語にも見られるとの見解があるが（『世界言語への視座 歴史言語学と言語類型論』 松本克己、三省堂、2006）、完了・存続の「たり」が過去の「た」になったのと同じ変化は、印欧祖語においては紀元前の有史以前に終わった可能性があるとは私は見ている。日本語の「た」の誕生とそれに伴う時制と相と法の分裂、現代日本語性の確立は、印欧語圏においては、印欧祖語、少し甘く見てもラテン語やサンスクリットの成立の時期に当たる。印欧祖語の、ゲルマン語やラテン語やインド・イラン語への分裂は全て、時制・相・法の分裂のもとに起こったものであろうから、それらの言語に時制・相・法の分析を難なく適用することが可能なのは当然のことで、一種のトートロジーなのである。（もっとも、印欧語の仲間であるサンスクリットは、言語それ自体としては厳格な時制・相・法の文法構造を持っていながら、相対論的時空間観を持つ仏教を記述した言語である。つまり、時制・相・法といった概念を全く放棄した世界認識「空性」を、時制・相・法といった概念を持つサンスクリットで記述することに成功している。

これについては時期を改めて論じる。）

現在の印欧語で、時制と相と法とが必ずしも独立的でないように見えるのは、まさに我々日本人の世界認識の仕方で見ることからなのであって、「現在の結果や状態をもたらした行為は必ず過去に始まったことであるから、時制と相と法はお互いに密接に関係している」というのみである。

例えば、フランス語では、現在完了形が過去として日常的に使われ始め、単純過去は歴史的事実、普遍的事実などに限定されるようになったが、これはむしろ、過去・現在・未来を厳格に区別するようになって実生活にそぐわなくなってきたため、再び過去における進行と完了とを区別する方法を獲得しようとして生じた変化である。これを、江戸日本語から明治日本語に至る、「たり」から「た」への変化と同等に扱うことは、それを見る我々現代日本人の世界認識自体の印欧語文法化の結果にすぎない。もっとも、現代日本語も、「書く」と「書いた」、「走る」と「走った」を、概ね現在形と過去形として使い分けている点では、時間を「過去から未来へと直線的に流れるもの」と見なす主格言語になったと言うほかない。

■未来

現代日本語で未来を表す表現は、「う」「よう」である。これらは、推量と意志のどちらにも使える。例えば、「書くだらう」は推量を表すが、断定の「だろ」を省いて、「書こう」とすると途端に意志的な表現となる。一方で、「あり得るだらう」とすると推量だが、「あり得よう」も同じ推量として使える。このような一部の例を除き、現代日本語の一般の母語話者の世界認識では、推量と意志とは互いに独立していて、主に前者は「だらう」、後者は「う・よう」で表される。

江戸時代中期頃までの日本人は、推量と意志との区別を認識しておらず、どちらも「む」で表し、区別しようという意識も見られないことに注目したい。意志的に行う行為と非意志的な行為とが区別されるようになった時期とは、私の言う意格言語の時期である。すなわち、「笑う」「泣く」といった行為は、「転ぶ」「落ちる」などと同様に、能格言語の時代では未だ「自然現象」としてしか認識されていなかったのが、それらが区別されるようになった時期である。こういった分化は、印欧語では祖語の段階で起こったが、我が国では江戸時代に入ってもしくはばらくは「む」が推量と意志の両方を表していた。

ここで再び、現代英語の「will」も未来と意志とを表すではないかとの反論があろうが、これも先の過去の説明と同様である。「will」が表すのは、推量ではなく、あくまでも直線的な時間軸上の未来である。古英語の時点で、時制・相・法はほぼ完全に分化した概念となっており、「will」は意志、「shall」（聖書に多用）は義務を表すというような役割分担さえあった。これらがのちに未来の意味を表すようになったのが、現代英語の「will」と「shall」であって、これらは本当は「だらう」や「しよう」と訳すことができないものである。

第三期岩崎式日本語文法解説（19）

証拠性と蓋然性の連続体性

2005年12月27日 起筆

2009年6月25日 改筆

岩崎 純一

非主格言語の今一つの特徴は、証拠性が名詞や動詞ではなく接辞（日本語の助詞や助動詞）で表現されることである。証拠性とは、述語における証拠の種類を表す概念であり、現代日本語では「(だ) そうだ (伝聞)」「(し) そうだ (様態)」「ようだ (不確実断定)」「らしい (推定)」などがそれに当たる。日本語ではこのように、証拠性は基本的に助動詞で示される。私の言語変遷表では、これらは全て、名詞と動詞の区別もない単語羅列言語時代から識格言語にかけて名詞や動詞といった区別がぼんやりと現れる中で、その中間的な品詞として生じた品詞（今の助動詞）に端を発すると見ることができる。

例えば、「石、落（おつ・おち）」という単語の羅列があったとして、それが識格言語以降の時代に「石、落ちた」となる。このような生活の中で、時に「石、落ちた、ようだ」といった或る種の表現があり、これが助詞からも動詞からも区別されて助動詞という概念に至ったと考えられる。

一方、現代英語においては、証拠性表現は実に乏しい。証拠性をどうしても表現しようとするならば、「look、seem、sound、feel」といった感覚動詞を用いる以外にないことは周知の通りである。あるいは、大勢の人は認めるだろうという意味で仮想の大衆を想定して「They say～」などと言ったり、「今にも～しそうだ」というのを「on the verge of doing」（～することの直前に位置している）などと言う。このように、現代英語・現代欧州語では、証拠性は確固たる品詞としての名詞や動詞の分析的な組み合わせによる表現でしかない。現代日本語の「雨が降りそうだ」に該当する表現はなく、「雨が降るだろう様子が観察される」、「雨が降るということの直前に我々は位置している」といった表現に該当する表現しかない。

証拠性と間違えやすい概念として、蓋然性がある。これは、述語の可能性を示すもので、「だろう」「かもしれない」「にちがいない」などに当たる。これらについては、現代英語でも「would」「might」「must」などの助動詞で表現される。ところが、かつての日本語では特に、そもそも証拠性と蓋然性との区別がない。それらは全て、「む」「むず」「まし」「き」「けり」「つ」「ぬ」「たり」「り」「けむ」「べし」「らむ」「らし」「めり」などの使い分けで、

連続的に認識されるものである。

なぜ現代英語や現代欧州語で証拠性と蓋然性とが区別されるに至ったかと考えるに、時間認識の仕方が直線的であるからに他ならない。証拠性は、現時点でどのくらいのことを見聞きして知っているかということから過去時制と関係し、蓋然性は、これから起こることがどのくらい確実かということから未来時制に関係する。「すでに客観的に実在する事態や物体を主体がどのくらい知っているか」を表すのが証拠性であり、「客観的に予測可能であるはずの未来が、現時点で文明技術の発展によって主体にどのくらい予測されているか」を表すのが蓋然性である。そうであるから、現代欧米語の文法というのは、事態を観測する主体の実在・非実在にかかわらず、常に事態の実在性、超越的理念（一神教的アイデア）の正当性が揺るがないという前提に立っており、あるいはそのために言語というものが創造されている。

しかし、かつての日本語では、過去か未来かに関係なく、事態の判断は主観的・相対的であり、主体との心理的・時空的な距離感がそのまま事態の確実さになる。そうであるから、例えば、推量と意志とが混ざった心境を表す「む」が、自分が昔に経験したり伝聞したりしたことに向けて使われれば、「け・む」となる。この「けむ」には、すでに「過去推量」なる辞書的用語が与えられて普及している。

もともと、現代英語でも、接続法（いわゆる仮定法）では、未来を表すにも「would」「should」などの過去形を使うのではないかという反論もあろう。確かに、現代欧米語の時制を意味する「テンス (tense)」は、元々「緊張」の意味であり、現時点の主体の位置との心理的距離を表しているように見える。そうすれば、仮定法の「If you would～」は、実現の可能性が低くても仕方がないという相手との距離感を反映しているとの見方が可能となるし、「would you～」が「will you～」よりも丁寧なのは、相手と距離を置いているからだという説明が可能となる。

しかし、それは、現代欧米語の母語話者自身らが主張する時制・相・法の概念の独立性を揺るがす力を持たないだろう。現代欧米語の言う「時制」とは、時計の刻む等速的な絶対時間に基づく過去・現在・未来であるし、相とは、そのような時間認識に乗った進行と完了であり、法もまた、そういった時間認識の中で、実在するかどうかを本当は確認できない客観的事態・超越的理念に対して或る一定の時間をかけてはたらきかけた（はたらきかけるであろう）自己自身に対する自己の既知度や満足度を表すのだろう。

第三期岩崎式日本語文法解説 (20)

真格と動詞の関係

2005年12月28日 起筆

2009年6月29日 改筆

岩崎 純一

ここでは、真格（空前格～活格）と動詞の使い方を模式的に示したい。

■「切る」という現代日本語の単語と、それが表す意味について考えてみたい。

(A) 自分で爪を切った場合

「私は爪を切った」＝一般日本人健常者の日本語（主題格、対格、他動詞、能動態）

↓

一般日本人健常者には、「私」は近代西洋的自我・自己の身体の範囲内にピッタリと一致している。

↓

重度の解離性障害者には、「私」は近代的自我ではなく、「空我」から「活我」の連続体のどれかと自覚されている。このままでは、誰が私の爪を切ったかが分からない。

↓

分からないという状態をそのまま記述して相手に伝達することを許すのが第三期岩崎式日本語である。

↓

「もうむの爪切りうたん」（希格、絶対格、希動詞、心描言）

このように、自己意識が希我のときは希格を用いる。希我は、自分に利益が生じるようなときに意識される「我」である。例えば、人類が貨幣で交易を始めたような時代には、これと全く同じ文法の言語が行われていた。インドネシア語・マレー語などは、今でもその文法を残す稀有な言語である。

Saya membaca buku itu.（私、その本を読む。）

Buku itu saya baca.（その本、私は読む。）

この二文について、多くの言語学者は、どちらが主格か能格か、能動文か受動文かを議論しているが、「能格」「意格」「活格」のどれかと見なすのが第三期岩崎式日本語の言語観である。

(B) 自分で木の枝を切った場合

「私は木の枝を切った」＝一般日本人健常者の日本語（主題格、対格、他動詞、能動態）

↓

重度の解離性障害者には、「私」は近代的自我ではなく、「空我」から「活我」のどれかと自覚されている。木の枝を切る行為は、道具を使って自然界に影響を与える行為で、このような行為がようやく自覚される解離性障害者にとっては具我が最もふさわしかろう。

↓

従って、「あうむて木の枝切りうたん」としてみる。（具格、絶対格、具動詞、心描言）

(C) 美容室で髪を切ってもらった場合。

「私は髪を切った」＝一般日本人健常者の日本語（主題格、対格、他動詞、中間構文）

↓

実際に頭の中で起こっている把握

「私は髪を切られた」（主格、対格、他動詞、受動態）

「私は髪を切ってもらった」（主格、対格、他動詞、「もらい」構文）

↓

一般日本人健常者では、文法（古形を維持）と世界認識（ほとんど英語的）とが大幅にずれている。

↓

重度の解離性障害者は、「私、髪を切ったんだ」の動作主を「私、爪を切ったんだ」と同じく「私」とも「他人」ともとらえ、美容師という他我の存在を理解できず、「あなたが誰の髪を切ったの？」などと聞き返す傾向が見られる。

↓

第三期岩崎式日本語では、世界認識が英語的で文法は古風な「中間構文」に代わって、認識を文法に一致させる「中我態」の概念を設け、解離性障害者らに対して自我と他我の区別を要求しない。

「私は髪を切った」「私は髪を切られた」「私は髪を切ってもらった」は、例えば希格を使えば、全て「あうむの髪切りうたん」に統一される。

この場合の「あうむの」は、近代的自我・自己の身体範囲とは無関係に自覚される、利益を感じる「自己意識」である。

↓

稀に、重度の解離性障害者は、「私は爪を切った」「私は木の枝を切った」も「爪を切ら

れた」「木の枝を切られた」などと把握する場合があります、前者は「他人に切ってもらった」、後者は「自分に属する（自我が及んでいる）木の枝が切られて、痛い」と知覚・認識される。第三期岩崎式日本語では、(A) (B) (C)の文法上の区別がないだけでなく、知覚・認識世界上の区別がないことを表明できることになる。

(D) 手紙の封を切った場合

「私は手紙の封を切った」＝一般日本人健常者の日本語（主題格、対格、他動詞、能動態）

↓

先の「木の枝」とは違って「手紙」という人工物であること、ここでの動詞「切る」は高度に比喩的で、ほとんど「開ける」の意味であることなどから、重度の解離性障害者らにとっては概念把握が難しい。

↓

このような場合は、空格から活格までを自由に使い分けられる。

「ふうむて手紙が封切りうたん」（具格、絶対格、具動詞、心描言）

「初めてハサミという道具か自分の手を使って手紙を開けることができた」など、喜びに浸っているニュアンスとしての用法である。

「ふうーか手紙の封切りいたん」（意活間格、絶対格、意活間動詞、抽化言未然）

「切る（開ける）ことは、本当は少し苦しいのだけれど、切ろうという意志を持って切り、外界を改変した」というニュアンスである。心描・抽化・抽出言の使い分けは自由である。

(E) 人との縁を切った場合

「私は A さんと縁を切った」＝一般日本人健常者の日本語（主題格、対格、他動詞、能動態）

↓

「切る」対象が目に見えない抽象概念であり、重度の解離性障害者には極めて理解困難。私のように、何の知的・言語障害もなく理解できる解離体験者男性は稀有である。

↓

「みーふぁ A さん、縁、切りあたん」（空識間格、絶対格、空識間動詞、抽出言未然）

重度の解離性障害者自身は、この構文を使うだけで、「自分には理解が難しい概念である」ことを一般日本人健常者に対して表明・主張することができる。

↓

「と」を入れてもよい。（日本人は、幼少期には「の」「が」の使い方があいまいだが、「も」「と」など、一部の格助詞は幼少期から間違いが少ないことため。）

「みーふぁ Aさんと縁、切りあたん」

↓

「切りあたん」を「切りたん（切りたり）」や「切った」に戻すと、一般健常者から見れば、普通の現代日本語を使えているように錯覚される（知覚世界が異なることが伝達できない）ため、第三期岩崎式日本語では文頭の「みーふぁ」などの自己意識様態の宣言は必須である。

↓

ここで、次の二文を試みる。

「私が Aさんと縁を切る」（主格）

「私は Aさんと縁を切る」（主題格）

一般健常者には、前者「が」のほうが「私こそが」との強調形と感じられるが、重度の解離性障害者には、どちらも主題格「は」のニュアンスと感じられており、使い分けてもほとんど意味がない。重度の解離性障害者は、「が」と「は」のどちらかを入れるといった、しばしば義務教育時にも出される問題を理解できない。換言すれば、今の一般日本人にとっては、「が」のほうはほとんど英語の「I」である。第三期岩崎式日本語では、この区別は主我構文で行われればそれでよく、その他の構文では区別を問われない。

■以上の例文を、英語にしてみよう。

（英語母語話者、及び一般の日本人が獲得する英語）

My hair was cut.（主格、他動詞、受動態）「私は髪を切った」

I had my hair cut.（主格、対格、他動詞、能動態）「私は髪を切った」

I cut my nails.（主格、対格、他動詞）「私は爪を切った」

I cut branches.（主格、対格、他動詞）「私は木の枝を切った」

I opened the letter.（主格、対格、他動詞）「私は手紙の封を切った」

I broke off relations with A.（主格、対格、他動詞）「私は Aさんと縁を切った」

重度の解離性障害者・世界中の幼児（英語圏も）に見られる英語の間違いを挙げておこう。

「私は髪を切った」

I cut my hair.（中間構文のつもり）

I was cut my hair.（受動態のつもり）

I cut I hair. My cut me hair. Mine cut I hair.（代名詞の自由な変更）

My hair cut I. I my hair cut. (語順の自由な変更)

I cut my hair. My hair cut.

(能動態と受動態の区別なし＝中間構文のつもり＝語順の自由な変更と同義)

I am my hair was cut. (「髪を切られた状態に今ある」と腐心して言ったつもり)

第三期岩崎式日本語は、これらの間違いを間違いとせず、全て許してしまう構文を基本構文として持つのである。

「みうむの髪切りうたん」

第三期岩崎式日本語文法解説 (21)

自己意識の流動性

2006年1月3日 起筆

2009年7月1日 改筆

岩崎 純一

さらに新たな例文を考えてみたい。

1. 「私はあなたを好く」(動的)
2. 「私はあなたを好きだ」(静的)
3. 「私はあなたが好く」(動的)
4. 「私はあなたが好きだ」(静的)

一般の日本人は、3のみを不自然とし、1、2、4は文法的に自然で正しいと判断する変則的な感覚を有する。(いずれは3と4が消滅して、英語と同じく1と2のみが生き残るだろう。)しかし、重度の解離性障害者女性などは、1から4の全てを「自然で対等の表現」であると判断する場合がある。私自身、幼児期にはそうであり、思春期頃によく、周りの日本人が3のみについて「不自然」との判断を下していることを知った。このことは、今ではおそらく器質的な異常の観点から発達障害に起因するものと見なされ、カウンセリングやリハビリの対象ともなるだろう。

ここには留意すべき点が二点ある。幼児期には、「動的現象(動詞など)と静的現象(形容詞や一部の形容動詞など)に区別がないこと」と、「格(日本語では「が」や「を」とい

った助詞)の区別がないこと」である。

第三期岩崎式日本語においてこれを見してみる。まず、一般的な意味での「格」に当たるものを取り去って、項の要素のみを残してみる。

「私、あなた、好く（好きだ）」

(以下、「格」とは第三期岩崎式日本語における「格（格詞）」である。)

或る第三期岩崎式日本語使用者女性の例に従おう。「特定の人を好きになる」のは、「一定の主体性を持った自らが希求・願望して成し得る感情」で、彼女はこのような自己意識をちょうど理解している段階であったから、「あう」に希格「んの」を付けて「あうむの」とした。確かに、「特定の人を特異点として好きになる」感情は、不特定多数の異性を性的対象とした（いわば全ての異性を好きであった）原始人や、異性をあまり意識しない幼児期に起こることではないから、何とか日常生活のできている解離性障害者女性の場合、第三期岩崎式日本語における空格・識格・具格・及格あたりの格をここでの「あう」には付けない女性が多いだろう。ただし、ニュアンスを変えたい場合にはこの限りではなく、自由である。

「あうむの、なとうら、好く（好きだ）」

自己意識が希格の「あうむの」（希我）として自己自身に認識されるとき、「好かれる人」に当たる「なとうら（あなた）」は対格として認識されていないことは、これまでに示した通りである。ここでは、「なとうら」は絶対格なのであるから、標識は何も付けない。

「あうむの」の語で表された自己意識は、西洋的な「自我」「個人」を意味しない。第三期岩崎式日本語における「あう」や「をぐ」は、人称代名詞ではあり得ない。かろうじて人称代名詞に近いはたらきをしているように見えるのは、意格か活格の段階以降である。例えば、「社会通念」「契約」「貨幣価値」「駆け引き」などの近代的概念は理解できない適応障害を持つけれども「特定の異性を好きになる」感情は持っている重度自閉症者が、「あうむの、なとうら、好き」と言った場合、すでにそれらの複雑な不安感と陶酔感をこの一文が内包しており、一般日本人の「私はあなたを好く」との区別化を図ることができる。

また、希格の「あうむの」においては、「好く」という動作は確固たる「主我（自我）」の存立無しに起こる。

(A-1)「あうむの、なとうら、好くう」

(A-2)「あうむの、なとうら、好くい」

(B-1)「あうむの、なとうら、好きう」

(B-2)「あうむの、なとうら、好きい」

（希我にとっては、A-1とB-1、A-2とB-2の対比よりも、むしろA-1とA-2、B-1とB-2の対比こそ重要である。）

ここで、「私があなただを抱きしめる」と述語を変えると、どうなるだろう。「抱きしめる」行為は、好き嫌いに関係なく可能な行為、あるいは意志があれば相手の承諾無しに実行しうる行為である。ここでは、能格と意格を付けてみたい。

「あうの、なとうら、抱きしめるい」

「あうむか、なとうらを抱きしめるあ」

第三期岩崎式日本語では、「好く」「抱きしめる」といった述語の指す概念が、ヒトの進化史上のどの段階で我々に把握されたか、ヒトの幼児はそれらをどのように把握して成長していくかを重視する。さらに、それを逆手に取って、原始退行・幼児退行を許容する。第三期岩崎式日本語では、「動詞」という概念も、空我から主我に近づくにつれて、より独立的要素として意識されていく概念であるというにすぎない。従って、希我が意識する「動詞」は能我や意我が意識する「動詞」よりも「動静一体的」である。空前我においては、名詞・動詞・形容詞といった区別は完全に失われ、「私」「あなた」「好きであること」の三者は、具体生命体と抽象概念、実在と非実在の区別をも越えて、「色即是空」の「色」として取り出した概念にすぎない。

「あふあ、なとうら、好くう」（識格・抽出言未然）

これを、例えば重度の解離性障害者女性が発したとすると、

「私は今、識我しか自覚し得ないほどの解離的状态にあって、とても苦しいのだけれど、あなたを好きでいることはとても楽で嬉しい」という翻訳になる。

第三期岩崎式日本語においては、例えば動作主に希格を用いた場合、「want」に当たる概念が、すでに格の内部に含有され得る。なぜならば、「want（欲する・望む・願う）」ことは、「can（できる）」ことや、「will・shall（意図する）」ことよりも先立って人間に自覚される精神作用だからである。このように、空格から主格に至るまでの第三期岩崎式日本語の「格」概念は、現代英語では全く別の品詞（動詞や助動詞）と概念（時制・相・法・態など）で表される。現代英語における時制・相・法・態の概念を第三期岩崎式日本語は解体してしまい、代わりに「西洋的自我」の芽生えの通時的過程をそのまま文法にし、なおかつ「西洋的自我」の成立を使用者に要求しない。

ここで、以下にYさん（20代女性）に第三期岩崎式日本語を用いた例を会話口調で分か

りやすく示す。性的被害によって重度に解離した女性の世界認識がいかなるものであるか、ぜひ関心を持って頂ければ幸いである。

（症状）

被害後、自分の体（自我）と他人の体や物体との区別が付かなくなった。そのため、ぬいぐるみが机から落ちたり、好きな本が破れたりすると、自分の体が被害を受けたと認識する。

●これまでに挙げてきた以下の質問実験を Y さんに解いてもらおうと、やはり一般女性とは異なる回答を示した。

私（ ）扉（ ）ひらく。

風（ ）扉（ ）ひらく。

* 一般女性と異なる Y さんの回答

「私で扉がひらく」「私で扉をひらく」（自我の傍観、自分の道具化）

「風で扉をひらく」（自然を操る自我、自我と自然との一体化）

●ここで、まず名詞と動詞だけで Y さんと会話する。（「私、扉、ひらく」「風、扉、ひらく」のように。）

以下が、Y さんとの会話に使った例。（助詞を入れてもらおうと、「私で扉を作る」「私が花が見る」などという文を作るわけである。Y さんには、例えば「私で花を見る」と「私が花を見る」との区別が付いていない。）

「私、扉、作る」「私、扉、閉める」「私、花、好む」「私、花、見る」「私、泣く」「私、転ぶ」「私、座っている」「家、建つ」「時間、残る」

●少し精神的に安定してきたところで、第三期岩崎式日本語の「具格」を Y さんに教える。
★動詞が指す動きを引き起こす人や物が、相手の人や物を全く違う形に変えてしまうような場合には、「んで」を付けてみよう。

「私んで扉、作る」「私、扉、閉める」「私、花、好む」「私、花、見る」「私、泣く」「私、転ぶ」「私、座っている」「家、建つ」「時間、残る」

●慣れてきたら、さらに第三期岩崎式日本語の「及格」を教える。

★相手の形を工具などを使って改変するとは限らないけれど、直接手足を使って移動したり圧力を加える動きであるときには、「で」を付けてみよう。実はこの「で」は、日本語でも道具や手段を表すんだよ。

「私で扉、作る」「私で扉、閉める」「私、花、好む」「私、花、見る」「私、泣く」「私、転ぶ」「私、座っている」「家、建つ」「時間、残る」

●次に、第三期岩崎式日本語の「希格」を教える。

★相手の人や物を見たり聞いたり触ったりしたときに、作用を与えるだけでなく、心が動くときにも、「んの」を付けてみよう。

「私んの扉、作る」「私んの扉、閉める」「私んの花、好む」「私、花、見る」「私、泣く」「私、転ぶ」「私、座っている」「家、建つ」「時間、残る」

●次に、第三期岩崎式日本語の「能格」を教える。

★他の人や物が存在して初めて成り立つような動作の場合、その動作主に「の」を付けよう。日本語にも、「私の好きな人」などの形で残っているんだよ。

「私の扉、作る」「私の扉、閉める」「私の花、好む」「私の花、見る」「私、泣く」「私、転ぶ」「私、座っている」「家、建つ」「時間、残る」

●次に、第三期岩崎式日本語の「意格」を教える。

★意志を持ったり意識の上でできるようなことには、「んが」を付けよう。「笑う」や「泣く」がそうだね。

「私んが扉、作る」「私んが扉、閉める」「私んが花、好む」「私んが花、見る」「私んが泣く」「私、転ぶ」「私、座っている」「家、建つ」「時間、残る」

●次に、第三期岩崎式日本語の「活格」を教える。

★無意識的・不随意的に起こってしまうことにも、何か目印を付けよう。今度は「が」だ。

「私が扉、作る」「私が扉、閉める」「私が花、好む」「私が花、見る」「私が泣く」「私が転ぶ」「私、座っている」「家、建つ」「時間、残る」

●次に、第三期岩崎式日本語の「主格」を教える。

★行為・動作だけでなく、状態を表す文にも目印を付けよう。今度は「が」のままにして

おこう。それから、動作主と動詞以外に対象となる名詞がある文には、対象の名詞に「を」を付けてみよう。

「私が扉を作る」「私が扉を閉める」「私が花を好む」「私が花を見る」「私が泣く」「私が転ぶ」「私が座っている」「家、建つ」「時間、残る」

●次に、主格と対格とが、現代社会では明確に区別されることを教える。

★残りの二文にも、思うように目印を入れてごらん。

「家が建つ」「時間が残る」

★そう。さらに、それぞれの前に「私」を入れるとどうなるだろう。

「私で家が建つ」「私で時間が残る」

★そう、その通り。さらに、さっきと同じ過程を辿っていくと、この二文はどこに行き着くかな。

「私が家を建つ」「私が時間を残る」

★そう。でも、こういうとき、周りの日本人は「建つ」を「建てる」、「残る」を「残す」と言うんだよ。

「私が家を建てる」「私が時間を残す」

★そう。日本の古語では「私が家を建つ」でも正解なんだ。「我、家を建つるとき、」などと言える。「残る」は、直前が「を」のときは、比較的昔から「残す」と言ったんだ。ここでもう一度、意味を考えながら最初の二文に目印を入れてみよう。

「私が扉をひらく」「風で扉がひらく」

★そう！ 自分の体と他の自然物との区別が付いていなかった頃の Y さんの頭の中では、一文目の「私」と二文目の「風」が同じはたらきをしていて、どちらも生き物のように感じられていたよね。性的被害だけでなく、鬱や脳卒中でも全く同じことが起こることが知られているんだ。

それが今は、一文目の「私」と同じはたらきをしているのは、二文目の「扉」のほうだ。

それから、「自分」と「他人」とが区別できるようになることと、動詞のはたらきが二パターンあると感じられることは、同じことだってことが分かるね。実は、一文目の動詞を「他動詞」、二文目の動詞を「自動詞」と、周りの日本人は呼んでいる。

以上のような作業を根気よく繰り返し、Yさんは今では、元の母語である現代日本語を使えるほどになった。このように、私は、「動作主と対象者との区別が付かない」、「自動詞と他動詞の区別が付かない」、「確固たる西洋近代的な自我や個人なる概念が認識されない」といったことを、言語障害や文法違反などではなく、人間が成長過程や歴史の過程で繰り返してきた普遍的な世界観の姿であり、それをさかのぼってしまった人の存在を全面的に認めるのである。

性的被害によって重度に解離している女性においては、被害をきっかけとして、その全ての過程を一気にさかのぼってしまうことがある。私は、「そのような人の症状を現代日本語で話しかけて治す」という態度と効果自体に懐疑的な立場を取る。

第三期岩崎式日本語文法解説 (22)

自己意識の話題格性

2005年1月5日 起筆

2009年7月2日 改筆

岩崎 純一

今回は、第三期岩崎式日本語の文法が、「我々ヒトの外界認識はそれを“観測”する際の我々の知覚が左右しているという視点」、すなわち「あらゆる自然的・人為的現象を相対化する視点」に立脚していることを、有名な話題格「は」によって説明する。（第三期岩崎式日本語では「パ (pa) またはファ (fa)」と発音)

「私は男だ」の「は」が主格主語でないことは、しばしば「象は鼻が長い」を例に説明される。日本語では主に、「は」が話題格、「が」が主格を表してきたとされる。

しかし、第三期岩崎式日本語では、「象は鼻が長い」の「は」と「が」が話題格と主格であるか、そうでないか、あるいはどちらも同じはたらきをしているか、といったことは、この文を発した話者の「自己意識」のあり方によって変化する。

まず、第三期岩崎式日本語の主我においては現代日本語と同じ構文を取り、むしろ「象は」が文全体の「場」として「鼻が長い」を包み込んでいる。ここまでは問題ない。

「象は鼻が長い」

一方、空前我から識及間我、すなわち、重度の解離性障害者女性などが陥った「我」「私」のあり方においては、先の「私、あなた、好く」の三単語を用いる際、各項の格は無標で、基本的にはそのまま「私、あなた、好く」＝「ゐう、なとうら、好く」などとなるのであった。ここでは、「私があなただを好く」のか「あなたが私を好く」のかということさえ不明瞭であつてもかまわない。不明瞭であることを伝達するのが第三期岩崎式日本語の使命である。一部の解離性障害者、コタール症候群、カプグラ症候群、性的被害者などの女性においては、自他の「我」の区別がない症状が、なお現代日本語によるコミュニケーションを失っていない状態に出ることがあるのであり、「私」と「あなた」との間に「好」という関係が存することだけを、これらの構文は物語るのである。語順も問われない。「なとうら、ゐう、好く」でも可である。これによって、「私には西洋近代的自我が理解されない」ことを表明することができる。

従つて、「象は鼻が長い」をこれらの構文にした場合も、「象、鼻、長い」となるのである。ここでは、「象」「鼻」「長い」のどれが述語であるか、話題であるか、といったことは認識されない。全てが述語であり、話題である。「象の長い鼻」でも「鼻の長い象」でもありうる。

さて、具我構文になるとどうか。

「象は鼻んで長い」

これは確かに「正しい」第三期岩崎式日本語文であるが、「鼻」に具格「んで」が付くためには、「長い」という状態を実行するために「鼻」が一定以上の高度な道具・手段を用いなければならないような場合である。しかし、「鼻が」「長い」ことは、象にとってすでに生得的な特徴である。従つて、「象は鼻長い」とするのが普通だということになる。

一方、「象は」であるが、この「象」も「鼻が」「長い」状態を実行するために道具を使うわけではなく、「長い」ことが「象の」「鼻」の属性であると同様、「鼻が」「長い」ことは「象」の属性である。従つて、現代日本語の「象は鼻が長い」は、空我や識我段階の第三期岩崎式日本語話者においては「象、鼻、長い」となることが多いのである。

現代日本語において同じ話題格「は」で表される

「私はあなたを好く」（「私」の自覚する感情）

「象は鼻が長い」（「私」の自覚する象についての命題）

という内容が、例えば、希我段階の第三期岩崎式日本語話者ではこのようになりうる。

「あうむの、なとうら、好きう」

「あうむの、象、鼻、長い（長し）（+う・い・お・あ・え）」

なぜならば、第三期岩崎式日本語の文法は、現代日本語の主題優先言語性を以下のようにとらえ直すことによって成り立っているからである。

「私はあなたを好く」（私においては、あなたを好く。）

「（私は）象は鼻が長い」（私の認識能力の範囲内においては、象という動物においては鼻が長い。）

すなわち、第三期岩崎式日本語では、「象は鼻が長い」ことが客観的事実であるという前提を破棄して、人間である「私」の世界認識能力の属性と見るのである。「長い」に続く言（げん）は、「一般日本人健常者にとっても、象は鼻が長いことが共有されているだろう」という推量の表明標識である。第三期岩崎式日本語では、「象は鼻が長い」という現代日本語文は、このことを述べる主我としての「私は」を省略したものと見なすのである。

よって、「象は鼻が長い」「鼻は象で長い」「長い象の鼻」などは、第三期岩崎式日本語では、全て「あう、象、鼻、長い」で許容される。「象は鼻が長い」ことのほうが流動的であると見なされ、むしろ重度の解離性障害者女性らの「空前我」を普遍視している。前者を客観的・普遍的な事実と見なし、後者を言語知能遅滞と見なす現代英語・現代日本語的文法とは対照的である。

このように見てくると、現代日本語の「は」は、現代英語のような厳格な主格主語を有する言語に比べれば古形を保っているようでありながら、実は「は」が話題格で「が」が主格であるという解釈は、その解釈を下している現代日本人の多くの世界認識そのものが紛れもなく主格言語的・欧米言語的になっていて、重度の解離性障害者女性らを取りこぼして成立していることが分かる。すなわち、「は」と「が」がどちらも話題格的に認識されているという自覚から逃れられない社会的少数者の世界認識を想定していない。

第三期岩崎式日本語では、「は」は、「んで」「の」といった真格に対して特権的ではなく、むしろ真格「んで」「の」なども話題格的なふるまいをする。空格段階などにおいては、話題格と真格との区別がほぼ消失して無標となり、名詞と述語の羅列文となる。このことの根底には、「あらゆる文の行われる“場”は“私自身の意識世界”である」という第三期岩崎式日本語の東洋的世界観がある。これは、井筒俊彦氏がかつて『意識と本質』の中で述べた「言語アラヤ識」の想定にも矛盾しない。空前我の段階では、「場」である「あう」はほぼ「自然界」に一体化している。意格や活格の段階になって、ようやく話題格「は」と、意格「んが」や活格「が」との間に、明確な差が現れるのである。

第三期岩崎式日本語文法解説 (23)

上古代日本語等の再解釈

2006年1月5日 起筆

2009年7月3日 改筆

岩崎 純一

ここでは、古語の「係り結び」やタガログ語のマーカ―「フィリピン型格配列」についての第三期岩崎式日本語における再解釈について述べる。

第三期岩崎式日本語の格の使い分けは、現代の一般日本人健常者からすれば、むしろ高度で複雑・難解なことに映り、とても言語遅滞者・知的障害者のやることとは思えないかもしれないが、このようなことは上古代日本人にとってもごく自然な使い分けであったと思われる。特に重度の解離性障害者・性的被害者女性ほど、述語の意味によって主体がとる格をほとんど本能的に変化させる。「自己意識」なる概念が第三期岩崎式日本語の「具我」の段階にある、重度の知的障害を抱える或る男性の場合も、次の例文では、「私は絵を描く」の「は」のみが自然で適切であり、他の文の「は」と全ての「が」「を」を不自然で「いらぬ」と感じる。

私は背が低い。

ウサギは耳が長い。

私は絵を描く。

ウサギはカゴを壊す。

換言すれば、「絵を描く」という、自己自身による対自然的な行為にのみ「は」なる標識が必要だと感じる。「描く」「壊す」という概念理解を失っていない状態でこのことが起こる。全ての日本語について日常的にこのような判断を繰り返して生きているのが我々社会的少数者であり、この言語の創案者である私ほどに現代日本語を自由に操っている重度の共感覚者男性は、ほとんどいないと思われる。「自己意識」なる概念が第三期岩崎式日本語で言う具我の段階にある人の世界認識は、第三期岩崎式日本語で以下のように記述される。「色鉛筆などの道具を使った自己」にのみ具格を付けたことを表している。現代の一般日本人健常者なら、全ての「私」「ウサギ」に「が（は）」を付けるところである。

私、背、低い。

ウサギ、耳、長い。

みうむて絵、描く。

ウサギ、カゴ、壊す。

* 述語動詞に言（げん）を付けてもよい。

第三期岩崎式日本語では、特に具我や及我までの段階を軸とする場合、主体が「みう」「なとうら」「かうら」などの人間でない限り、主体にはほとんどの場合は「格」が付かない。ただし、動物には付くことがあるが、「人間である自己」と「周辺の動物」とに区別が自覚されない重度の解離性障害者たちほど、全ての項が無格（空格や識格）をとる傾向があることになる。

これこそが、一般の能格言語において分裂能格と呼ばれる現象である。「分裂している」との感覚は主格言語話者の解釈であって、それによれば「みう」は主格主体、「ウサギ」は能格主体であると説明されるところが、第三期岩崎式日本語では、この話者は真格の流れのどこかに位置しているという分析になる。

日本の古語でも同じことが起こってきた。日本語の格について、日本語学上で実証的に判明していることと、重度の解離性障害者女性や日本の幼児の言語認識様態に基づく私の第三期岩崎式日本語との両方を統合した結果を、いくつか挙げてみたい。

■上古代では主語と目的語は基本的に無標識であり、時代が下るにつれて、一人称（我、余、私）から順に「の」「ぞ」「が」などが付いていく。二人称、人間全体、動物、植物、物体と順に広がっていき、最後に「会議が」「契約が」などの抽象概念の主格主語化が明治以降に起こる。

■上古代では、「の」（属格）と「が」（主格）の区別が曖昧であり、さらに、文字として記述される以前の日本語では、それらは具格とも区別が無かった可能性がある。第三期岩崎式日本語の視点で言いかえると、上古代日本語では、「の」と「が」は、属格でも主格でもなかった。また、それよりも前では具格とも区別がなく、具格なる概念自体の自覚もなかった。

■その証拠に、第三期岩崎式日本語の「具格」ないし「及格」と全く同じ標識らしきものが上古代日本語にも見られる。次の「い」は、のちの「の」「ぞ」「が」よりもずっと原始から日本語にあったものである。これは、主格主語だと解釈されるのが一般的であるが、第三期岩崎式日本語で言う「具格」「及格」であると解釈すべきものではないか。すなわち、「天仰ぎ叫びおらび足ずりし」「乱れ来む」「守れ」といった、強く自己意識を自覚させる行動が、話者（詠者）の心に（のちに主格に発展してゆく）この格標識「い」を付けさせたと見るべきではないか。そして、この「い」は、第三期岩崎式日本語の抽化言未然「い」の根拠の一つでもある。

- 妹が去ぬれば血沼男その夜夢に見取り続き追ひ行きければ後れたる菟原男「い」天仰ぎ叫びおらび足ずりし（『万葉集』巻9、1809）
- うらぶれてかれにし袖をまたまかば過ぎにし恋「い」乱れ来むかも（『万葉集』巻12、2927）
- 筑波嶺のをてもこのものに守部すゑ母「い」守れども魂ぞ会ひにける（『万葉集』巻14、3393）
- 我等四王と及無量百千の神と并せて国土を護る諸の旧の善神と「い」遠離して去らむ時には、是等の如き無量百千の安恠悪事を生ぜむ（『西本願寺本金光明最勝王経平安初期点』）
- 此を持つ「い」は称を到し、拾（すつ）る「い」は謗を招きつ（『続紀宣命』）
- 此の経を一たび読まむ「い」は菩提の心を発して（『金剛般若経』）

■「の」と「が」の使い分けは、主体の意味的要因（主体性の強さ）による。これは、第三期岩崎式日本語における「ん」「んで」「一で」・・・「んが」「一が」「が」の使い分けに一致する。

■係り結びは上古代ほど発達しており、中世に衰退する。第三期岩崎式日本語では、日本語に見られたこの「係り結び」という現象は、話者が主体性（「我」のあり方）の強弱の程度を表明する標識である、とする。

■その証拠として、「の」や「が」が主体に付くことさえ、述語の動詞や形容詞が終止形以外の場合に限られる。終止形の場合、その主体には長らく何の標識も付かなかつた。これを第三期岩崎式日本語では、終止形述語を持つ主体は主格主語ではなかつた（確固たる自己意識を持たなかつた）と分析するのである。つまり、話者が自ら道具を用いたり人為的行為を意図したりした際、その自己意識の強化を表明するために、主体に「の」や「が」を付け、述語も非終止形にするのである。この「の」や「が」こそ第三期岩崎式日本語の「ん」から「が」であり、非終止形述語こそ第三期岩崎式日本語の「う」（心描言）、「い」「お」（抽出言）、「あ」「え」（抽出言）である。

このように、「ぞ」「なむ」「や」「か」→連体形、「こそ」→已然形、などの「係り結び」という現象も、そもそも「話者は、自己意識を強調する場合には主体と述語に何らかの目印を設ける」という普遍的規則の一環に過ぎない。そうであるから、第三期岩崎式日本語の「格」（真格）と「言（げん）」（心描～抽出）とは、全て上古代日本語の「係り結び」であるとさえ言える。

これと全く同じ方法でタガログ語を見ると、「タガログ語は能格言語（第三期岩崎式日本語における希格段階や能格段階）以前の段階にある」、または、「タガログ語母語話者の自己意識は、今でも及我・希我不いし能我であつて、西洋的な自我ではない」という分析さえできる。なぜならば、ほとんどの日本の言語学者によって、英語の「the」に相当する、

あるいは日本語の話題格の「は」に相当する、などと解釈されるマーカーについて、第三期岩崎式日本語の試みにおいては、**ang** 形が絶対格（第三期岩崎式日本語の「無標」または「は」）、**ng** 形が能格（第三期岩崎式日本語の真格「ん」～「が」）と見なされるからである。

そして、なぜタガログ語母語話者の自己意識が第三期岩崎式日本語で言う「及我」か「希我」の段階になおとどまっていると分析できるかと言えば、タガログ語母語話者が、ある特定の人や物事について、それ以外の他者や物事と比べて「好きか嫌いか」、「自分に必要かどうか」、「希求しているかいないか」、「その人や物事が自分に心の利益・恩恵をもたらすかどうか」に非常にこだわり、これによって文法が変化するからである。例えば、

Gutom ako. 「私はお腹がすいている」（絶対格）

Gusto ko noon. 「私はあれが好きだ」（能格＝第三期岩崎式日本語の希格）

Ayaw ko itong pabango. 「私はこの香水が嫌いだ」（同上）

Kailangan ko ng mas malaking bahay. 「私にはもっと大きな家が必要だ」（同上）

などである。ここで、「ako」とは第三期岩崎式日本語の「あう」、「ko」とは「あうむの」と思っていたかまわない。すなわち、「お腹がすいている」ことを自覚している「私」は、確固たる自己意識のことではない。タガログ語は今でも、「文明の発展によって、ようやく自己と他者との関係が損得感情に左右され始めた時代の言語に見られた文法」を保っていると言える。これと同じ内容の日本語文を、希我段階にいると思われる重度の解離性障害者女性などに見せると、タガログ語と同じ文法を最も「自然に感じる」と答える。

「私、お腹、すいている」

「私は（の、で、が・・・など）あれ、好きだ」

「私は（の、で、が・・・など）この香水、嫌いだ」

「私は（の、で、が・・・など）もっと大きな家、必要だ」

このような「自己」しか自覚されていない段階に「少女返り」したこの女性は、第三期岩崎式日本語においては、この「は（の、で、が・・・）」などの箇所に「んの」を入れて「あうむの」とすることを許されるのである。

第三期岩崎式日本語文法解説（24）

地方方言との類似性

2006年1月7日 起筆

2009年7月5日 改筆

岩崎 純一

第三期岩崎式日本語と類似した文法を持つ方言を日本国内で見出すことは、ほとんど不可能な時代となった。しかし、かろうじて第三期岩崎式日本語的な文法が地方の老人語の中に残存している場合がある。ここではその例を一つ挙げて、精査してみたい。

茨城県常総市の南西部に、水海道（旧水海道市）という地域がある。ここでは、高齢者の中で古形日本語の面影を残す方言「水海道方言」が話されていることが知られる。

重度の解離性障害者女性らの格の使い分けがこの水海道方言に酷似することを以下に示す。すなわち私は、これらの社会的少数者が、水海道のように日本古来の言語が行われてきた地域では長らく「言語障害者」ではあり得なかった可能性を指摘したい。さらに、第三期岩崎式日本語と水海道方言の格構造も、同様に酷似することを示す。水海道方言の専門の研究者が何人かいるが、やはり「能格」「主格」「対格」といった用語が従来の言語学上の定義を免れておらず、第三期岩崎式日本語ではこれを一旦解体・破棄し、水海道方言が第三期岩崎式日本語論によっていっそう整然と説明できることを示す。

このことは、先の解離性障害者女性らが、なぜ第三期岩崎式日本語の文法のほうが母語であるはずの現代標準日本語よりも「精神的に楽である」「自分たちの世界認識に合う」と訴えるかをも、説明するであろう。

【一般健常者にとって自然な現代日本語文】

（必要性・能力を表す主体は与格主語「には」のほうが自然と感ずる。）

犬（に）触るな。

本（に）触るな。

私（には・は）それがいらぬ。

私（には・は）無理だな。

私（は）寒い。

私（は）若い。

私（は）年寄りだ。

【第三期岩崎式日本語における能我段階（能格言語段階）あたりにいる重度の解離性障害者女性に、自由に助詞を入れ替えてもらった文】

犬（の・に・へ・は）触るな。→「んの」（希格）

本（で） 触るな。→「での」（及希間格）
私（は） それがいらない。→「の」（能格）
私（は） 無理だな。→「の」（能格）
私（の・に・へ・は） 寒い。→「んの・一の・の」（希格～能格）
私若い。→「φ」（識格ないし空識間格）
私年寄りだ。→「φ」（識格ないし空識間格）

【水海道方言の助詞】（上と全く同じ使い分けを呈する。）

犬（げ） 触るな。（えぬげさーんな。）
本（さ） 触るな。（ほんささーんな。）
私（がに） それがいらない。（おれがにそれがいらね。）
私（がに） 無理だな。（おれがにむりだな。）
私（げ・がに） 寒い。（おれげさみー・おれがにさみー。）
私若い。（おれわかえ。）
私年寄りだ。（おれとしょーりだ。）

さて、この第三期岩崎式日本語話者の女性と水海道方言の共通点をまとめよう。

- 好悪・必要性・能力・経験の主体には格標識を付け、それ以外にはあらゆる主体に何も付けない。
- 「犬」と「本」とでは、何としてでも本能的に格を使い分けようとする。どちらにも「に」を当てはめる現代一般日本人の感覚が理解しがたい。
- 現代日本語における「犬に触るな」の「に」と「私は寒い」の「は」との区別が付いておらず、同じ格標識でなければならないと判断する。

例えば、水海道方言の「がに」は、これが用いられるときの述語の意味（希求・好悪・必要性・能力・経験）から、第三期岩崎式日本語で言う希格から能格・意格に該当する格であると言うことができることになる。

さらなる例文である。以下のように、現代標準日本語では、全ての場合で主体と客体、自己と他者、人間と自然とが厳格に区別されて「に」に取り込まれるが、水海道方言では今でも自然物や非活動体に対する非授受・非損得行為には、弱い「さ」が使われ、古形日本語から現代標準日本語への過渡期にあることが分かる。今後、「げ」の使用範囲が広がり、さらにそれが標準語の「に」に変わっていくと考えられる。しかし、第三期岩崎式日本語ではこのような調整を話者自身が自由に行えるのである。また、具格中心の文章を書いた

として、その中に例えば意格を挿入することで、その項についてのみ自己意識の強化を表明することもできる。すなわち、今後日本語がいかなる変遷を辿ろうとも、地方の古き良き方言が消滅していこうとも、第三期岩崎式日本語は重度の解離性障害者女性たちの生活の中に存在し続けることができる。

【現代標準日本語】

どこそこ（に）行く・・・移動動詞（着点＝非活動体）
見（に）行く・・・目的の補文標識
服（に）触る・・・接触動詞（対象＝非活動体）
バイク（に）乗る・・・動作動詞（対象＝非活動体）
バス（に）乗る・・・動作動詞（対象＝非活動体）
馬（に）乗る・・・動作動詞（対象＝活動体）
犬（に）触る・・・接触動詞（対象＝活動体）
風呂（に）入れる・・・授受動詞（着点＝非活動体）
仏様（に）あげる・・・授受動詞（着点＝霊的存在）

【水海道方言】

●以下のように、どこかを境界として「さ」と「げ」とを使い分ける。（数字は、「さ」をええると答えた人の人数である。（「水海道方言の四つの斜格」 佐々木冠ほか（『一般言語学論叢』2、筑波一般言語学研究会、1999）より）

どこそこ（さ）行く 21
見（さ）行く 19
服（さ）触る 19
バイク（さ）乗る 13
バス（さ）乗る 10
馬（さ）乗る 10
犬（げ）触る 8
風呂（げ）入れる 6
仏様（げ）あげる 5

【第三期岩崎式日本語話者（ある重度の解離性障害者女性）の回答】

●以下のように、どこかを境界として無標と「に」とを使い分ける。この女性が第三期岩崎式日本語を用いると、無標は「で」（及格）もしくは無標（絶対格）のまま、「に」は「んの」（希格）となる。「明らかに自らが欲した行為」と「それ以外の行為」とで格を使い分けているからである。

どこそこ行く
見行く
服触る
バイク乗る
バス乗る
馬乗る
犬（に）触る
風呂（に）入れる
仏様（に）あげる

【第三期岩崎式日本語話者（性的被害により解離した女性）の回答】

●この女性が第三期岩崎式日本語を用いると、無標は「で」（及格）もしくは無標（絶対格）のまま、「に」は「んが」（意格）もしくは「に」のままとなる。この女性は、現代日本語での日常生活にもほとんど支障はない。

どこそこ行く
見（に）行く
服触る
バイク（に）乗る
バス（に）乗る
馬（に）乗る
犬（に）触る
風呂（に）入れる
仏様（に）あげる

私は、

孫に犬を触らせない。【現代標準日本語】

孫げ犬げ触らせない。【水海道方言】

孫で犬で触らせない。孫が犬が触らせない。【第三期岩崎式日本語話者（重度の解離性障害者女性）】

孫に服を買ってやる。【現代標準日本語】

孫げ服買ってやる。【水海道方言】

孫で服買ってやる。孫が服買ってやる。【第三期岩崎式日本語話者（重度の解離性障害者女性）】

水海道方言を使う高齢者と標準語社会に置かれた若い言語障害者女性とが、実際には同じ世界認識を呈しており、多くの標準語話者の世界認識とは異なっていることが分かる。こうなるゆえんは、最初の三文で言えば、「私」と「孫」、「私」と「犬」、「孫」と「犬」との距離感（直接性の強弱）による。もし以下のように言い換えたならば、標準語を話す一般健常者は、「私」と「犬」の距離感は遠ざかり、「私」の「孫」に対する強要性が高まったと感ずるだろう。

孫を犬に触らせない。

このようにして、あらゆる格について調べていくと、第三期岩崎式日本語の格構造と水海道方言の格構造とが、極めて酷似していることが明らかとなる。

言い換えれば、標準日本語を母語とせざるを得ない重度の解離性障害者女性らが本来求めている「理想の言語の文法」、彼女たちが陥った「言語障害の状態」が、水海道地域の高齢者においては日常的に展開されていることになる。

水海道方言は、第三期岩崎式日本語の格解釈を用いれば極めて整然と説明しうる。また、「あなたごと」と「あなたを」、「あなたげ」と「あなたに」など、水海道方言の格と標準日本語の格とを一対一で対応させることの危険性を、第三期岩崎式日本語は同時に指摘しうる事が分かる。もっとも、例えば図中で「希格」とした箇所でも、第三期岩崎式日本語の「希格」を取り巻く位置にあるとの意味であって、「及希間格」から「希能間格」までも含んでいることはあり得るのである。

さらに、有生物と無生物という分類が、主格言語話者の世界認識からの解釈で、やるべきでない危険な解釈であることはすでに活格言語の箇所でも述べたが、水海道方言についても、少なくとも生命体と非生命体とを今の標準日本語話者のように分類しているわけではないだろう。「ごと」と「φ」、「げ」と「さ、へ」、「が」と「の」と「な」の違いは、少なくとも行為と状態という分類（活格言語）以前にとどまるものであって、有生物と無生物の厳格な区別などという自然観は、京の都同様、水海道地域にも古来より無かったであろう。

なお、ここに挙げた解離性障害者・性的被害者女性の例は、現在一般の医療で脳の言語野の障害（ウェルニッケ野・ブローカ野）、人格障害などの誤った疑いを受けたものである。もちろん、脳をいくら調べても器質的な異常は観察されなかった。第三期岩崎式日本語においては、言語障害なる概念は、それ自体として実在するものではなく、主格言語社会が作り出した概念にすぎないと見るのである。

第三期岩崎式日本語文法解説（25）

格詞・燈詞・助詞・助動詞等についての留意点

2006年1月10日 起筆

2009年7月9日 改筆

岩崎 純一

次に、第三期岩崎式日本語における現代日本語の助詞・助動詞の使用法を示す。

まず、主我においては、第三期岩崎式日本語は現代日本語に一致する。自己意識が活我から空我に戻っていくに従って（解離の程度、言語障害・失語症の程度、性的被害などによる心的外傷の程度が高まるにつれて）、使用可能な現代日本語の助詞・助動詞が少しずつ減ってゆく。これは、それらの概念を理解できないのではなく、それらの概念が未分化であり、第三期岩崎式日本語の格詞がそれらの概念を内包していることによる。以下に、補足的説明を加える。

■空我以前においては、主観と客観、時間と空間、過去と現在と未来、自己と他者、能動と受動、名詞や動詞や形容詞などが基本的に全て未分化で、同一視され、時制・相・法・態といった文法範疇が存在しない。

■例えば、「読む」行為が「近い未来の仮定」であるとき、「読まば (yom・a・ba)」となるが、この「a」は、本来は第三期岩崎式日本語の言のはたらきと同じであるという解釈を第三期岩崎式日本語では行う。そしてこの解釈は、これまで説明したように、重度の解離性障害者女性たちによる動詞の活用への理解の失い方から見て、真であるだろう。すなわち、「動詞の活用」とは、「行為の焦点性」である。

■時制の「過去・現在・未来」の絶対時間的直線性は、厳密には主我段階まで存在しない。現在の過去形「た」は、真格段階でも使えるが、真格段階の時制は相の「たん（第三期岩崎式日本語固有語）」「たり」「けり」「き」「つ」「ぬ」などで表してもよく、それらは「即然（そくぜん・すなはちしかり）」が「已然（すでにしかり）」と「未然（いまだしからず）」に分化するまでの連続的变化に基づく。第三期岩崎式日本語では、「けり」「き」も時制と相の未分化語であると見て、「過去」とは見ない。

■極性（肯定形と否定形）については、「ない」「なし」「ず」などが普通に使えるが、空我以前では、ごくまれに極性が消失する場合がある。すなわち、肯定文と否定文とが同形（「即非文」）でも許される。「即非」とは、鈴木大拙の「即非の論理」からの用語で、「Aは非A」である。よって、「A」を表す。実際に、幼児や重度の解離性障害者女性では、否定表現の分

化が見られないことがある。西田幾多郎の用語に従えば、自己が絶対矛盾的に同一している。第三期岩崎式日本語の空我以前の話者は否定表現を使わないことがあってもよい。

■空我以前では、「名即心（めいそくしん）」という考え方をする。これは、「名前を与えることがすでに心を含んでいる」の意である。空我以前の話者が「私、本、読む」と言うとき、「私ね、本読むの」といった助詞の心的表現は、排除されているのではなく、「名詞と動詞」がそれ自体であると見る。

■格助詞とされている列挙の「や」、副助詞とされている並列の「も」などは、重度の言語障害を負っていてもめったに理解が失われず、幼児においてもかなり早い時期（他の格助詞を覚えるよりも早く）に列挙・並列の概念として習得される。これらは第三期岩崎式日本語のどの段階でも用いてよい。

また、性的被害などで後天的に失語に陥った場合も同様で、その他の格助詞（いわゆる文法格）の使用がほとんど破滅的に失われても、なお列挙・並列助詞の概念は失われない。例えば、

「彼女が花に水をあげる」

「彼女も花も美しい」

とでは、前者が理解できず後者が理解できるという状態が起こる。従って、列挙・並列助詞は、空我・識我・具我段階の第三期岩崎式日本語話者に対しても使って構わない。

■感動や詠嘆を表す終助詞がむしろ近主我段階にならないと現れないのは、終助詞で表されるそれらの概念が格助詞（格詞）や言に内包されているためである。

■助詞「ば」の使用法の一つである仮定表現は、第三期岩崎式日本語では、現代日本語のように仮定形に付かず、未然形に付くことも多い。

■「けれども」「が」などの逆接表現は、重度の解離性障害者女性・幼児においては、順接表現よりも理解が遅れる（乏しい）傾向にある。これは、逆接表現をするような事態が幼児期には起こりにくいからであると考えられる。また、性的被害により失語に陥った女性も、まずは逆接表現から順に失っていく傾向が見られる。一方、助動詞の「ない」「なし」「ず」は、先述の空我以前の段階を除き、重度の解離性障害者や幼児でも理解していることが多い。逆接なる概念と打消なる概念は、原始人類にとって異質のものである可能性があり、第三期岩崎式日本語では、具我・及我段階では逆接表現の使用のみを控える立場を取っている。すなわち、「食べ物が必要だけれども（食べ物が欲しいけれども）、食べ物がいない」は、単に「食べ物がいない」ことよりも後の時代（希我）以降に認識される。「食べ物が欲しい。そして、食べ物がいない」などと言いたほうが望ましい。

■話題格「は」は、特に具我や及我あたりまでは、格詞の「んで」「で」自体が話題格的であるので、「は」は補助的に使われる。

■「る」「らる」「れる」「られる」は、幼児期（かつ日本語史）の最初は「自発」として理解される。次に「自ら利益になることを望む」ことが可能となる希我時代になって、「可能」が分化する。「可能」は、平安時代には「できる」の意として多用されたが、「できない」不満を伴うことが多くなって「れず」「られず」（他に「え…ず」）表現が増える。さらに、能格時代を終えると、「行為の実現可能性」への意識が生じて「受身」が分化する。さらに、「これ（あなたに）使われますか？」との婉曲表現から「尊敬」が分化する。

逆に、後天的に言語障害に陥ると、まずは「尊敬」表現から順に失われる。第三期岩崎式日本語話者もこれに従えばよい。「尊敬」や「受身」としか受け取れない文を主我に近い人が書いたとすると、特に真我初期段階の重度の解離性障害者女性たちにはなかなか理解されない可能性が高い。

■伝聞・様態・推量（「らしい」「ようだ」など）を表す表現は、「自己」と「自己と互いに影響を及ぼし合う他者・物体・自然界」との区別ができ始める及我の時代になって主に生じる。

■男我燈（だんがとう）「を」「お」（漢字で「男」「男我」「益荒男」「士」など）は、対女性共感覚（私のメインサイトや著作を参照）を表現するために用いられる。古語において、女性に対して「にほふ」「かをる」「みゆ」などが使われたのと同様である。あらゆる語に付いて、対女性共感覚を有しない現代一般の日本人男性との知覚の違いを文法上で表明できる。

■神仏燈（しんぶつとう）は、第三期岩崎式日本語話者の巫女や仏門関係の女性（もっとも、職業巫女や尼ではなくとも、いわゆる巫病的な解離・統合失調症状を起こした女性）が神仏に託して物を言うときに用いられる。男性が用いてもよい。

■第三期岩崎式日本語では、動詞の終止形は古語の終止形であっても構わない。次のような場合は、名詞に付く真格または絶対格によって動詞の意味が決定される。「shi・ma・ru」と「shi・me・ru」は、重度の解離性障害者女性らには「shi・m」までで「閉」の意味が認識されており、「a」と「e」の違いは、第三期岩崎式日本語の言（げん）で言う「う」と「い・あ」の違いと同一視される。従って、空我以前の段階に近いほど、動詞はほとんど古語の終止形か現代日本語の自動詞を用いるのがよいが、基本的に自由である。次の「閉まる」と「閉める」の違いは、「で」の有無による違いよりも、ずっと小さい。「ボクは扉

を閉まる」といった幼児期特有の「間違い」も、第三期岩崎式日本語では「間違い」とはならない。

「扉閉まる」＝扉が閉まる。

「扉閉める」＝扉が閉まる。

「みうて扉閉まる」＝及我の私が影響を及ぼしたことで扉が閉まる。

「みうて扉閉める」＝及我の私が影響を及ぼしたことで扉が閉まる。

■第三期岩崎式日本語では、形容詞は古語の「し」終止となってもよい。「美しい」の古形は「美し」であるが、「い」は第三期岩崎式日本語抽化言未然「い」に通じるものと見なす。「赤」は「明か（あか）」の意であるが、「赤という状態である」ことを強調・抽象化して「あかし」「あかい」となった。従って、第三期岩崎式日本語で「赤い」「美しい」と言うと、すでに抽化言未然の解離感を内包すると見なすため、解離感に浸って安堵する心描言としては、「赤いう」「美しいう」の他に「赤う（あこう）」「美しう」としてもよい。

このように、第三期岩崎式日本語の格詞・燈詞・助詞・助動詞体系は、現代日本語と古形日本語とを網羅した体系を持ちつつ、日本語の変遷過程が幼児の日本語習得過程に重なることをも同時に指摘しており、なおかつ重度の解離性障害者女性たちにも負担のない体系を持っている上に、それを東洋思想を基盤とする「自己意識」の流動という観点から説明している。第三期岩崎式日本語は、例えば以下の論文などで見事に指摘されている疑問点を、綺麗に解決しうるかもしれない。失文法などの言語障害の本質を未だ言語学が説明できていないのは、ひとえに、重度の解離性障害者女性たちが「世界を認識する」こと、あるいは「何かに感動する」こと、性的被害者女性たちの心が「傷つく」ということが、すなわち「幼児期の感性に前戻る」ことや「日本語の歴史をさかのぼって平安時代女性的自己を志向する」ことと同義である、という点に、体験的に気づける人が少ないからなのだろう。

「失文法患者の産出文に見られる到達点を表す「に」と起点を表す「から」の非対称性について」 井原浩子、藤田郁代（1995）

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/ljs2/meetings/111/abstract/212.shtml>

「失文法患者の主格を表す「が」の産出状況に関する意味的要因について」 井原浩子、藤田郁代（1996）

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/ljs2/meetings/113/abstract/123.shtml>

「産出面からみた失文法における格助詞」 西部真由美

『岩崎純一全集』第八十七巻「芸術、文化、言語、文学（二の七）」

<http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/dspace/bitstream/2237/5704/1/BZ002610143.pdf>

「幼児の単一項文の理解からみた格助詞理解と作動記憶容量のかかわり」 水本豪

http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/linguist/doc/mizumo/LSJ136_poster.pdf

「幼児の格助詞に基づく文理解に及ぼす作動記憶容量の影響 一述語前置型単一項文を用いた検証一」 水本豪（2008）

http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/linguist/doc/mizumo/FLC2008_handout.pdf

第三期岩崎式日本語-使用者分布

第三期岩崎式日本語-真格

第三期岩崎式日本語-我燈一覧表

第三期岩崎式日本語-質問実験回答

第三期岩崎式日本語-動詞の連続性

第一期岩崎式日本語-第一期～第二期岩崎式日本語言語変遷過程

第三期岩崎式日本語-言語変遷過程

第三期岩崎式日本語-話題格

第三期岩崎式日本語-水海道方言

二〇〇五年十一月二十四日 起筆

二〇一〇年十一月二十四日 執筆再開、加筆

二〇一一年六月十九日 加筆

二〇一二年一月三十日 加筆

二〇一二年七月三十日 最終更新

第三期岩崎式日本語文法解説における参考文献一覧

2005年2月20日 起筆

2010年11月23日 改筆

岩崎 純一

第三期岩崎式日本語文法解説を執筆するに当たり直接引用した文献を記す。

『岩崎純一全集』第八十七卷「芸術、文化、言語、文学（二の七）」

■精神疾患の国際統計

DSM-IV-TR（精神障害の診断と統計の手引き） アメリカ精神医学会（2000）

ICD-10（疾病及び関連保健問題の国際統計分類） 世界保健機関（2007）

■書籍

『言語学大辞典』（三省堂）

『岩波古語辞典』大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編（岩波書店）

『国歌大観』（角川書店）

『新編国歌大観』（角川書店）

『校註国歌大系』（国民図書）

『女人和歌大系』長澤美津編（風間書房）

『字訓』白川静（平凡社）

『字通』白川静（平凡社）

『字統』白川静（平凡社）

『古事記伝』本居宣長（筑摩書房版全集 第9～12巻）

『新訂 古事記』武田祐吉 訳注（角川文庫）

『日本書紀』（上）（下）坂本太郎ほか 校注（岩波日本古典文学大系）

『萬葉集』（一）～（四）高木市之助ほか 校注（岩波日本古典文学大系）

『萬葉集釋注』（全十巻 補巻一卷 別巻二巻）伊藤博（集英社）

『古今和歌集』佐伯梅友 校注（岩波日本古典文学大系）

『新古今和歌集』久松潜一ほか 校注（岩波日本古典文学大系）

『和歌史』全五巻 久松潜一（東京堂）

『音幻論』 幸田露伴（1947）

『意識と本質 精神的東洋を求めて』 井筒俊彦（岩波文庫、1991）

『日本語に主語はいらない』 金谷武洋（講談社、2002）

『世界言語への視座 歴史言語学と言語類型論』 松本克己（三省堂、2006）

■論文

「日本語の獲得過程で現れる主語標識の分裂」 鈴木猛（東京学芸大学紀要人文社会科学系. I Vol.58、2006）

「言語獲得のモデル」 櫻井彰人、酒井邦嘉（数理科学 444、2000）

「能格的なものの発展をめぐって(1)～(10)」 近藤健二（Studies in language and culture、1994～2002）

「漢語動詞の自他体系の近代から現代への変化」 永澤済（『日本語の研究』第3巻4号、『国語学』通巻231号、2007）

『岩崎純一全集』第八十七巻「芸術、文化、言語、文学（二の七）」

「非情の受身表現考」 宮地幸一（『近代語研究』第二集、武蔵野書院、1968）

「非情の受身について」 小杉商一（『田辺博士古稀記念国語助詞助動詞論叢』、桜楓社、1979）

「何故受身か？—＜視点からのケース・スタディー＞—」 奥津敬一郎（『国語学』132集、1983）

「非情受身とその類似機能表現」 田中道治（富山国際大学人文社会学部紀要 vol.2、2002）

「水海道方言の四つの斜格」 佐々木冠ほか（『一般言語学論叢』2、筑波一般言語学研究会、1999）

スラフォーリア研究会サイト更新

2010年11月24日 起筆、擱筆、公開

スラフォーリア研究会のほうに「思想体系」や「文法解説」を掲載しました。メンバーの方にはパスワードなどをお送りします。

文法解説と言っても、言語学だけでなく、哲学・国語学・東洋思想・和歌・精神疾患など、僕の頭の中にあるものを色々を含めた膨大な解説になっていますので、これらに親しみのない方が唐突にこの言語に手を出そうとなさると、きっと大変疲れると思います。

たった一人だけ、スラフォーリアを「ほぼ完璧に」使いこなせる重度の解離性障害者で、現代の標準日本語によるコミュニケーションが苦手な方がいらっしゃいますが、この方はかなり哲学的な問いを僕に考えさせてくれます。

つまり、この方が他者に向かって、「私は今の日本語は話せないし、苦しいけれど、スラフォーリアなら話せる」という主張をしようと思ったら、現代日本語ではできなくて、スラフォーリアのような言語でやるしかない、ということです。普通の言語学ではこんな問題は起こりません。だから、僕のやっていることは言語学ではなくて哲学なのだろうということです。

人間にとって「他人に自分の気持ちを伝えるとはどういうことか」ということを、これからも考えていきたいです。

鬱病や解離性障害を負った方々となぜそんなに会話したいかと言えば、やはりそれは僕の情熱や執念がそうさせているのだと思います。「こういった方々がなぜ言語障害を負いやすいか」を、感受性と論理性の両方から語っていくことが重要なのではないかと僕は思っています。